

『地理学科の葉』第11版の刊行に際して

ようこそ法政大学文学部地理学科へ！ 私たち地理学科スタッフ一同、みなさんを心より歓迎いたします。

この冊子は、これからみなさんがこの地理学科で過ごすことになる日々が有意義なものになるようにと、さまざまな情報を集めてまとめたものです。みなさんがこれから付き合う教員たちの自筆のプロフィール、大学という場での、そしてとくに地理学という学問の学び方の手引き、さらに過去の卒業生たちからの学生生活へのアドバイスなどが書かれています。しっかり読んで、役立ててください。

今日からみなさんを待っているのは、経済的な側面を除けば、制約の少ない、とても自由度の高い生活です。受講計画の立て方にしても、学食でのメニュー選びにしても、また一日の時間の使い方にしても、選択肢が数多くなります。その数ある選択肢の中から、自分の責任で（ここが大事なところですよ）どれを取るかを決めなくてはなりません。4年間という在学期間があるので、多少の失敗はいくらでも取り返せますが、卒業生たちが異口同音に残していくのは、あっという間に4年間が過ぎたという感想です。あまり悠々としてはいられないかもしれません。

さて、よく大学を卒業して社会に出る、という言い方がなされます。でも、大学と社会とを別物のように考えるのはおかしいと私は思っています。大学だって一つの立派な社会です。立派な、というのは、その中に楽しいことも苦しいことも、目新しいことも慣習的なこともあり、それなりに守るべき決まりもあり、たくさんの矛盾や理不尽さも含んだ、関係する人々の組織体であるという意味です。みなさんは選挙権をもった社会人です。思い切り自分のやりたいことができる可能性がある一方で、みなさんを陥れようとする畏一甘言を弄する詐欺、犯罪行為への誘惑、ブラックバイトなどなど一もたくさん待ち構えています。だから、よくも悪くも社会の縮図そのものなのです。その中で自分の身を正しながら生き抜くことを、ぜひ学んでいただきたい。

大学は、真理を探究する場だと長く言われ続けてきました。しかし昨今の世界情勢はまるで、そうした言い方をほとんど無意味なものにしてしまっているかのようです。なにが真実でなにが虚偽かは、外形的にはなく、受け取る側のアタマの中にあるというわけですから。でも、そういう考え方はやはり間違っています。ネット空間などは、たくさんある現実空間のうちの一つに過ぎません。

大切なのは、情報を受け取るみなさん自身のアンテナを閉じてしまわないことです。イヤフォンで耳をふさぎながらスマートフォンの画面ばかり見つめているようではいけません。五感をできるだけ開放し、世の中にあふれる情報に直接触れ、その真偽を判断する術を鍛えてください。そうすれば、上にあげたようなたくさんの畏からは逃れられるでしょう。

かつて地理学の研究対象としてよく使われてきた「地域」ということばは、最近では「空間」とか「場所」ということばに置き替えられてきています。それがなにを意味するかは、これからしっかり勉強していただくとして、今はさしあたり、いろんな施設を探検して大学という「空間」のありようを探り、そこに自分の身を安心して委ねられる「場所」を見つけてください。「教室」がそうであるというのは結構な話ですが、それだけではあまりに殺風景ですから、できればそれ以外の「場所」を。自分自身の五感を信じて！

【2019年3月／中俣 均 記】

『地理学科の栞』第11版の刊行に際して	1
I 地理学教室の歴史と概要	5
II 専任教員のプロフィール	13
中俣 均 教授	14
中島 弘一 教授	16
伊藤 達也 教授	18
前杵 英明 教授	20
米家 志乃布 教授	22
吉田 智 教授	24
片岡 義晴 准教授	26
小寺 浩二 准教授	28
小原 丈明 准教授	30
山口 隆子 准教授	32
羽佐田 紘大 助教	34
III 学習の手引き	37
1 カリキュラム・学科事務室・実験室	38
(1) 地理学科のカリキュラムについて	38
(2) 取得可能な資格について	43
1) 教員免許状	43
2) 測量士補	44
3) 地域調査士	45
4) GIS 学術士	47
5) その他の資格	48
(3) 地理学科事務室の利用について	48
(4) 地理学科事務室の図書等の利用方法	49
(5) 地理学実験室と器材の利用方法	53
(6) 早期卒業制度について	55

2	現地研究		56
	(1) 現地研究とは？		56
	(2) 自然地理学分野の現地研究		57
	1) 地形学編		57
	2) 気候・気象学編		58
	3) 陸水・水文学編		58
	(3) 人文地理学分野の現地研究		59
3	卒業論文		62
	(1) 卒業論文とは？		62
	(2) 自然地理学分野の卒業論文		63
	(3) 人文地理学分野の卒業論文		67
4	各分野の学習		
	(1) 地形・第四紀学	前杵 英明	72
	(2) 気象・気候学	山口 隆子	74
	(3) 陸水・水文学	小寺 浩二	75
	(4) 文化地理学	中俣 均	77
	(5) 農業地理学	片岡 義晴	79
	(6) 社会経済地理学	伊藤 達也	81
	(7) 歴史地理学	米家志乃布	83
	(8) 都市地理学	小原 丈明	84
IV	ゼミナールの紹介		89
	自然地理学演習 (1)		90
	自然地理学演習 (2)		92
	自然地理学演習 (3)		94
	人文地理学演習 (1)		96
	人文地理学演習 (2)		98
	人文地理学演習 (3)		100
	人文地理学演習 (4)		102
	人文地理学演習 (5)		104

V	卒業後の進路		107
1	地理学科生の就職について		108
2	卒業生からの寄稿		
	(1) 地理学は記者生活に生きる	小野寺 隼矢	110
	(2) 将来を見据えて学ぶ	小宮山 貴大	111
	(3) 大学院に進学して	羽田 麻美	112
	(4) 地理学と仕事	福手 暁人	113
	(5) 地理学科を卒業して思うこと	藤田 はるか	114
	(6) 地理教員になって	地庵 栗加	115
	(7) 卒業して気づく地理学科の魅力	木村 圭吾	116
	(8) 地理学科での4年間	阿部 智代	116
	授業の風景		118
VI	学会		119
1	法政大学地理学会		120

I 地理学教室の歴史と概要

◆「自由と進歩の学風・法政大学」

この文言は、わが法政大学を紹介する大学案内などで、ほぼ固定化したフレーズである。「自由」という語句には様々な解釈が成り立つだろうが、多分この場合には、学生や教職員の教育上、および学問研究上での自主性を最大限に尊重する学風が伝統的に満ちていることを表現したものであろう。だから間違ってもこの「自由」が、まさに自由気ままに何を行なっても許され、規制もなく適当でいい加減という意味に受け取られては甚だ困る。同時にそれは学生のみならず、教職員も肝に銘じておくべきことであろう。

欧米社会の先例を引き合いに出すまでもないが、今日の日本のように大学へ進学する 18 歳人口が減少傾向にある一方で、社会人の再教育や生涯教育の意義が叫ばれている中、若干、社会の他分野の動向から遅れ気味とは申せ、教育界にもバブル崩壊の大波が押し寄せてきた。今後、高等教育界がどのように変質するかはかなり不透明である。もちろん、私立大学経営の採算云々を別にすれば、単なる入学者数の増加には善し悪しがある。とかく数のみ重視すれば、大勢の中にはそれだけ適当で安易な動機のもとに入学する学生も、確率的に高くなりやすい。今後、日本で生ずる大学の生き残り競争を想定した場合、数よりも質（学生と教育）の維持と向上にこそ、最大の関心と地道な努力を大学は払うべきであろう。

今、この冊子を手に行っている地理学科の学生諸君は、少なくとも法政大学の伝統的な校風と言われる「自由と進歩」の意味を履き違えることなく、入学時の適度な緊張感を保ちつつ、初志貫徹の強固な意志のもとに勉学に勤しんでもらいたい。その継続の先の地平にこそ、入学した地理学科の課程修了という到達点が自ずと見えてくるものと信じている。皆さんに対する我々教員側の対応姿勢もきっとそれを支援するはずである。

◆法政大学文学部地理学科の歩み

当然のことながら、わが地理学科の歴史を語るには、法政大学や文学部の歴史を抜きにしてはできない。既に存じているかもしれないが、法政大学は 1880 年（明治 13 年）に「東京法学社」として設立され、神田地区に校舎が在ったことにその淵源をもつ。その後、富士見の他地域を経て、1890 年に大学は現在の富士見地区に移転し、校舎を新築した。周知のように、それが今日では小金井、多摩の校地を含めて 15 学部を抱える総合大学へと変身している。

文学部そのものの礎は、1925 年（大正 14 年）に専門部第二部に高等師範科が設置され、そこに国語漢文科と英文科が設けられたことに有る。その後、1932 年（昭和 7 年）に高等師範科が高等師範部として専門部から独立し、5 年後の 1937 年（昭和 12 年）に先の 2 学科に加えて地理歴史科が増設された。そこでは当時の高等師範部長で、歴史地理学者でもあった野口保市郎氏の尽力があったと仄聞している。その際、地理学分野の教員を組織する任務は秋岡武次郎氏（当時、陸軍士官学校教授）に委ねられ、その秋岡氏が同学校所属の井上修次、渡辺光に声をかけるとともに、さらに岡山俊雄（明治大学）、多田文男（東京大学）碧海康温（文部省）、綿貫勇彦（駒沢大学）の諸氏らに委嘱をしたと言う。このようにして、専任・兼任の区別がないまま、現在に繋

がる地理学科は、文学部史学科とともに、当時、地歴学科として、この年に創設されたのである。この記念すべき第1期生の入学者数は15名であったと聞く。この1期生がその後中等教員資格の課程認可を得るために、猛烈に勉学に励んで文部省の試験を受けたと言われている。今日、皆さんが社会科のみならず理科の教員資格免許を取得できるのも、当時の1期生のこの努力のお陰である。

第二次大戦後、地理学科は、旧大学令による文学部第二部地理学科（1947年）、新制大学制度に伴う同第二部地理学科（1949年）を経て、1961年（昭和36年）に文学部第一部地理学科に移行して現在に至っている。この終戦直後のスタッフには、学科創設に関与した野口氏、秋岡氏の両教員はもとより、新井浩、入江敏夫、岡山俊雄、中野尊正、中野弘、服部信彦、渡辺光の各氏が名を連ねていた。しかし、戦後処理の過程で秋岡氏が追放されたため、代わって田中館秀三氏が主任教授として着任するに至った。

この間の1953年（昭和28年）に大学院修士課程が、また1956年（昭和31年）には同博士課程がそれぞれ設置された。さらに本学では1947年（昭和22年）7月にわが国で最初の大学通信教育部が開設され、当初、法学部法律学科のみが開かれ、3800名余りの本科生でスタートしたと伝聞している。それに関連して通信教育部の地理学科は、1955年（昭和30年）4月に設置され、初めて通信課程の卒業生を世に送り出したのが1956年（昭和31年）であり、その数はわずか6名であったらしい。それから以降、現在に至るまで通信教育課程の地理学科は全国で唯一の通信教育部にある地理学専攻の学科として世間の注目を集めつつ多くの卒業生を輩出してきた。このような地理学科の歩みの中で、当然ながら、通信課程のみならず通学課程や大学院からは多くの優秀な学生が世に出て、各々の立場で活躍をみせてきている。

一世紀を優に超える法政大学の長い歴史を顧慮すれば、本学において地理学科に係わる課程が、次々と整備されて充実を図って来られたのは、それこそ創設当時の多くの先輩教員や所属学生たちが大変な努力を傾注した賜物に他ならない。それに続いてその後、本学科で教鞭をとられた教員の氏名を、僭越ながら敢えてここで順不同で、かつ専任・兼任の区別なくその一部を列記するならば、先の諸先生方に加え、浅井辰郎、市瀬由自、大久保武彦、大貫俊、大矢雅彦、小川徹、鴨沢巖、北田宏蔵、関口武、津屋弘達、西川大二郎、能登志雄、保柳睦美、三井嘉都夫、矢沢大二、吉川虎雄、吉野正敏、渡辺一夫など、いずれも日本の地理学界、ないしその周辺諸分野で活躍する諸先生方であった。それゆえ、これらの先生方に触れずして今日の法政大学地理学科の歴史を語ることはできないのである。

その後、全国の大学を次々と巻き込んだ嵐とも言える大学紛争を経て、本学の地理学科では教員のスタッフの異動や退職が生じた。それに一部関連して教員構成が入れ替わり、地理学科の専任教員として後に就任したのは、山口不二雄（2006年3月に退職）、佐藤典人、中俣均、片岡義晴、小寺浩二、山本茂（2010年3月に退職）、漆原和子（2013年3月に退職）の各氏であり、さらに法政大学の学部等の再編に関わって教養部から本学科に移籍した中島弘一、吉田智、米家志乃布の諸氏がその後に加わり、2008年4月に伊藤達也氏が、2010年4月には小原丈明氏が、

2013年4月に前李英明氏が各々着任して現在に至っている。また地理学科生のために、様々な助言や対応、さらには学科の事務などを担当してくれる2名の事務嘱託の方が現在では交替で学科事務室に常駐している。もちろん、文学部の履修要項を手に入れば、学科のカリキュラム一覧表で分かるように、個別の科目担当の教員としては、我々専任教員以外に多くの兼任講師に出講を依頼して、日頃の学科教育にご尽力を願っていることは、口にするまでもないことである。

ところで先の国立大学の独立行政法人化を契機に、私立大学も含めた大学の自己責任が問われる中、「地理」という冠名称が消失傾向にあるのも事実である。それは、折しも地球環境の危機が殊更に叫ばれ、あたかもその時流に迎合するかのように「地理」の看板を書き変えた大学が多いこともその理由の一つである。しかし本学科は、文学部にありながら社会科教員の資格のみならず、理科の教員免許まで課程認可を取得した過程で携わった学科開設当時の教職員の労苦を思うと、そう易々と「地理」の看板をすげ替えるわけには行かない。

地理学科の創設から70年以上も経過した今日、後世を歩む者はこのような「地理学」の学びの場が維持され、提供されていることを真摯に評価し、その存在意義を十分に活かさねばなるまい。それこそが地理学科開設に全力を注いだ当時の諸先生、ならびに諸先輩への義務・報恩かと思う。このような歩みをもつ法政大学の地理学科に入学された学生の皆さんには、その歴史的な重みを双肩を感じながらも精一杯、自身の勉学上の成果をあげられるように、学科に所属する教員を代表して祈念する次第である。

◆「地理学科」とは？

地理学科生が就職試験などで面接試験を受ける際、“どういうことを学ぶ学科なの？”とか“君、変わっているね！”とかよく言われるらしい。そうならば、地理学科に入学した皆さんも、更にはそこで「地理」に携わっている我々教員も変人の範疇に入ってしまうのか？元来、わが国で地理学科を設置している大学が少ない上に、前述したように看板の書き替えが進む昨今、加えて高等学校のカリキュラム編成も絡んで、一層「地理学科」への動機付けや馴染みが薄くなっている事実も否定できない。その点において英文学科などにはとても太刀打ちできない。

また「地理」と言うと、世間では高校までの社会科地理というイメージが強く、なかなかその先入観を払拭するには苦勞する。だからそのような思い込みで地理学科の門を叩く学生も多く、最初はいささか戸惑いを覚えるようだ。もちろん中には鉄道マニアや旅オタクに近い方も居るようだが、それらと学問的な「地理学」との間には厳然とした差異がある。

敢えて地理学の対象を簡単に申すならば、地表近傍で生起する時間・空間的な分布現象の規則性、あるいはその地域性を科学的視点から追究する学問とでも言えよう。自明のようにその現象には自然現象もあれば、人文・社会現象もある。だから主として前者に関心を置くのが自然地理学であり、後者を対象とするのが人文地理学である。それゆえ、大学によっては各々の学部・学科設置の経緯などとも関連して、地理学科が理学部に所属したり、文学部に置かれたりしている。既述のように、法政大学では文学部の地理歴史科としてスタートしたがゆえに、文系学部ながら

自然科学的色彩の濃い分野を併せ持つ学科として特異性を発している。仮にこれが理学部に属していれば、逆の面で異質ぶりを放ったであろう。

今述べた自然地理学と人文地理学は、いずれも実は一般地理学を構成している。地理学ではこの系列に対して地誌学の系列がある。1つの学問の中にこのような2つの系列が相対していることを、いわゆる『地理学の二元性』と称しており、この事実は別項で後述する地理学科のカリキュラムにも反映されている。

したがって皆さんは地理学科に所属して、当面そのカリキュラムの学年進行に沿った科目を履修して学ぶことになる。ただし、地理学は自然現象と人文・社会現象との境界、言わば文理の複合領域的な性格を帯びており、周辺諸科学の基礎知識も時と場合によっては要求される点を忘れてはならない。その点において学部段階では、学ぶ間口を広く構える必要があるだろう。

◆地理学科を特徴づける関門の一つ

自然現象から人文・社会現象まで幅広い分野を抱える地理学には、それらを網羅すべく科目を配置する必要に迫られる。また教室での講義内容を現実の野外で観察し、その確認と理解を深めることも自ずと要請される。地理学科のカリキュラムに関しては別途に後述しているので、必ずそれを読んで欲しい。

ところで地理学科の最終関門として「卒業論文」を課されていないとしたらどうだろうか？私には未だ知る由もないが、それは天国みたいなものだろうか？入り口を突破したら出口までフリーパスだとしたら、果たして皆さんは喜色満面として笑顔を見せるだろうか？聡明なる皆さんは決してそうではあるまい。

人間、何もしないでじっとしていることは予想外に辛いものであり、時として苦痛さえ伴う。何も要求されない学生もこれと同じではないだろうか？このような苦痛を回避する意図から？地理学科としては「卒業論文」を必修として課している。

また地理学科では「現地研究」という学科独特の野外実習も必修に課している。少なくともこれをクリアせずに卒業と言う名のゴールに辿り着くことはない。卒業論文や現地研究についても別途に説明しているのでやはりそれを一読して欲しい。

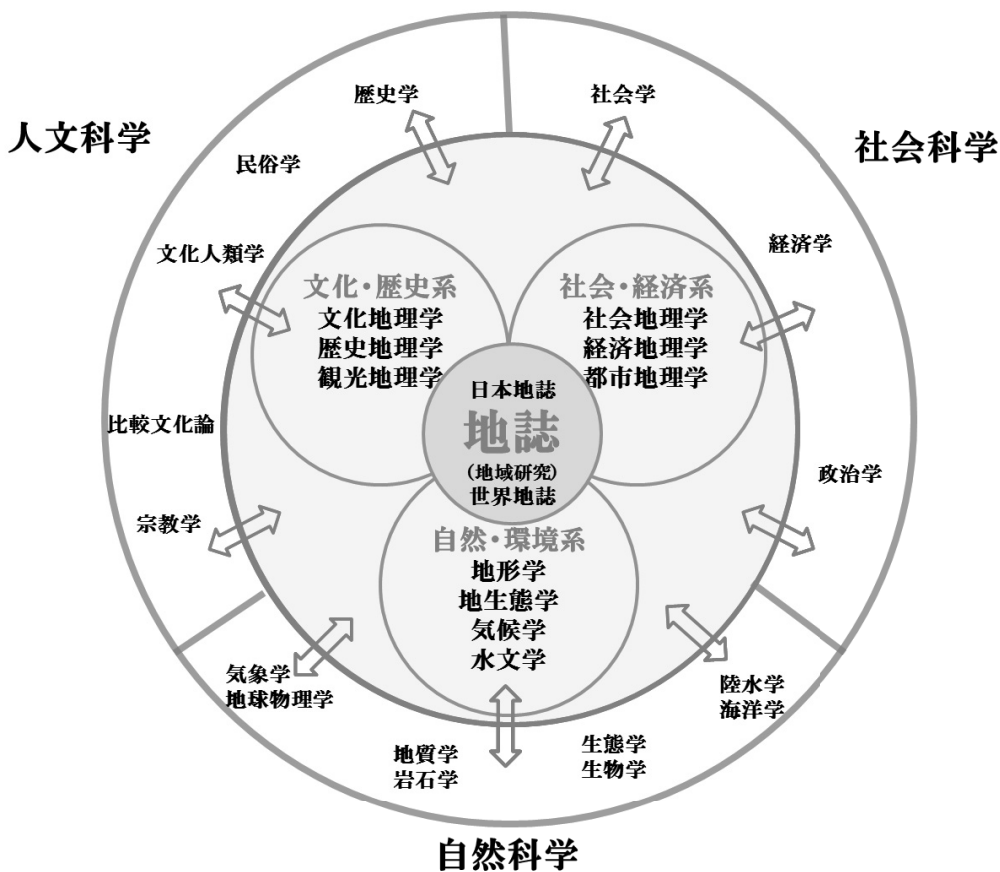
結果的に卒業生の多くは、卒業論文の作成に臨んで良い意味でとても苦勞し、さらに現地研究で教員や同じ学科の仲間と寝食を共にしながら親交を深められたことを、後々まで懐かしむのも事実である。何事においても樂するよりも難儀をし、左団扇よりも汗水垂らしたほうが強烈な思い出として残るようだ。

さて、これまで述べてきたように、文学部にあつては異色の学科とも言える地理学科の扉を開けた皆さんの決意に対し、まづもって歓迎の意を表したい。さぞかし卒業するまでに、皆さんが一人前の立派な『塵屋さん？』ではなくて『地理屋さん』に成長されていることと確信している。でも『地理屋さん』では効率良くメシを食えないかも知れないが？いや、学問は本来、メシを食わしてくれる保証をするものではないだろう。案外、一緒に学んだ友人や先輩、それに後輩がメ

シの種を世話してくれるかも知れないのだ。それゆえ仲間を大切にしよう！

ともあれ、法政大学の地理学科に在籍中、皆さんが「地理学」を相手に悪戦苦闘する過程で全力投球を心がけ、精一杯、精進してくれることを心から期待して止まない。努力は必ず報いられるはず？だから。天は静かにじっと皆さんを見ている。

【名誉教授 佐藤 典人／2007年3月記 一部2013年3月加筆・修正】



Ⅱ 専任教員のプロフィール



地理学と異端者

生まれたのは辛うじて 20 世紀後半(!)。新潟県の中部海岸付近にある柏崎という町で育った。その昔は近在の縮(ちぢみ)の集散地、私の小学校時分の社会科教科書には、日本の石油産業の中心地と書いてあり、確かに小学生の時に遠足で、近郊の油田・油井を見に行行った覚えがある。最近ではそうした歴史の形跡は全く消えうせ、東京への電力供給を担う原発銀座になりさがってしまった。東京の人達は、なさけなくも自前で電気も作れないのだ・・・！

上京して大学に入り、地理学を専攻することになる(東京大学理学部・同大学院)のだが、その動機については、旅行好きだとか鉄道ファンだとかいったありきたりの理由は、気恥ずかしさもあって自分では認めたくない。ただ一方で、何を専攻するかで悩んだ記憶もあまりなく、すんなり地理学へと突き進んだのが、今もって不思議である。朝早く起きて、定時に通勤電車に乗って…といった規則正しい生活は自分にはとても無理。暑さに弱く大変な汗かきなので、真夏に背広を着てネクタイを締めるのはゴメンだなどとは密かに思っていた。新聞記者にもあこがれ、某社の入社試験を受けてもみたが、採用されたもののわけあって入社は断念。後に、記者業は「不規則だけれど超激務」と聞かされ納得…。それやこれやで、大学勤めをすることになった(いや、大学勤めも近頃はおおいに激務なんだけど)。博士課程を中退して 1980 年から 4 年間、松江市にある島根大学法文学部に勤務。地理学と社会学と文化人類学のスタッフが寄り集まって一つの教室を形成するおもしろいところで、わけもわからず文化人類学の講義を担当させられたりして、ずいぶん勉強になった。84 年 4 月法政大学に着任。97 年博士(理学)(東京大学)。

旅が好き、というのは、別に言えば腰が落ち着かないということだ。96 年から訳あって住まいを故郷に近い新潟県長岡市に移し、毎週の東京への“出張”生活を始めて現在に至っているが、この状態、性に合っているのかなかなか気に入っている。本や資料が増えてしまって、地価の高い首都圏ではそれらをまとめて所蔵する空間を持たず、知的活動の場は主に自宅の書庫と書

齋で、東京はそれらをアウトプットするところ。自嘲気味に「出稼ぎ生活」と呼びながらも、歳をとってくると大都市の無機質な空間にいるよりも、緑あふれる田園生活の方が落ち着くのも確かである。歳といえば、朝起きは弱かったはずなのにこれも最近では、1限の授業がほとんど苦にならなくなった。悲しき老いの証拠には違いない。朝の大学キャンパスは、空気はいくらかとはいえ良いし、教室の学生は数少ないし、一日が長く使えるし…。とはいえそれは、果たして喜ぶべきことかどうか…。その“出張”期間を日数に換算し折半して計算すると、私のこれまでの人生は、表日本と裏日本(価値判断を含む用語だとして使われなくなって久しいが、私は裏を好む屈折した性格なので敢えて用いる)とで、ぴったり半分ずつの時間と過ごしてきたことになる。この比率、しばらくは変わるまい。こんなことを自慢してもしようがないが、一箇所に腰を落ち着けて、頭の上を過ぎ行く「時間」の流れに身を委ねながら自らを高めてゆくのを理想とする日本人の生き方、つまりそれは「歴史好き」ということで(でも、その割に日本人は歴史に学ばないけれどね!)、そういう規準で見ると明らかに少数派、異端であろう。そう、その異端さが、地理学を選ばせたのではないかと近頃では思っている(すると地理学は異端者の学問か?)。看板に掲げる専攻分野は、文化・社会地理学と奄美・沖縄の地域研究、それに後者から派生した島嶼研究だが、これに関しては、単なる島フリーク、島オタクだと噂するゼミ生の声も耳に入ってくる。現在、法政大学沖縄文化研究所所長。趣味は、各種室内盤上遊戯と、ほぼ50年来のローカル私鉄廃線跡探訪。47都道府県庁所在地に足跡を刻すとの課題は、すでに89年の佐賀市をもって完遂し、次なる生き甲斐はなかなか見出せない。日本の有人島全てに上陸するというのはあまりに迂遠だし…(それでもフィールドとする奄美・沖縄の50余の有人島のうち、未上陸は5つほどになったけれど)。その昔、ステーションホテルと名のつくところ全てに泊まるというのを考えたこともあったが、さすがにバカバカしくなって挫折。疲れた時は眠る(半ば眠りながら講義することもある。見ものだと思うのでよくご注意を!)、太った時は旅をする、というのが健康法。但し、実生活は不健康そのものと自覚してもいる。群発性頭痛という厄介な宿病があり、2年に一度、1~2ヶ月間体調不良時期が襲来するので、迷惑をお掛けするが御寛容願いたい。

研究室はBT1319であり、オフィスアワーなどについては、文学部シラバス巻末の教員紹介ページを参照してほしい。



田舎暮らしの思い出

生まれは北海道十勝支庁の池田町利別という町である。幼稚園に入る頃にはこの町を離れ、残念ながらここでの生活のことは何一つ記憶がない。幼稚園の頃は「陸別」という町に住んでいた。陸別は最近「オーロラ」が観察されることで少し知られるようになった（銀河の森天文台 <http://www.rikubetsu.jp/tenmon/>）。利別も陸別も地名に「別」という文字がつく。私が子供の頃に住んでいたあたりにはこの「別」という文字がつく地名がやたらと多い。これはアイヌ語の音をそのまま漢字に当てはめたため、「ペツ pet」は川を表すらしく、利別にも陸別にもその地名の川が町の中を流れている。北海道には変わった地名が多いが、それらはいずれもアイヌ語から由来する。弟子屈（てしかが）、大楽毛（おたのしけ）などは釧路地方の地名だが、多くの人はふりがなが無ければ読めないのではないだろうか。

さて、小学校一年生は究極の田舎町に住むこととなる。根室支庁の和田村である。駅名は西和田、北海道の東端、根室半島の付け根付近の小さな村。駅前にわずか2軒の商店があるほかは、郵便のポストがあるだけの実に寂しい村だった。当時の一年生はたった2名しかおらず、かすかな記憶では二年生と同じ教室での複式授業だったはずだ。当時、どこの小学校でも夕方になるとドボルザークの「新世界」が校庭から流れて来たように思うが、今でもこの曲を聞くと私が連想するのはこの村のシーンである。父親の仕事の関係でこの村を離れてから一度も再訪したことはないのだが、Google map（航空写真）で見ても、当時を思い出すものは何も見つからない。駅が無人駅となったために、いっそうさびれてしまったのではないだろうか？当時の小学校や2軒あったはずのお店も判別することはできなかった。

小学校二、三年生は釧路市で過ごした。わずかに商店二軒の田舎町から人口20万人の都市への転校である。転校間もないころ、道に迷って見知らぬおじさんに家まで送り届けてもらった。そんなに難しい道ではないのだが、下校時、校門を出た時に、帰路とは反対の方角へ帰る生徒たちの

方が多くて、どういうわけかそっちを選択してしまった。朝は天気良かったのだが、下校時は雨、私は傘もささずに歩いていた見知らぬおじさんに道案内を頼み、自分は一人傘に入って帰って来た。帰宅したとき、ずぶぬれのおじさんに送って来てもらった我が子を見て母は随分慌てていたことを記憶している。

さて、小学四年生からは浦幌町厚内という海辺の田舎町で過ごした。一年生の時の和田村ほどではないが、1学年25人ほどの小学校だった。その後1年半してまた釧路に戻るが、この厚内での生活が一番懐かしく、楽しい思い出も多い。北海道でも札幌や旭川など、日本海側や内陸では夏に30℃を超えることはそうめずらしいことではないが、道東のとりわけ沿岸地方では海流の影響で、おおよそ25℃が上限である。夏には海で海水浴ができるが、砂浜に木を積み上げて火をおこし、海から上がるとぶるぶる震えながらその火の周りで暖をとるほどである。まるで寒中水泳のニュースを見るようである。だから海水浴など年に1、2度しかなかったように思う。夏はもっぱら川で釣りをした。釣れるのは「ウグイ」という魚だが、少し山奥の小川のあたりでは、今は養殖魚としてしかお目にかかれない「ヤマメ」も釣れたように思う。家族で山に行ってふきなどの山菜をとったり、木の実を採ったりもした。なかでも熟した「こくわ」はとてもおいしい。味はキウイフルーツに似て（植物学的にはどうも同属、ただし、親指の第一関節ぐらいの大きさ）、果物などそうそう食べる機会のなかった当時ではごちそうだった。10年ほど前から田舎の父親が自宅の庭で栽培を始め、今は、秋になると取りきれないほど鈴なりに実が付くようになった。帰省するたびに、懐かしい味を楽しませてもらっている。山は本当においしい食材の宝庫だったが、問題は「熊」である。年に1度は「誰れさんがどこぞで熊に襲われた」なんていう話を聞かされているから、気の小さい私には気が気でない。山菜を探すのではなく、もっぱら熊が出てこないかの見張り役であった。もちろん、誰も私にそんな役目を命じているわけではないのだが…。

夏は楽しいことが多い反面、冬は寒いばかりで娯楽もあまり無い。特に道東地方はあまり雪が降らないので、近くにスキー場はなく、もっぱらスケートだった。グラウンドに木の板をトラック状に楕円に組み立て、夜中、水をまくだけで翌日からスケート場に早変わりする。晴れた日にはスケートも楽しいが、やはりかなり寒い。寒いと言えば、当時はアルミサッシなど無い頃で、学校も家も木枠の窓で、すきま風がひどく、どこの家も冬になるとビニールを窓枠に釘で打ち付けて風の侵入を防いでいた。暖は石炭ストーブだった。ドラマ「北の国から」は実に懐かしい風景だった。今の学生に石炭といっても誰も見たことが無いという。以前は、九州、北海道に大きな炭坑がいくつもあったが、今は北海道の一部を除いてほとんどが閉山してしまった。

高校を卒業して北海道を離れ、帰るのは帰省の時だけ、それも実家は今、帯広の郊外にあるので、小学校時代の田舎町をもう随分と訪れていない。廃れることはあっても、大きく発展を遂げるような、そんな場所ではいずれもないので、なかなか訪れる気になれないでいる。

主な担当授業	サイエンスラボ A/B、教養化学、光と色の科学 A/B、教職化学
研究テーマ	もともとは燃焼など炎の中の反応ですが、今は太陽電池を作っています。



環境問題と地理学

いま、私が地理学を専攻し、しかも環境問題に強い関心を持っているのは何故か。理由はいろいろあるけれど、多分、その中でも一番大きな理由かな、と思えるものを紹介してみたい。

小さい頃から川で遊ぶのが好きだった。川といっても本当は農業用排水路で、春になると水がたくさん流れてきて、秋になるといつの間にか水は減り、何となく流れがなくなってしまっていた（水はなくなりやしなかったけど、冬の間流れることなくよどんでいた）。小学生時代の夏休みはひたすら川で遊び、フナを釣ったり、ザリガニを捕っていた。フナばかりが釣れてコイが釣れると大騒ぎだった。一度亀が釣れたことがあり、家の甕に入れて飼っていた。川遊びに飽きるとむら中の木にしがみつくセミを捕まえた。アブラゼミが多くて、クマゼミはセミの王さまだった。子どもの頃、いったいどれだけのフナとザリガニとセミを捕り、殺したか。たくさんの殺生をした気がする。

中学校に入るとさすがに川遊びはしなくなり、川への関心も薄れていったが、あるとき、ふと気がつく、川がものすごく汚れていた。川の上流に住宅団地ができ、そこから流れてくる排水がそのまま川に流れ込んでいたのが原因だったと思う。川には捨てられたプラスチック容器がたくさん浮かび、水はいつも泡立っていた。さらに高校生になると、川は埋められ、暗渠になって地下を流れるようになり、川面を見ることができなくなった。たった幅2~3mの川（農業用排水路）だったけど、子どもの頃の一番の遊び場が消えてしまったのはとてもショックで、実は今も実家に帰ってもあまり川には近づかない。見えないし、遊ぶどころではないし。

私が専門で研究をしている水資源問題や環境問題との関わり方、そしてアプローチの仕方を知っている人は、上述の内容を知ると、きっと「ふーん」（それなりにわかったという意味）と言うと思う。どちらかと言えば、いや間違いなく理論指向ではなく現場指向であり、気の利いた発言をする評論家よりも問題の発生現場で格闘している方が落ちつくタイプの研究者でありたいと思

ってしまうのも、こうした経験が影響しているのだろう。川は川じゃなくて農業用水路（用排水路）で、ほんの2、3時間で飽きるほど魚が釣れて、遊園地ではないけど思いっきり楽しくて、決してきれいじゃなかったけど、夏は結構、小さな子供が水遊びしてた。人が住むところってそうした楽しい場所であって欲しい。夏のとてつもなく暑い日、たった一日で数百匹殺してしまったザリガニに申し訳なく、またザリガニがうじゃうじゃ走り回れる川を取り戻したいと思っている。

主な担当授業	社会経済地理学(2)、世界地誌(4)or(6)
研究テーマ	水資源問題、資源環境論、地域経済論
出身地	愛知県
略歴	<p>学歴 1990年名古屋大学大学院博士後期課程満期退学 2007年名古屋大学にて博士号（環境学）取得</p> <p>職歴 1990年金城学院大学専任講師、助教授、教授 2008年法政大学文学部地理学科教授、現在に至る</p>
社会的活動	愛知県長良川河口堰開門検討委員会委員
業績（著書・論文等）	<p>『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005</p> <p>『木曽川水系の水資源問題』成文堂、2006</p> <p>『水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008</p>
研究室の所在	80年館 617号室
オフィスアワー	月曜日 3限目
連絡先	tito@hosei.ac.jp

地形学専攻

前奈 英明 教授

Maemoku Hideaki



動かざること山の如し？

甲斐の名将・武田信玄の旗に書かれた「不動如山」の文字、あまりにも有名ですが、「本当にそうなの？」というのが私の研究テーマです。とは言え、戦国時代の日本史を研究しているわけではありません。私の研究テーマの大きな枠組みは「変動地形学」と申しまして、雨風氷の作用だけでは絶対に形成しえない、地球の奥底から湧き出る「妙な力」が働いてできる「変な」地形を取り扱っている分野です。もっとも、最近この分野に関する研究は、地形の成り立ちそのものが目的というより、地球の奥底から湧き出る力や運動を明らかにすることが主目的とされ、地形は手段の一つとして取り扱われる傾向にあります。こう書いてもすぐにイメージがわからないと思いますので、もう少し具体的に書きます。たとえば、三浦半島や紀伊半島など太平洋に突き出た半島の先端の方に行くと、妙に平らな台地の地形が、標高数十～数百メートルの位置に、海岸に沿ってずっと続いていることに気がつきます。関東では、そこでよく大根などの野菜が栽培されています。これはご存知「海成段丘（海岸段丘）」という地形で、平らな地形は、海岸線付近で波の侵食・堆積作用によって作られた昔の浅い海底平坦面そのものなのです。海の底でできた地形が、現在何十メートルも高い位置にあるということは、海面が相対的に下がったということになります。もう少し詳しく言うと、海面そのものの変化（主に海水量の増減）と陸地の地殻変動が重なっているわけですが、これら二つの変数を分離して、それぞれ独立してどれくらいの変化があったのかを明らかにすることは、大変重要な学問的課題になっています。海水量の変化は全地球的な規模で起こる現象なので、様々な方法により、おおよそその変化の歴史が解明されつつあります。陸地の地殻変動については地域によって違いますので、地道に調査して明らかにするしかありません。狭い地域の現象でも地道に調査して範囲を広げていけば、地殻変動の全体像を捉えることができ、さらに地球上の他地域と比較することによって、より普遍化された法則性を提唱できる可能性があります。日本列島のような「変動帯」では、大地は常に変化し動いています。普段は

気がつきませんが、たとえば兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）の時に野島断層という活断層が動き、何十キロにもわたって大地に食い違いができました。これは 2000 年に一度の出来事だったらしいのですが、何千年もじっとしている大地の突然の動きは時として大惨事をもたらす反面、科学者としては大変貴重な研究機会に遭遇できたとも言えます。武田信玄もあと 23 年長生きしていれば、1596 年の慶長伏見地震（伏見城倒れる）に遭遇し、「不動如山」は書き換えられていたかもしれません。

私自身は、このような研究分野の端くれとして、四国や紀伊半島の先端部に分布している隆起海岸地形を、貝殻やサンゴの化石を利用して、ここ数千年間の地殻変動史を復元する仕事をやってきました。同じような地形は房総半島や三浦半島でも観察できます。最近はこの研究の延長で、津波石とよばれる大きな岩を調べ、南海トラフでの昔の大津波を復元する仕事をしています。また、この研究以外にも、南極やグリーンランドで海岸地形から過去の環境変動を明らかにする研究をしたり、インド・タール砂漠の砂丘からインダス文明衰退の謎に迫ってみたり、好き放題やらせてもらっています。

私の経歴等は下記の表を見て下さい。

主な担当授業	地形学及び実験 I・II、自然地理学演習（3）ほか
研究テーマ	地形変化から地殻変動や環境変動を明らかにする。環境変化の人間社会への影響について明らかにする、など
出身地	広島県呉市
略歴	<p>学歴 1990 広島大学大学院文学研究科地理学専攻単位取得退学</p> <p>1992 広島大学にて博士（文学）取得</p> <p>職歴 1994 山口大学教育学部助教授</p> <p>2007 広島大学大学院教育学研究科教授</p> <p>2013 法政大学文学部教授</p>
社会的活動	南極観測審議委員会地圏専門部会専門委員（情報・システム研究機構国立極地研究所運営会議）2012～
業績（著書・論文等）	<p>隆起付着生物の AMS-¹⁴C 年代からみた室戸岬の地震性隆起に関する再検討. 地学雑誌, vol.110, 479-490, 2001.</p> <p>古代文明と環境 -インダス文明を中心に-. 地理科学, vol.67, pp.109-120, 2012.</p>
研究室の所在	BT1211
オフィスアワー	いる時はいつでもどうぞ。急ぐ時はアポ取って下さい。
連絡先	メール

米家 志乃布 教授

Shinobu Komeie



ロシアの風景～空港から街へ

日本の成田空港を飛び立つと、天気が良くて雲がなければ、飛行機の窓から広大なシベリアの大地が一望できる。それはもう、まったく未知の世界である。いつまでも続く長い河川とどこまでも広がる深緑のタイガあるいは雪に覆われた真っ白な大地。集落はほとんど確認できない。そして、日本からのアエロフロート便は、モスクワ北西郊外のシェレメチボ空港の国際線 D ターミナルに降り立つ。飛行時間九時間、やっとモスクワ到着だ。夏のモスクワはその美しい爽やかさにドキドキするが、冬のモスクワもまたドキドキする。どれだけ厳しい寒さがこの街を訪れる私を待っているのだろうか。飛行機が着陸した後すぐの機内アナウンスから、現地の気温と天気を知る。モスクワの気候は大陸性気候ではあるが、シベリアの諸都市に比べれば穏やかである。しかし、モスクワの年平均気温は 5.8℃、最暖月 7 月の平均気温は 19.2℃、最寒月 2 月の平均気温は -6.7℃である。東京の年平均気温が 16.4℃であり、札幌の最暖月 8 月の平均気温が 22.4℃、最寒月 1 月の平均気温が -1.5℃と比べると、やはり厳しい寒さであることがわかる。

シェレメチボ空港から市内へはタクシーで移動する。空港からはアエロエクスプレスという特急がでていて、地下鉄環状線の主要駅にたどり着いた後は、スーツケースをもって自力で地下鉄を移動しなければならない。モスクワの地下鉄は、深くて暗くていつも混んでいる。そこで、日本の旅行会社であらかじめ予約しておいたタクシーに乗って宿まで移動することがもっとも楽である。高速道路に乗るときもあれば、一般車道で移動するときもある。ただし、空港と市内を結ぶレニングラード街道の渋滞はひどく、この道を選ばないことが賢明である。いずれにしろ、車窓からモスクワの風景を眺めることは楽しい。

モスクワの緯度は北緯 55 度 45 分、東経 37 度 37 分、東京より 20 度北に位置する。ロンドンよりさらに北にあり、北半球北部の諸都市のなかではもっとも大きな都市である。植生は亜寒帯と冷帯両方の特徴を示しているため、モスクワの環状高速道路を走る車の窓からは、

針葉樹と広葉樹の交じり合った自然林を眺めることができる。しかし、モスクワ市内にある公園などにこのような自然林はほとんど残っておらず、開発の結果、人工的な林がほとんどであり、近年の温暖化のため、南方系の樹種も多い。

街に近づくと、モスクワ市民の足を支える地下鉄の駅がところどころにあることがわかる。赤字で「M」の看板があれば、そこが地下鉄の入り口である。モスクワの地下鉄は、その規模からはロンドンやパリなどには劣るが、人々の交通のウェイトに占める割合は高い。運行回数も多く、時刻表通りに正確に動いていることでも有名である。2015年には、全線にFreeのWIFIが導入された。また、この地下鉄駅の周囲には住宅が立ち並び、地下鉄の延伸とこの住宅開発は連動している。モスクワ中心部にはスターリン時代に建設された石造りで頑丈な建物もあるが、郊外にはその後に建設されたフルシチョフ時代の集合住宅が多い。すべて同じデザインで、安普請で老朽化が進んでいる。一方、近年では郊外には一戸建ての住宅地建設も進んでおり、モスクワ市民に人気が高い。

車窓から街並みを眺めながら、中心部に位置するホテルへ向かう。ホテルに到着すると、社会主義時代の名残を残した2000年代と異なり、いまや日本人には馴染みのある欧米化したサービスが受けられる。フロントやレストラン、売店などにも英語の通じるスタッフも増え、安心して滞在できるようになった。しかし、街中にはまだまだ英語の通じない場所も多く、やはり出張や自由旅行では、ロシア語は欠かせない。

さあ、いよいよ今回も調査開始、緊張感と高揚感で胸がいっぱいになる。これが、ここ10年間ほどの(私の)地理学者としての仕事である。

主な担当授業	歴史地理学 (1) (2)、人文地理学演習 (5)、地理学 I・II ほか
主な研究分野	歴史地理学 (日本・ロシア)、日本とロシアの地図史研究
教育の関心	歴史的景観保存の課題、歴史と観光産業の関係、地図史と国家・地域の表象
略歴	<p>学歴 1995年 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程中退</p> <p>2001年 お茶の水女子大学にて博士号 (人文科学) 取得</p> <p>職歴 1998年 法政大学第一教養部専任講師、助教授</p> <p>2003年 ロシア科学アカデミー東洋学研究所 (モスクワ) 客員研究員</p> <p>2007年 法政大学文学部地理学科教授 現在に至る</p>
業績 (著書・論文等)	幕末蝦夷地の絵図にみる地域情報の把握 (歴史地理学 198、2000年、歴史地理学会・学会賞)、『大地の肖像』(共著、2007年、京都大学学術出版会)、『北東アジアのアイヌ世界』(共著、2008年、岩田書院)、『日本人は日本をどう見てきたか』(共著、2015年、笠間書院) など
研究室の所在	BT1318
オフィスアワー	木曜日 4 限
連絡先	yamasi@hosei.ac.jp



原子核、雑感

原子核と聞いて皆さんは何を連想するであろうか。私は物理学を専門としていて原子核理論の研究を行っている。この冊子を読んでいる皆さんの中には、ひょっとすると一度も私と顔を合わせること無く卒業する人もいるであろう。一応、この場で研究紹介というよりは原子核について思うところを簡単に書くつもりである。もちろん物理を履修していなかった人にも理解してもらえるように書く予定である。

ところで、この宇宙で原子核はどのようにしてできたのか、ちょっと専門的な話になるが許してもらいたい。そもそも原子核は、一般に陽子と中性子と命名された粒子からできている。例えば、“酸素”の原子核は陽子を8個含んでいるし、“金”の原子核は陽子を79個含んでいる（気がついた人がいると思うが、元素の周期律表の原子番号が陽子の個数に対応しているのである）。原子核はこの宇宙全体であらゆる物体の基であるといつて過言では無い。

この宇宙は約137億年前のビッグバンと呼ばれる小さな、しかし現在の宇宙全てのエネルギーを足し合わせたほどの高エネルギーの状態からスタートしたと考えられている。無論その時には原子核は存在しなかったわけだから、その後つくられたことになる。現在、理論と実験、観測により次のことが明らかになっている。まず最初に、宇宙の膨張と共にまずクォークと呼ばれる素粒子ができ、そのクォークが集まって陽子や中性子がつくられ、そして陽子と中性子が集まって、水素やヘリウムといった軽い原子核が合成された。炭素や酸素を含む鉄くらいまでの重さの原子核は、恒星内部で起こっている核融合反応によって合成される。私たちの太陽も現在、核融合反応によって水素原子核（陽子）からヘリウム原子核が合成されている。その過程で発生する熱・光の恩恵を、この地球は45億年もの間受け続けているのである（残念かどうかは分からないが、私たちの太陽は鉄を合成するまでには至らず、約50億年後終焉すると考えられている）。そして鉄よりも重い原子核はというと、太陽より重い恒星の劇的な最後である超新星爆発時に合成され

るのである。

地球を眺めれば簡単に分かることだが、身の周りには鉄よりも重い原子核はたくさん存在している。亜鉛など、鉄よりも重い幾つかの原子核種は、人間の成長と健康維持に必須である。また地球上で、崩壊しにくい安定な原子核の中で一番重いウランも、ごくわずかの割合で海中や人体内にも存在している。これらのことから、“50 億年以上はるか昔にこの近辺（といってもかなり大雑把だが）にて超新星爆発が起こった。”そして、“その時に合成された原子核が再び集まることにより、私たちの太陽系はできた。”ということが分かるのである。その後、地球上には歴史上多種多様な動植物が現れた。地球も含めて、太陽系の起源は全て、超新星爆発を起こした星と言えるのである。

夜空を見上げると、いつもこの超新星爆発のことを想ってしまう。地球上では、これまで様々な生命が生まれ、そして現在人間が地球を闊歩している。この状況は奇跡だと感じてしまうのである。また同時に、そんなことを感じさせる人間の脳に対して、僅かながらも畏怖を覚えるのである。

冬の夜空に赤く輝くオリオン座のベテルギウスの超新星爆発が、近い将来見られるのではないかとされており、時折眺めている。数十億年先を想像しながら。

主な担当授業	入門物理学 A・B、サイエンス・ラボ A・B、教養物理学 LB、 原子核と素粒子 A・B、物理学実験（教職）、
研究テーマ	原子核理論、超新星爆発における元素合成に寄与する原子核構造の理論的解明
出身地	大阪府
略歴	学歴 1992 年 東北大学理学部物理第二学科卒業 1997 年 東北大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了 職歴 1997 年 法政大学第一教養部助手、専任講師、助教授 2003 年 法政大学文学部地理学科に移籍 2007 年 法政大学文学部地理学科教授
オフィスアワー	基本的に、いるときはいつでも。

「国境」に思う



もともと尻の重い方ですから、「調査」や出歩くことは得意ではありません。その中で、2003年に在外研究でタイに1年滞在する機会を得て、ミャンマー、カンボジア、インドネシアのスマトラ島に行くチャンスを持ちました。タイ国内をある程度移動する方法を知ってから、タイを起点にその近場で、しかも相互の「境界」に興味を持ったのでした。タイーカンボジア国境、マレーシアーインドネシア国境、タイーミャンマー国境に足を運びました。2003年の末頃（正確に言えば2003年12月30日）から2004年の帰国直前まで国境地帯を歩くことになりました。

一番印象に残っているのはタイーカンボジア国境でのある出来事です。国境の検問所にトラックが延々と列を作っているのに、バケット籠を持ったある女性が、タイ側から検問所脇の小道を通ってカンボジア側に行き（当然、正規の国境検問所は通過してはいません）、30分ほどして帰ってきた場面に出くわしました。

「どうしたの？」って尋ねたら、カンボジア側の国境警備隊からランチの出前注文が入ったから届けに行った、と言うのです（その時すでに携帯電話の普及はタイの方が日本より進んでいましたから、電話があったのでしょう。携帯基地局からすれば国境の向こうとこちらでは、距離的にたいした違いはありませんから、携帯電話に国境はないこととなります）。考えてみれば貨物を運ぶトラックからは金（関税）が取れますが、ランチを持った女性から金をとれたとしても少額に過ぎません。実に合理的だと思いましたが、その反面、人間のすることは一種の杜撰な側面を常に持ち合わせるものだと思ったのです。それと同時に人間は実に図太い存在だと思に至りました。生活の論理は「国家の論理」とは異なる、いやそれをいとも簡単に越えるのだと確信したのでした。「生活の論理」は民族や国家等という一種の幻想としての枠組みなど関係なく、いつの時代もどこの社会でも強固だと思ったのでした。

その光景をもし日本のテレビ局が撮影すれば、途上国の国境管理は杜撰だ、という報道になる

でしょう。しかしその合理性と共に、人の流れは止められないという事実を知ったのでした。カンボジアからタイへの労働者数（大半は不法労働者）は30万人とも40万人、いやそれ以上とも言われています。2016年初めに、タイの現軍事政権によって外国人労働者管理が厳しくなるとい噂が巷に流れるや否や、20万人近いカンボジア人が1週間の間にタイ-カンボジア国境に殺到したというのです。強制送還を恐れた人々が、「がせネタ」に翻弄され、国境に殺到するという愚を犯した結果と考えられます。

マレーシアのメラカ（マラッカ）からスマトラ島ドゥマイまでマラッカ海峡の横断航路に乗船したのも記憶に残っています。乗船客は大半がマレーシアかインドネシアの穆斯林女性で、物資豊富なマレーシアで仕入れ、スマトラに行商に行く女性達だと、ある乗船客が教えてくれました。出航時刻になってもなかなか出航せず、不思議に思っていたら、行商人達の荷物を積み込むのに時間がかかっていたのです。しかも河口付近に乗船場があるため小型船しか使えず、とはいえ小型船でマラッカ海峡を横断するのは速度が遅いらしく、沖合で少し大きい高速船に乗り換える必要があったのです。そのため、沖合で人も荷物も、積み替えざるを得ず、なお一層時間がかかってしまうのです。それだけで2時間は費やしました。

数珠つなぎと言って良いような、1km程度の間隔で大型船が行き交うマラッカ海峡を、Muslimの船長は実に見事な操舵で大型船の間を縫っていくのです。高速船ですから一体、何ノット出していたのか、大型商船に比べれば圧倒的な速さでした。商船大学志望だった私からすれば、その船長は実に格好良い操舵姿でした。マラッカ海峡は海洋交通の要衝といわれますが、それを実感させられました。

船内は多くの人であふれていましたが、帰りの船はガラガラで、彼女たちがマレーシアに帰るまで客足は少ないでしょう。小規模な行商は国境など人為的に引かれた単なる線など、いとも簡単に越えていくのだと、ここでも実感したのです。ムラユ語に起源を持つ言語をともに話すため言葉にも困らず、パスポートチェックは船内で行うという、目に見えない両国の利害関係の強さ、それよりも「国」という概念では線引きできない共通性に気づかされました。おそらくは、国内の行商と国境を越える行商との相違など存在しないでしょう。

「国境」によって人を管理することはそもそも困難なことであるにもかかわらず、管理可能だと思いついでいる人々がいかに多いか、EUを見ても日本を見ても、そしてアメリカを見ても明らかです。「国家」の役割をより強く意識する人、意識したい一部の人が発言を強め、国家の役割を再び強めようという風潮があることが気がかりです。そうした事実を目に耳にするとき、日本政府が外国人単純労働力排除を公に表明する姿勢をいつまで続けるのか気になります。外国人はすぐ隣にいるのに、いつまでも頬被りが通用するはずはありません。

主な担当授業	人文地理学特講（2）、社会経済地理学（3）、人文地理学演習（1）ほか
出身地	岡山県
研究室の所在	80年館 618号室

「境界」に魅せられて



私は、1961年の6月に岡山県西部の天文台と素麺（現在はうどんが中心）で有名な田舎町で生まれ、高校までをそこで過ごした。子どもの頃は本当に静かで星のきれいな町だったが、高度成長とともに、水島や福山の工業地帯のベッドタウンとして団地が造成され、町の人口が倍加した。新幹線が町の真ん中を通り山陽自動車道が開通するに至っては、立ち退き成金の御殿が美しくなかった水田を無秩序に埋めてしまい、田舎らしいのどかな景観が壊されてしまった。

そうした変化のまっただ中で育った私は、周辺地域の著しい変化に無関心でいることはできず、小学生の頃から社会科で新しいことを習う度に、自分自身で調べて確認しないではいられなかったのを思い出す。押しつけの暗記は嫌いだったので、「地理」の授業が好きだったと言うよりも、「地理的現象」についてのフィールドワークに強い関心を持ち、わからないままにいろいろなことを調べて回ったような気がする。

柿のなる季節になると、ポケットにいっつか突っ込んで、友人を誘って近くの山を探検に行った（花崗岩地帯で松茸など山の幸が多いところだったが、マムシも多く夏場は山に入れなかった）。山といってもせいぜい標高100～200m程度の丘のようなものばかりだったが、どの頂から見える山、川、海そして人間活動が作り出す複雑な景観には飽きることが無かった。小学校の低学年から始まり、高校卒業まで、次第に範囲を広げながら、無数にある頂に登った。時には山頂に城跡やため池を見つけて、古い時代に想いを馳せた。また、一方で小学5年生から新聞配達を始め、稼いだお金で買った自転車（今はなきユーラシア）を使って、近くの峠から始め、中学生時代に県内の主だったところを走破した。高校生になっても、将来への明確な目的もなく受験勉強に明け暮れる周囲の流れについていく気がせず、広島、鳥取、兵庫、大阪、四国へと県境を超えて自分の足で到達できる距離を延ばすことに夢中になった。

大学時代の1日350kmの記録をピークに、その後、自転車で走ることは少なくなったが、旅だ

けでなく専門分野への挑み方においてもそうした傾向は変わっていないようである。地理学への情熱も、小学生の時に得た感動—自分の力だけで認知できる地域や空間を広げていき、認識の上で境界が変化することから得られた驚き—が、もとになっているような気がする。現在では、「地理学」という学問の世界の中で、身近なところに境界となる小さな山や尾根を見つけては上り下りしているわけである。自然科学、人文科学、社会科学といった区分の中ではもちろん、自然科学に限ったとしても様々な分野の境界域に地理学の活躍舞台がある。だからこそ地理学はおもしろいのだが、実は境界の上にもたがってじつと眺めているだけでは、本当の意味で境界を認識することはできない。とりあえず、どちらかに降りてみて、もう一方の側へ境界を超えてみる必要がある。案外、本当の境界は隣の尾根にあったりするもので、繰り返し繰り返し目の前にある頂に挑戦し続けていかなければ、本当の境界にはたどり着けない。理解できたはずの景色も、別の尾根からはまるで別のものに見えるかもしれないのである。私は、自転車に限らずスポーツなら何でも好きなのだが、水泳では何といてもバタフライである。そのバタフライのドルフィンキックにたとえてこの境界性を説明することもできる。身体を地理学もしくは研究課題とすると、水面(気体と液体の境界)のような境界にただ浮いたのでは前に進めない。ジタバタするだけでも進まないが、適度な位相と周期性を持って動けば身体(地理学や研究課題)は想像以上に早く進んでくれる。できるようになれば何でもないが、基本的なトレーニングをしっかりとっておかなければまず進めない。地理学で言えば、それはフィールドワークをベースにした実習であり、やはり回数をこなさなければ力は付かない。地理学に行き詰まったら、バタフライをしてみてください(何かが見えてくるはず。後ろ半回転飛び込みなども効果あり)。

ぜひお試しのほどを。

主な担当授業	地学実験 (1)、海洋・陸水学及び実験 I・II、自然地理学演習 (2) ほか
出身地	岡山県
研究室の所在	BT1208



「実感」の必要性

しばしば授業の中で、「自分なりの都市の定義を考えなさい」という課題を出している。もちろん、地理学をはじめ都市を扱う学問のテキストを読めば都市の定義は記されているが、上記の課題はそのような教科書的な解答ではなく、受講生自身が考える定義を求めているのである。それぞれの受講生が記した解答を見ると、「都市」というものの捉え方が人によって大きく異なることに気付かされる。東京などの大都市を想定する者がいる一方、ある者はもう少し規模の小さな地方都市を念頭に置いていたりする。そうすると、自ずと「都市の定義」も大きく異なってくることになる。

このような差異は、解答する者それぞれが生まれ育った地域に由来すると言えよう。つまり、大都市の内部・周辺で生活してきた者にとっては「都市」の代表的な事例がその大都市であり、地方の小都市で生活してきた者にとっては最も身近な「都市」がその小都市なのである。生まれ育ってきた環境が都市に対する理解・考え方を定め、そして地理的・空間的な認知を形成することになる。

さて、私は日本で一番大きな湖の傍に位置する中規模都市で生まれ育った。幼稚園児から高校生までは20分程かけて同市内の学校に電車で通学し、大学入学後から前職までは自宅から一山越えた人口100万人規模の隣街の大学に通学・通勤していた。長きにわたり、私の日常生活空間はその生まれ育った街であり、通学・通勤で通った隣街であったため、私にとっての「都市」とは故郷の街であり、そして隣街であった。もう少し正確に言うと、私にとっては、故郷が「中規模都市」の代表的事例であり、隣街が「大都市」の典型との認識であった。

都市に対してこのような認識を有する私は、何の縁（因果？）か法政大学に着任することになり、東京（およびその周辺）で生活することになった。東京での生活は初めてであったが、それまでも幾度も東京には来ていたし、どのような場所であるのかという知識は十分に持ち合わせていた。しかし、実際に生活してみると、東京という街は、私が知る「都市」ではなかった。

私にとっての大都市の典型である故郷の隣街や研究対象地域として何年も通い詰めた街は、たしかに日本でも有数の人口規模を誇り、業務機能や商業機能が集積し、高層建築物が林立している。だが、東京はそれらの大都市をはるかに凌いでいるのである。どこまでが都心部なのか分からないくらいに高層建築物が拡がり、郊外部には果てしなく住宅が連なっている。どの商店街にも活気があり、空き店舗はほとんど見られない。一番驚いたのは、渋谷や新宿の繁華街だけでなく飯田橋や市ヶ谷などの場所であっても、平日の午前0時過ぎにもかかわらず人で溢れかえっている。このような都市は他に見たことがない。生活して初めて東京という都市を「実感」した。

法政大学に着任して以降、これまでに2か所で居住してきたが、それらの地域で生活してきたことで、東京という都市および東京大都市圏という巨大な都市圏の側面を実感してきた。最初に居住した場所には畑が残存し、その畑の隣には土蔵や屋敷林を有する広大な邸宅が見られた。現在でこそ形式的（=23区内）にも実質的（=DID）にも都市的地域であるが、そのような景観から、農地を潰すことで市街地へと変貌を遂げてきた場所であることが「実感」できた。現在の居住地は東京郊外の住宅地に位置するが、周辺を見渡すと、緑豊かでなだらかな丘陵地のところどころに住宅が連なる場所が見られる。たまに、狸にも遭遇する。自然を切り開く形で住宅地が開発されてきたことが伺える。

話を最初に戻そう。皆それぞれが自分なりの「都市」の認識を有していよう。そして、首都圏出身者が多い法政大学の学生にとっての「都市」とは東京であろうかと思う。しかし、東京は他に比べようがない都市であり、東京を基準にして都市を理解することは危険である。生活をしないまでも、せめて何日間か滞在するだけでも構わないので、多くの都市を訪れ、色々な「都市」を「実感」することで、さまざまな都市の実情を理解してもらいたい。

主な担当授業	社会経済地理学 (1)、人文地理学特講 (3)、人文地理学演習 (3)
研究テーマ	都市再開発の展開と意義、土地所有からみた都市・地域の形成と変化、時代性と場所の変容について
出身地	滋賀県大津市
略歴	<p>学歴 2006年 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了 博士 (人間・環境学)</p> <p>職歴 2006年 京都大学研修員</p> <p>2007年 京都大学大学院人間・環境学研究科助教</p> <p>2010年～ 法政大学文学部専任講師、准教授、現在に至る</p>
社会的活動	日本地理学会資格専門委員・集会専門委員、経済地理学会関東支部幹事 など
業績 (著書・論文等)	大阪市上六地区における都市再開発の社会的意義 (地理科学 60、2005年)、土地所有の変遷にみる近現代 (日本都市学会年報 47、2013年)、『ジオ・パルNEO (第2版)』海青社 (共編著、2017年)、ほか。
研究室の所在	BT1212

山口 隆子 准教授

Takako Yamaguchi



東京っ子

生まれも育ちも東京、卒論も、幻の修士論文（今も机の引き出しに資料が・・・）も、博士論文も対象地域は東京、これまでの勤務地も居住地も東京という、筋金入りの東京っ子です。両親も東京っ子、母方の祖父母、そして祖々父母も東京っ子です。一般的には、このようなときに、「江戸っ子」という名称を使うのですが、「江戸の内」ではないため、東京っ子とさせていただきます。

生まれは、東京都目黒区、鉄道の日（当時は鉄道記念日）です。3歳の頃、1年ほど静岡県富士宮市（旧芝川町）に在住、近所に子どもが皆無な地区だったため、ひたすら野兔と戯れていました。この体験が影響しているのかは定かではありませんが、現在も Peter Rabbit のコレクターです。

その後、故郷の東京都目黒区に戻り、幼稚園生活を送ったのち、小学校入学時に神奈川県相模原市へ転居しました。相模原市とはいっても、東京都町田市と八王子市が入り組んだ地域であり、毎日、東京都側の雑木林（いわゆる多摩丘陵の際）の中を駆け巡っていました。

中高は、横浜市に通学しておりましたが、これまた、東京都町田市と川崎市が入り組んだ雑木林の中でした。中学では、生物部で、文化部にもかかわらず、ジャージを着て、捕虫網を片手に蝶を追いかけ、高校では、茶道部で、まったりとお茶を飲んでいました。大学受験に際し、生物学科と地理学科で悩み、大学の掲示板に張り出されていた時間割に「植物地理学」という単語を見つけ、地理学科に進学すれば、生物も地理も学べると勝手に解釈し、「私には地理学科しかない！」と思い込み、受験しました。

大学は、「自宅から通える大学」という条件から、東京都内の大学に通うこととなり、「気候」「緑」「人」の関係性について学びたいということで、「生気象学」を専門とすることにしました。「緑」に関しては、文化的側面からも取組み、華道の腕前は家元です。気候学を専門とするからには、観測を行いたいということで、観測が盛んな都内の大学院へ進学し、そして、「東京都」へ「造園職」として入都しました。

建設局に配属され、多摩動物公園で植栽の管理や動物舎の補修工事、(一財)東京都公園協会で都立公園の維持管理、建設局公園緑地部で都立公園・動物園・霊園の予算や維持管理など7年間担当しました。

環境局へ異動し、東京都環境科学研究所でようやく職務として、東京のヒートアイランド現象の解明とその緩和対策について研究することができ、都市地球環境部で屋上緑化や高反射率塗料によるヒートアイランド対策や地球温暖化対策としての省エネを担当しました。その後、自然環境部に異動し、校庭芝生化担当、「東京における自然の保護と回復に関する条例」(通称、自然保護条例)に基づく緑の創出と保護、自然公園担当として、都内の自然環境行政を担当してきました(14年間)。

入都後も研究を続け、結婚式では、「どうか研究を続けさせてあげてください」と大学の指導教官から祝辞をいただき(家族も職場の上司もビックリ!)、「公務」「研究」「家事・育児」と三足の草鞋を履いて走り続けてきました(走るのは苦手なので、電動ママチャリを愛用)。

2017年4月より、法政大学文学部地理学科へ赴任し、東京都千代田区において、気候教育・研究に携わることとなりました。東京というと、大都市のイメージしかありませんが、標高2017mの雲取山から、東は南鳥島(日本最東端)、南は沖ノ鳥島(日本最南端)までが東京です。これからも、東京っ子として、東京の自然環境について、学生の皆さんと共に学んでいきたいと思えます。もちろん、東京以外の研究も大歓迎です。

主な授業担当	気候・気象学及び実験Ⅰ・Ⅱ、地理学読図演習(1)・(2)、自然地理学演習(1)
研究テーマ	ヒートアイランド、都市緑化、百葉箱、熱中症、生気象学全般
出身地	東京都目黒区
略歴	学歴 1995年 お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒業 1996年 東京都立大学大学院理学研究科修士課程地理学専攻中退 2008年 お茶の水女子大学にて博士(学術)取得 職歴 1996年 東京都入都 2017年 法政大学文学部地理学科准教授
社会的活動	日本生気象学会誌編集委員、日本生気象学会熱中症予防研究委員会委員
業績(著書・論文等)	『ヒートアイランドと都市緑化』成山堂書店, p. 128, 2009. 「日本における百葉箱の歴史と現状について」天気, Vol. 53(4), 265-275. 2006. 「日本における気象観測—東京都檜原村を事例として」日本生気象学会雑誌, Vol. 54, 101-109, 2018.
研究室の所在	BT1209
オフィスアワー	いる時はいつでも。
連絡先	メール

羽佐田 紘大 助教

Kodai Hasada



沖積低地から来ました

愛知県西部・岐阜県南部・三重県北部にかけて広がる濃尾平野は、主に木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）の土砂供給によって形成された「沖積低地」という低平な地形です。関東平野でいえば、隅田川や荒川、中川、江戸川が流れているあたりがこの地形になります。おそらく、東京の「下町」と言った方がわかりやすいかもしれません。私は、この沖積低地を対象とした研究を行っています。

生まれてから28年間、名古屋市の南東部に隣接する「飛島村」というところで暮らしてきました（普段、出身を尋ねられると「名古屋」と答えてしまいます。愛知県民の性でしょうか…）。飛島村については、ときどき全国放送のテレビ番組で「日本一裕福な村」と取り上げられることがあるため、知っている人がいるかもしれません。ちなみに、裕福に関するエピソードとしては、中学校卒業まで医療費がかからない、100歳になったら100万円支給される、中学2年生になったらカリフォルニアへの海外派遣事業に参加できる、などがあります。ただし、裕福なのはあくまで「村」であり、「人」ではありません。また、裕福というだけなら聞こえがいいですが、海拔ゼロメートル地帯にあり、災害に対して非常に脆弱な地域です。

伊勢湾奥部にはかつて広大な干潟が存在していたものの、江戸時代以降に行われてきた干拓や埋立てによって姿を消してしまいました。このうちの一部にあたるのが飛島村であり、特に住居のほとんどは干拓地に位置しています。干拓地は、干潟を堤防で囲い、排水することで陸化した場所なので、つくられた時点で海拔0m以下です（ただし、海拔ゼロメートル地帯が拡大する要因としては地盤沈下の影響も大きいです）。江戸時代の新田開発に伴う干拓地というだけあって、私が暮らしてきた地域には長らく「〇〇新田」という地名が残っていました。しかし、最近、地域一帯の住所の名称変更が行われたため、「新田」が消えてしまいました。土地の成り立ちを教えてくださいたい地名が変わってしまうのは、非常に残念なことです。

伊勢湾奥部の住民として忘れてならないこと、それは、「伊勢湾台風」（1959年）の存在です。

台風による災害としては明治以降の最多の犠牲者数（5,098名）であり、「災害対策基本法」制定のきっかけになりました。私自身もちろん経験していないものの、妙に身近に感じる災害です。これは、祖母や周りのお年寄りの方々から、伊勢湾台風の話は何度も聞いた影響だと思います。祖母によれば、海岸の堤防が切れて「大津波」（高潮のこと）が襲ってきたが、屋根の上に逃げてなんとか助かったそうです。もし助かっていなかったら、今ごろ自分は…、と考えてしまいます。また、学校に行けば、校舎の壁、自分の背丈よりもはるか上のところに、伊勢湾台風の浸水水位を示す標識が設置されていたり、テレビで『伊勢湾台風物語』（伊勢湾台風30年を機に公開されたアニメーション映画）がたびたび放送されたり（2000年代になってからなぜか放送されなくなりましたが…）、というように伊勢湾台風に接する機会が多い環境にありました。

このように、飛島村で暮らしながら伊勢湾台風のことを知っていく中で、飛島村、そもそも濃尾平野という場は、いつ、どのようにつくられてきたのか、このことと伊勢湾台風による被害とはどう関係しているのだろうか、という疑問を持つようになりました。おそらくこれが根底にあって、私自身、沖積低地という場で研究を続けているのではないかと思います。もちろん、これ以外にも、地理（地理学）を好きになったきっかけ、自然地理学を専門とするようになったきっかけなど、現在に結びつく出来事はいくつかありますが、ここでは省略させていただきます。

2017年4月1日付で本学に赴任し、「沖積低地」暮らしから「台地」暮らしに変わりました。東海地方を中心に研究を進めてきましたが、関東地方の自然環境に触れる機会も増えています。これまで以上に関東地方にも目を向けて、みなさんと一緒に学んでいきたいです。

主な授業担当	地理実習（2）、自然環境論、自然地理学特講（1）
研究テーマ	沖積低地への土砂供給と地形形成、マングローブ域での地形・植生変化
出身地	愛知県海部郡飛島村
略歴	<p>学歴 2011 南山大学総合政策学部卒業</p> <p>2013 名古屋大学大学院環境学研究科博士課程（前期課程）修了</p> <p>2016 名古屋大学大学院環境学研究科博士課程（後期課程）修了 博士（地理学）取得</p> <p>職歴 2016 名古屋大学大学院環境学研究科研究員 南山大学、中京大学、椋山女学園大学、名古屋大学教育学部附属 高等学校での非常勤講師</p> <p>2017 法政大学文学部地理学科助教</p>
業績（著書・論文等）	羽佐田紘大 2015. GIS を用いたボーリングデータ解析に基づく濃尾平野の3次元構造と堆積土砂量の復原. 地理学評論 88: 118-137. ほか
研究室の所在	一口坂校舎 802
連絡先	メール

Ⅲ 学習の手引き

(1) 地理学科のカリキュラムについて

大学生になって戸惑うことの一つに、各自で履修計画を立てなければならないことが挙げられるでしょう。「履修の手引き」に地理学科のカリキュラム一覧が掲載されていて（後掲）、それらの中からいくつかの科目を選んで履修計画を立てることになります。わかりそうでありながら、わかりづらく、科目選択に際して不安を抱くことも多いはずで

す。授業科目は必修、選択必修、選択の3カテゴリーに分類されていて、各カテゴリーの中から決まりに従って科目を選ぶことになります。しかも各科目の開講曜日、開講時限を確認した上で選ばなければなりません。

以前の「地理学科のしおり」でカリキュラムに関して執筆した担当者は、「地理学科レストラン」のメニューリストにたとえてカリキュラム一覧を説明していました。あえていえば、所属する学科ごとに「それぞれのメニュー表」があるというべきでしょう。技術者養成を主目的とする、科目の選択肢が少なく、必修科目がきわめて多い学部学科（たとえば医歯薬学科等）もあれば、選択肢の多い、つまり選択科目が多数ある学部学科もあります。とはいえ、どうしても学ばなければならない基礎的科目は、どんな学部学科でも多くの場合「必修」となっています。

食育（しかし「食育」を賞賛しているわけではありません）にたとえれば、必修科目、選択必修科目、選択科目をバランス良く選択することは、主食、副食をバランス良く採ることと同じで、健康の増進・維持に大きな効果があるというべきでしょう。とはいえ、食べ物の好き嫌いを放置したままでは、健康の増進・維持がはかりにくいことも事実であるため、嫌いな科目も選択せざるを得なくなる場合もありますし、必修科目にそれが設定されている場合もあるでしょう。

必修科目を除けば、どの科目を選択するかは皆さんの判断に任されていますが、その際役立つのがシラバス（「講義概要」のことで、2019年度からはWebシラバスに変更されます）です。授業内容の概要と、第何回目になどのような内容の授業が行われるのか記されています。ところがこれを読まないで科目を選択し、「つまらない」だの「意味不明」だのという学生が多いのも事実です。授業で何を具体的に扱うのかを知った上で科目を選んでください。

一番良くないのは遊び優先のサークルなどの、「先輩」とかいう人々（先に入学しただけで、中身は空っぽであるにもかかわらず「先輩」の呼称を良いことに、下級生に望ましくない話を吹聴する輩のことです）の流言飛語に踊らされ、自分の興味の有無を度外視して、「単位を取りやすい」科目ばかり選択する方法です。自分で確認もせず、無批判に他人の意見に追随するなど最も避けるべきことです。シラバスを丁寧に読むことから始めるべきでしょう。

大学の授業には「講義」「演習」「実験・実習」という3種類があります。「講義」は担当教員が文字通り講義するもので、皆さんはノートを取りながら理解することになります。最近ではPowerPointをつかって資料提示することも多く、ノートをとるのではなく、スマホの写真で済ませる学生も多々いるようです。理解できているか否かは別としてですが…。「演習」はいわゆるゼ

ミナールで、特定のテーマに関して学生間で議論する形式です。一般的は「ゼミ」と略称されています。「実験・実習」は文字通り実験や実習を伴う科目にこの名称を付していますが、地理学科ではそれに加えて「現地研究」もこれに該当します。

カリキュラム一覧をみれば半年間（1年を2学期に分け、それぞれに完結する制度を「セメスター」と呼びます。欧米の大学では一般的で、短期集中で学習効果が高いとされていますが、その成否は明らかではありません）で完結する科目、1年間で完結する科目があることに気づくはずですが、近年ではセメスター科目が大半を占め、「演習」（ゼミ）のように1年間で完結する科目は減少しています。

最後に一つ付言すれば、地理学科の卒業論文審査は厳しいと、他学科生からはいわれているということです。学生生活は何をしても自由ですが、卒業論文作成をサボれば、不合格になるということだけは事実です。卒論不合格は通常では発生しませんし、発生してはいけません。就職が決まっているから卒業するのではなく、卒業するからこそ就職するのだというあるべき順序を、地理学科教員はこれまで頑なに守ってきました。おそらくはこれからもそうであり続けるでしょう。不合格者を出すことが目的ではないものの、結果的にそうなる場合があるということを肝に銘じて下さい。シラバスを良く読み、カリキュラムから適切に科目選択して、通常通り学んでいけば、食事であれば主食、副食をバランス良く採ってきたことになるわけですから、地理学の考え方、分析方法を身につけているはずですが、一步一步学んでいって下さい。近道はないのですから…

地理学科カリキュラム表

地理学科が設置している科目のみ掲載。履修に関しては「文学部 履修の手引き」に準ずること。

専門科目

系列	科目名	単位・期間		履修年次	備考
必修科目	地理学概論(1)	2	半	1-4	
	地理学概論(2)	2	半		
	地理実習(1)〈人文〉	2	半	1-4	
	地理実習(2)〈自然〉	2	半		
	現地研究	2	—	2-4	
	卒業論文	8	—	4	
選択必修科目	地誌学概論(1)	2	半	2-4	3~4年次の間に最低4単位以上履修する必要あり。 3年次に8単位まで履修可。 4年次に4単位まで履修可。 3~4年次合計12単位の単位制限あり。
	地誌学概論(2)	2	半	2-4	
	日本地誌(1)	2	半	2-4	
	日本地誌(2)	2	半	2-4	
	地球科学概論Ⅰ	2	半	2-4	
	地球科学概論Ⅱ	2	半		
	地学実験(1) (コンピュータ活用含む)	1	半	1-4	
	地学実験(2) (コンピュータ活用含む)	1	半		
	地質・岩石学及び実験	2	半	3-4	
	自然環境論	2	半	2-4	
	地形学及び実験Ⅰ	2	半	2-4	
	地形学及び実験Ⅱ	2	半		
	生物・土地地理学及び実験Ⅰ	2	半	2-4	
	生物・土地地理学及び実験Ⅱ	2	半		
	気候・気象学及び実験Ⅰ	2	半	2-4	
	気候・気象学及び実験Ⅱ	2	半		
	海洋・陸水学及び実験Ⅰ	2	半	2-4	
	海洋・陸水学及び実験Ⅱ	2	半		
	社会経済地理学(1)	2	半	2-4	
	社会経済地理学(2)	2	半	2-4	
	社会経済地理学(3)	2	半	2-4	
	社会経済地理学(4) (エコツーリズム)	2	半	2-4	
	文化地理学(1)	2	半	2-4	
	文化地理学(2)	2	半	2-4	
	地理学史	2	半	3-4	
	自然地理学演習(1)	4	年間	3-4	
	自然地理学演習(2)	4	年間	3-4	
	自然地理学演習(3)	4	年間	3-4	
	人文地理学演習(1)	4	年間	3-4	
	人文地理学演習(2)	4	年間	3-4	
	人文地理学演習(3)	4	年間	3-4	
	人文地理学演習(4)	4	年間	3-4	
	人文地理学演習(5)	4	年間	3-4	
地理学演習(自然地理)	4	年間	3-4	早期卒業該当者のみ履修可	
地理学演習(人文地理)	4	年間	3-4		

専門科目

系列	科目名	単位	期間	履修年次	備考
選択科目	世界地誌(1)	2	半	2-4	(1) (2) ・ (3) (4) ・ (5) (6) を2年ごと開講
	世界地誌(2)	2	半	2-4	
	世界地誌(3)	2	半	2-4	
	世界地誌(4)	2	半	2-4	
	世界地誌(5)	2	半	2-4	
	世界地誌(6)	2	半	2-4	
	地理学読図演習(1)	2	半	3-4	(1) (2) ・ (3) (4) ・ (5) (6) を隔年開講
	地理学読図演習(2)	2	半	3-4	
	自然地理学特講(1)	2	半	3-4	
	自然地理学特講(2)	2	半	3-4	
	自然地理学特講(3)	2	半	3-4	
	自然地理学特講(4) (生態学)	2	半	3-4	
	自然地理学特講(5)	2	半	3-4	早期卒業該当者のみ履修可
	人文地理学特講(1)	2	半	3-4	(1) (2) (3) を順次開講
	人文地理学特講(2)	2	半	3-4	
	人文地理学特講(3)	2	半	3-4	
	人文地理学特講(4) (ECO-TOPマネジメント)	2	半	3-4	
	人文地理学特講(5)	2	半	3-4	早期卒業該当者のみ履修可
	地図学Ⅰ	2	半	2-4	
	地図学Ⅱ	2	半		
	測量学及び測量実習Ⅰ	2	半	3-4	
	測量学及び測量実習Ⅱ	2	半		
	写真判読Ⅰ	2	半	3-4	
	写真判読Ⅱ	2	半		
	数理地理学(1)	2	半	2-4	(1) (2) を隔年開講
	数理地理学(2)	2	半	2-4	
	外書講読(1)	2	半	3-4	
	外書講読(2)	2	半	3-4	
	地理情報システム(GIS)Ⅰ	2	半	3-4	
	地理情報システム(GIS)Ⅱ	2	半		
	人文地理学セミナーA・B	2	半	2-4	総合科目のシラバスを参照
	文化人類学方法論A・B	2	半	2-4	総合科目のシラバスを参照
	自然環境のしくみとその変貌A・B	2	半	2-4	総合科目のシラバスを参照
	人間と地球環境	2	半	2-4	総合科目のシラバスを参照
環境倫理学(1)	2	半	2-4		
環境倫理学(2)	2	半	2-4		
歴史地理学(1)	2	半	2-4		
歴史地理学(2)	2	半	2-4		

専門科目

系列	科目名	単位・期間		履修年次	備考
自由 科目	英語の文法力Ⅰ	2	半	2-4	
	英語の文法力Ⅱ	2	半	2-4	
	メディア・リテラシーⅠ	2	半	2-4	
	メディア・リテラシーⅡ	2	半	2-4	
	社会思想1(社会学概論)1	2	半	2-4	
	社会思想1(社会学概論)2	2	半	2-4	
	福祉工学	2	半	3-4	
	社会・地歴科教育法Ⅰ	2	半	2-4	
	社会・地歴科教育法Ⅱ	2	半	2-4	
	理科教育法(1)	2	半	2-4	
	理科教育法(2)	2	半	2-4	
	理科教育法(3)	2	半	2-4	
	理科教育法(4)	2	半	2-4	
	物理学概論Ⅰ	2	半	2-4	
	物理学概論Ⅱ	2	半	2-4	
	化学概論Ⅰ	2	半	2-4	
	化学概論Ⅱ	2	半	2-4	
	生物学概論Ⅰ	2	半	2-4	
	生物学概論Ⅱ	2	半	2-4	
	物理学実験Ⅰ(コンピュータ活用含む)	1	半	2-4	
	物理学実験Ⅱ(コンピュータ活用含む)	1	半	2-4	
	化学実験Ⅰ(コンピュータ活用含む)	1	半	2-4	
	化学実験Ⅱ(コンピュータ活用含む)	1	半	2-4	
	生物学実験Ⅰ(コンピュータ活用含む)	1	半	2-4	
	生物学実験Ⅱ(コンピュータ活用含む)	1	半	2-4	

アイラック科目〔O群分野〕

系列	科目名	単位・期間		履修年次	備考
選 択 科 目	基礎ゼミⅠ	2	半	1	
	基礎ゼミⅠ	2	半	1	
	基礎ゼミⅠ	2	半	1	
	基礎ゼミⅠ	2	半	1	

(2) 取得可能な資格について

法政大学の地理学科に在籍しながら、予め指定された科目を計画的に履修することで、いくつかの資格を取得できます。地理学科独自の資格について簡単に説明をしておきます。

1) 教員免許状

当然のことながら、この資格には卒業要件の必要単位とは別途に定められた科目の単位修得が求められる。地理学科では次の A、B のいずれかの組み合わせで教員免許状が取得可能である。

A：中学校 1 種免許状（社会科）

高校 1 種免許状（地歴科）

高校 1 種免許状（公民科）

B：中学校 1 種免許状（理科）

高校 1 種免許状（理科）

高校 1 種免許状（地歴科）

なお、教職課程の履修に関しては、教職資格窓口で配布される「教職課程履修要綱」を参照すること。また、教職ガイダンスが開催されるので、参加することをお勧めする。それでも的確に理解できない場合には、当該の教職資格窓口で直接、係員に尋ねることを勧める。

2) 測量士補

測量法第 51 条第 1 号の規定により、地理学科を卒業した学生は、測量士補の登録申請をすることで、測量士補名簿に登録され同資格を得ることができます。ただし、測量関係の職業に就くためには、専門的な知識と教養とを身につけなくてはなりません。それなくして測量関係の職に就くことは、アルファベットを知らずに英語の教師になるのと同じくらい無謀なことと思われるからです。そのため地理学科では、学科のカリキュラムのうち、下記の表にあげられている測量関係の科目を履修することを、強く推奨しています。

測量士補名簿への登録を希望する学生は、ぜひともこれらの科目を履修してください。

なお、登録に当たっての手続きの詳細については、国土地理院のホームページ (<http://www.gsi.go.jp/>) または公益社団法人・日本測量協会のホームページ (<http://www.jsurvey.jp/>) をご覧ください。

科目名	単位数
測量学及び測量実習 I	2
測量学及び測量実習 II	2
地図学 I	2
地図学 II	2
写真判読 I	2
写真判読 II	2
地理情報システム (G I S) I	2
地理情報システム (G I S) II	2
地理学読図演習 (1)	2
地理学読図演習 (2)	2

3) 地域調査士

地域調査士とは2010年に新たに設けられた資格であり、地理学において最大の学会である(社)日本地理学会が実施、認定している。ここでいう「地域調査」とは、「地域の特性の科学的な調査、分析、究明、解説、広報等を行う業務(報告書の作成その他これらの業務に付帯する業務を含む)」と規定されており、同資格の取得者には地理学を通じて修得した専門性を職業に活かし、社会に還元することが求められている。換言するならば、同資格を活かして、積極的に地域調査に関わる職業に携わることが期待されている。

地域調査士を取得するには、(1)関連する科目の単位の取得、(2)講習会の受講が必要である。

(1)の必要な科目は、①地域の概念を扱う科目、②日本の地域特性を扱う科目、③地域の自然的特性を扱う科目、④統計処理に関する科目、⑤地図に関する科目、⑥フィールドワーク、⑦地域に関する卒業論文・卒業研究である。具体的には、下記のカリキュラム表を参照してもらいたい。なお、⑦のように卒業論文が要件として関わり、フィールドワークに基づく卒業論文であることが必要となる。したがって、同資格の取得を考えている学生は、フィールドワークを念頭に置いた卒業論文を作成するよう留意すること。

(2)の講習会では、心構え、法令、個人情報保護、人権に関する講習が行われる。講習会は年間3回(関東地方:春・秋2回、関西地方:秋1回)実施され、そのうちのどれか1回受講すればよい。講習会の日程および会場、申し込み方法については決まり次第、BT12階の学科の掲示板に掲示されるので、受講希望者は気をつけて確認すること。

また、同資格の詳細についてはパンフレット(地理学科事務室で配布)や日本地理学会資格専門委員会HP(<http://ajg-certification.jp/>)を確認してもらいたい。なお、より専門性の高い資格として専門地域調査士もあるが、この資格を取得するには大学院の修了や実務経験を必要とするため、地理学科を卒業するだけでは取得することはできない。

地域調査士資格に関する履修科目

日本地理学会が定めた地域調査士に関する科目				法政大学文学部地理学科の開講科目中で左表に対応して取得すべき科目			
大項目	小項目	科目の細分	単位	科目名	単位	区分	
地域の概念及び特性に関する科目	a.地域の概念を扱う科目	a2.人文地理学又はこれに類する科目	2	地理学概論(2)	2	卒業必修科目	
	b.日本の地域特性を扱う科目	b.日本地誌又はこれに類する科目	2	日本地誌(1)	2	必ず履修	
	c.地域の自然的特性を扱う科目	c1.自然地理学又はこれに類する科目	2	地理学概論(1)	2	卒業必修科目	地理学概論(1)か ◆1~3のうちいずれか1つ
		c2.地形学又はこれに類する科目	2	地形学及び実験 I	2	◆1	
		c3.気候学又はこれに類する科目	2	気候・気象学及び実験 I	2	◆2 (I・II両方)	
2			気候・気象学及び実験 II	2			
c4.水文学又はこれに類する科目	2	海洋・陸水学及び実験 I	2	◆3			
地域調査の技法に関する科目	d.統計処理に関する科目	d.地域統計学又はこれに類する科目	2	数理地理学(1)	2	どちらか1つ以上必ず履修(尚、2011年度以降の単位習得が原則)	
	e.地図に関する科目	e1.地図学又はこれに類する科目	2	数理地理学(2)	2		
			e2.測量学又はこれに類する科目	2	地図学 I	2	左記4科目から1科目以上、必ず履修
				2	地理学読図演習(2)	2	
e3.GIS又はこれに類する科目	2	測量学及び測量実習 I	2				
地域調査実習に関する科目	f.フィールドワーク	f3.地域の人文的および自然的特性に関する調査	1	現地研究	2	卒業必修科目	
	g.地域に関する卒業論文の作成若しくは地域調査に関する卒業研究	g2.卒業論文	2	卒業論文	8	卒業必修科目(但し、条件あり)	

「地域調査士」資格申請の際には履修した科目の科目コードが必要となります。

※上記の科目一覧は、2019年3月現在のものです。最新の情報は地理学科事務室まで問い合わせください。

4) GIS 学術士

GIS 学術士とは 2016 年に新たに設けられた資格であり、(社) 日本地理学会が実施、認定しています。GIS 学術士制度は、GIS の知識と技術の向上をはかり、適切な GIS 学術を普及し、地理学および地理情報科学の進歩と社会の発展に貢献することを目指しています。この資格制度における GIS とは地理情報科学および地理情報システムを指し、GIS の学術とは地理空間情報をコンピュータで系統的に取得・構築、管理、分析、統合、表示・伝達に係わる学術をいいます。

GIS 学術士を取得するには、関連する科目の単位の取得が必要です。必要な科目は、①GIS に関連する情報処理を中心とする科目、②GIS の基本的機能と空間データの講義を中心とする科目、③GIS による地図作成・空間分析の実習を中心とする科目、④GIS を利用した卒業論文を執筆する科目です。具体的には、下記のカリキュラム表を参照して下さい。

また、同資格の詳細についてはパンフレット（地理学科事務室で配布）や日本地理学会資格専門委員会 HP (<http://ajg-cert.jp/>) を確認して下さい。なお、より専門性の高い資格として GIS 専門学術士もありますが、この資格を取得するには大学院博士前期（修士）課程の修了を必要とします。

GIS 学術士資格に関する履修科目

日本地理学会が定めた地域調査士に関する科目		法政大学文学部地理学科の開講科目中で左表に対応して取得すべき科目			
大項目	単位	科目名	単位	区分	
【A】 GISに関連する情報処理を中心とする科目	2	情報処理演習 I <基礎科目>	2	基礎科目・電算科目シラバスを参照のこと ※どちらか1科目以上必ず履修	
		情報学入門 I・II (空間情報処理) <電算科目>	2		
【B】 GISの基本的機能と空間データの講義を中心とする科目	2	地図学 I	2	※どちらか1科目以上必ず履修	
		地図学 II	2		
【C】 GISによる地図作成・空間分析の実習を中心とする科目	4	地理情報システム (GIS) I	2	◆1 (I・II両方)	◆1~2のうちいずれか1つ履修
		地理情報システム (GIS) II	2		
		情報学応用 I・II (空間情報) <電算科目>	4	◆2	
【D】 GISを利用した卒業論文を執筆する科目	4	自然地理学演習 (1) ~ (3)	4	※どちらか1科目以上必ず履修	
		人文地理学演習 (1) ~ (5)	4		

※上記の科目一覧は、2019 年 3 月現在のものです。

5) その他の資格

- ・司書および司書教諭
- ・社会教育指導主事
- ・博物館学芸員

なお、以上の資格取得に関しては、教職資格窓口で配布される「資格関係科目履修要綱」を参照すること。それでも的確に理解できない場合には、当該の教職資格窓口で直接、係員に尋ねることを勧めます。

(3) 地理学科事務室の利用について

「地理学科事務室」は、図書室兼共同利用室兼事務室、といったところです。
市ヶ谷キャンパス内のポアソナードタワー12階南奥にあります。

【開室時間】

授業期間中⇒平日 9:00～19:00（業務により一時的に閉室する場合があります）

土日祝日 閉室（ただし、祝日でも授業開講日は平日同様開室）

長期休み中⇒変則的に開室する。長期休業前に掲示にて開室予定をお知らせします。

●図書室兼共同利用室として

地理学に関する図書や学術雑誌、報告書など約6,000冊を所蔵しています。そのほとんどについて自由に閲覧することができます。室内にはプリペイドカード式のコピー機が設置されていて、図書や雑誌等のコピーに使用できます。また、過去5年分の優れた卒業論文も保管していますのでこちらも閲覧することができます。

もし、探している文献が見つからない時は、法政大学図書館と同様の検索システム（OPAC）を利用できるパソコンを設置していますので使用してください。

図書室スペースの奥には、学習机が設置されています。学校貸し出し用PCや個人所有PCなど使用可能です。また、MANDARAやゼンリン電子地図帳、Illustratorなどを常設したPCも設置していますので、使用希望者は事前に事務まで申し出て下さい。

注) 盗難防止のため、カバンなどの私物は事務室入口右のロッカーに予め収納してから入室して下さい。

●事務室として

事務室は、図書室兼共同利用室ほかにレポートの提出先として、また「現地研究」の申込み先として利用される所でもあります。実験室の使用の許可や実験実習器材などの貸出し（後述の“地理学実験室・器材の利用方法”を参照してください）もここで行なっています。これらの手続

き等は、必ず常駐の事務係を通じて行なってください。常駐の事務係は、手続きの受け付けや地理学科の窓口として学生の間合せにも対応しています。ただしレポートやテストの内容についての相談は応じかねます。また、文献・論文検索の仕方など、お応えできる範囲でサポートしています。

また、BT12階の廊下には地理学科独自の掲示板があり、とくに下記の掲示板を確認することが非常に大切です。

<授業関係や地理学科事務室からの連絡及び現地研究>

授業教室の変更やレポートに関する連絡（出題・提出・返却等）、事務室からの連絡事項（開室予定等）、現地研究に関する連絡（年間の実施予定・参加募集等）が掲示されます。授業関係とくに教室変更についてはキャンパス内の文学部掲示板でも必ず確認してください。

<ゼミ掲示板>

ゼミ毎の専用の掲示板があります。先生またはゼミ生からの連絡事項（ゼミ予定・合宿案内・卒論指導等）が貼り出されます。2～4年生は登校したら必ず確認が必要です。

最後に以下のような一般的に図書館などを利用する際に心がけるべきことを事務室でも守ってください。

- ・飲食はしないこと
- ・携帯電話の使用はしないこと
- ・単なる待ち合わせ場所にしないこと

（4）地理学科事務室の図書等の利用方法

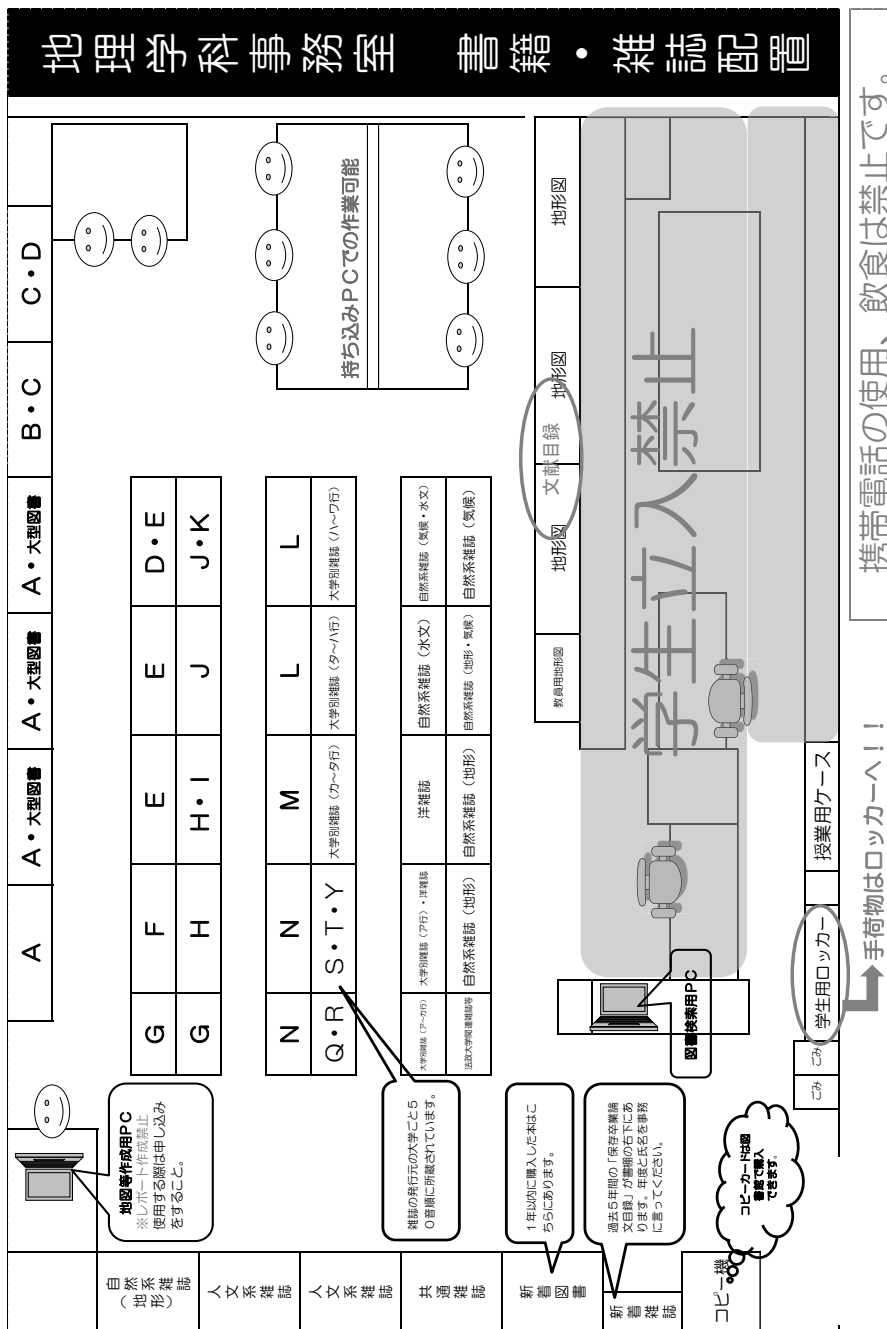
地理学科事務室では、地理学分野に関する多くの図書を所蔵・管理しています。それらは、単行本、定期講読、あるいは寄贈された学術雑誌・報告書、過去5年分の優れた卒業論文、地形図等に大別できます。所蔵している図書については自由に閲覧又は貸出（一部除く）ができます。ただし、雑誌・地図などは貴重な資料のため、基本的に持出し・貸出し禁止です。事務室内に設置されているコピー機で必要なページをコピーしてください。地形図に関しても、地形図集として製本されているものが多く、大判なので劣化防止のために閲覧のみとなっています。貸出については後述をお読みください。

地理学および周辺領域に至るまでの多岐にわたる図書を、自然地理学分野では海洋・陸水、地形・地質、気候・気象、生物・土壌、人文地理学分野では文化・民俗、歴史、社会経済、都市・交通、農産業等、というようにジャンル別に配列しています。

過去5年分の優れた卒業論文の閲覧については、地理学科事務室入り口左手の棚にある「保存卒業論文目録」（ピンクの表紙のファイル）で閲覧したい卒業論文の年度・氏名を確認して事務に申し出てください。また、気象庁月報やアメダス観測年報等のCD-ROMも所蔵・管理しており、

こちらにも「所蔵リスト」がありますので同様に確認してください。

事務室では新着図書のスペースを設け、いち早く新刊を提供したり、学術雑誌の欠号を補充したり、学科生のみなさんがより良い環境で学習に専念できるよう努めています。みなさんも図書を大切に扱い利用規定を充分に守って、誰もが気持ち良く利用できるよう是非ご協力ください。



<地理学科事務室内の図書分類>

A	0	目録
	1	白書・叢書
	2	統計・データブック
	3	百科事典
	4	報告書
B		概論
		総論
C	1	日本地誌
	2	世界地誌
D		辞書
	1	言語
	2	人文
	3	自然
	4	気象
	5	環境
E		民族・民俗 文化
F		農業 畜産
		産業
G	1	経済
	2	工業(公害を含む)
	3	産業
H		都市 人口
		パソコン 画像
J		気候 気象
	1	地図学
K	2	地図
	3	空中写真
	4	大型地図
L		地形 地質

M		海洋 陸水
		植物
N	1	生態・環境
	2	災害
O		通教教科書
P		教職関係
Q	1	社会科教科書
	2	理科教科書
	3	社会学 政治学
R		シリーズもの
S		統計学・測量学
T		
U		
V	1	ビデオ人文
	2	ビデオ自然
W	1	DVD気象
	2	DVD数値地図
	3	DVD自然・地図
	4	DVD人文・報告書
X		洋書
Y	B	1 洋書(アトラス)(@文献センター)
		2 洋書(人文総論)(@文献センター)
		3 洋書(自然)(@文献センター)
		4 洋書(地誌)(@文献センター)
		5 洋書(統計)(@文献センター)
		6 洋書(その他)(@文献センター)
Z		製本雑誌(和)
	Y	製本雑誌(洋)
	W	1 雑誌(DVD自然)
2 雑誌(DVD人文)		

地理学科事務室内の図書・雑誌は背表紙の以下のようなシールで分類されています。

G-E
3
1

1段目：G（地理）-■（分類）
2段目：通し番号
3段目：巻・版など

また、OPAC検索時は【G-E /3/1】などと表記されます。

<地理学科事務室内の図書の貸出について>

地理学科事務室にて以下の「文学部地理学科事務室 図書・備品利用申込書」を記入していた

できます。

- ・借用期限⇒1週間を限度（1週間後が事務室閉室の場合は翌日まで）
- ・対象⇒専任教員・非常勤教員・大学院生・地理学科学部生・地理学科通教生
- ・1度の貸出限度数⇒1冊
- ・貸出可⇒図書に限る
- ・貸出不可⇒雑誌・卒業論文・辞書事典・地図類・禁帯出シールのあるもの
・CD-ROM・DVD

貸出不可のものは地理学科事務室内閲覧のみコピー可（地理学科事務室内）

- ・ペナルティ⇒借用期限を過ぎた者に対しては
当該年度それ以降の借用は禁止（備品も）とする。

【記入例】

文学部地理学科事務室 図書・備品利用申込書

フリガナ	ホウセイ チリコ		性別	区 分				学籍番号							
氏名	法政 地理子		男 (○) 女 (△)	専任教員	非常勤	院生	○ 学部生	通教生	x	x	B	4	x	x	x
住所	〒 102-8160	東京都千代田区富士見2-17-1				携帯TEL	090 (1234) 5687								
						自宅TEL	()								

※注意※

- 1) 借用期間は原則として図書は1週間、備品は~~1冊~~^{1週間}を限度とします。
- 2) 借用期間を超過した者は当該年度のそれ以降の借用を禁じます。 地理学科事務室

年	月	日	区分	図書・備品名	備品番号	返却期限	受付者	返却日	確認印
21	5	21	図書・備品	クリノメーター	K-13	5/28	印	→	
21	6	15	図書・備品	天気図がわかる	G-J 218	6/22	印	→	
			図書・備品					→	
			図書・備品					→	
			図書・備品					→	
			図書・備品					→	
			図書・備品					→	

ア
カ
サ
タ
ナ
ハ
マ
ヤ
ラ
ワ

(5) 地理学実験室・器材の利用方法

●地理学実験室の使用

ボアソナータワー12階に実験室(1200・1200-1)および文献センター(1200-2)(原則として文献センターの学生の使用は禁止です。)、13階に実験室(1300)があります。実験室の定員は48名です。実験室には各種実験器材の他、液晶プロジェクタを備えており、PCをはじめ、スライド、OHCやビデオなどの投影も可能です。実験室(1300)では、DVDの視聴も可能です。また、各教室にネットワークコンセントも設置されており、インターネットを使用することができます。

予約にあたっては、地理学科事務室にて空室状況を確認したうえで、教員の許可を得た後、事務に申請して下さい。学校行事が優先しますが、空いている時間であれば使用可能です(ただし、文献センターは原則使用禁止である)。

通常、各実験室は施錠されています。使用当日における部屋の開閉は、地理学科事務室へ申し出て下さい。また、各器材やAV機器の使用に際しても専用の鍵が必要です。使用する場合は、地理学科事務室にて借り受けて下さい。

卒業論文作成のための実験やゼミ活動などに利用できます。

●実験準備室の使用法

実験準備室は極めて狭い上に、多くの分析機器が設置されています。実験を始めると、1000℃を超える火が燃え続ける機具や110℃で24時間乾燥させるなどの作業を伴うことがあります。また、強酸やアルカリ物質を用いて実験も行います。従って、危険を回避するために、この準備室を同時に使用して作業する人の人数を3人までと決めました(2012年4月)。複数の希望者の使用ができるように、1週間前に事務へ使用を申告して下さい。用紙に希望事項を書き込んで申告して下さい。事務室では、3人を超える場合、全員の使用の優先順位を決める必要があります。毎週木曜の13時に使用希望者全員に集合してもらい、事務と教員の立ち会いのもと、次週の使用時間を決定しています。使用にあたり、火の管理、薬品の管理、水漏れ、ガス漏れに十分注意して使用して下さい。

なお、実験室の使用始めは、事務室で記帳し、開錠してもらうこと。実験を終えた場合は、必ず事務室へ立ち寄り、終わった旨を伝えて下さい。事務が施錠します。なお、実験が長引く場合は、担当教員に相談の上、教員の責任で施錠してもらって下さい。

実験用サンプル、私物は実験準備室に置かないこと。使用後は、実験机の上に器具、PCなど放置しないこと。注意を受けてもなお、ルールを守れない人は使用を禁止にします。実験室等を泥、水などで汚した場合は、自己責任で掃除して下さい。

●器材の貸し出し

地理学科では、地学実験をはじめ、測量学、海洋・陸水学、地形学、地質・岩石学、気候・気象学、生物・土壌地理学などの実験・実習科目を開講しています。これら講義で使用する実験機器や調査器材が常備されています。これらの一部については、貸し出しを行っています。借り出し期間中は、個人の責任において備品を管理してもらいます。器材によっては壊れやすいものもありますので、十分に注意して管理使用してください。

<地理学科事務室内の備品の貸出について>

地理学科事務室にて前述の「文学部地理学科事務室 図書・備品利用申込書」を記入していただきます。

- ・借用期限⇒1週間を限度（1週間後が事務室閉室の場合は翌日まで）延長不可
一度返却して再度貸出申請をする
※卒論等の調査目的のため1週間以上を希望する学生は、備品の管理責任者の専任教員に申し出、許可をもらって下さい。
 - ・対象⇒専任教員・非常勤教員・大学院生・地理学科学部生・地理学科通教生
 - ・貸出限度数⇒**1回の貸出備品を返却後、次の貸出可能となる**
 - ・貸出可能な備品⇒・中浅式風向風速計・岩石ハンマー・簡易実体鏡・アスマン通風乾湿計・電気伝導度計・缶付温度計・ハンドレベル・クリノメーター・土色帖・ディバイダー・棒状温度計・pH比色計・プラニメーター・キルビメーター・ポール・メジャー・標尺・トランシーバーなど（随時、学科事務係へ相談してください）
- なお、授業などに応じて一定の期間、貸し出しを禁止にする物品もあります。
- ・ペナルティ⇒借用期限を過ぎた者に対しては
当該年度それ以降の借用は禁止（図書も）とする。

(6) 早期卒業制度について

地理学科に 2011 年度以降入学した人は「早期卒業制度」を利用し、3 年生で卒業することが可能です。卒業後は法政大学大学院人文科学研究科地理学専攻に進学することを前提とした制度です。

以下に本制度（学則第 49 条第 3 項に定める 3 年次終了時の学位授与、以下「早期卒業」という）に関する規程に基づき、本制度（「早期卒業制度」）の適用を受ける上での要件を記します。

1. 早期卒業が認められる学生は、各号に定める次の要件(1)～(4)をすべて満たしていなければなりません。

- (1) 2 年次終了までに 80 単位以上（そのうち 64 単位以上を A-評価以上とする）を取得し、かつ GPA が 2.7 以上の者。
- (2) 3 年次終了までに卒業所要単位の 132 単位以上（そのうち 106 単位以上を A-評価以上とする）を取得し、かつ GPA が 2.7 以上の者。
- (3) 3 年次に「地理学演習」を履修した上で卒業論文を作成し、高い評価を得た者。
- (4) 卒業後、法政大学大学院人文科学研究科地理学専攻へ進学する者。

2. 早期卒業制度の適用を希望する学生は、2 年次のしかるべき時期に文学部窓口に、本制度適用願いを提出しなければなりません。

3. 本制度適用願いを提出した者に対しては、翌年 1 月に地理学科教員が面接を実施します。

4. 本制度適用希望者は 3 年次秋実施の大学院入試（面接試験のみ）を受験しなければなりません。

※ したがって本制度適用希望者は通常とは異なったカリキュラムになります。たとえば上記のように卒業論文は 3 年次終了時に提出しなければなりませんし、現地研究についても 3 年次までに履修しなければなりません。それらの違いを十分に理解して適用願いを出すようにして下さい。

2 現地研究

(1) 現地研究とは

●必修科目「現地研究」の履修の申込と評価

①「現地研究」への参加申し込みには2～4年生が可能であり、卒業までに合計6日間（＝2単位）以上の出席が要求される。

↓

3年次の終了時点で個人別出席日数の中間集計を掲示する予定である。

↓

この科目の履修登録は4年次の科目登録時に行なうこと。

↓

この科目の最終成績評価は4年次の学年終了時に集計して行なう。

②毎年度初めに、その年度の各教員による現地研究の実施予定一覧を掲示する。

③各教員が実施する現地研究の概要を実施前に掲示するので、その掲示内容を確認の上、各自、参加申し込みを行なうこと。

④参加申し込みは、原則として、地理学科事務室(BT・12階)にて受付ける。その受付方は各教員が明示する予定である。

⑤各現地研究の実施目的によっては、参加学生に一定の参加条件が課される場合もある。

⑥各現地研究は、原則として【事前説明会・現地での学習・実施後の報告会・課題提出】などをもって終了とする。

⑦参加学生の評価は、各担当教員が実施後に行なうものの、上記①のように、最終の集計総合評価（加重平均）は4年次の学年末に行なう。

(2) 自然地理分野の現地研究

1) 地形学編

「現地研究」は卒業までに6日間参加すれば2単位を取得でき、卒業要件の一つをクリアすることができます。1回3日間（事実上2泊3日程度）の「現地研究」に2回参加するというのが一般的なようです（伝聞）。個人的には、6日間連続（5泊6日）の授業に1回参加するほうが、内容の濃い現地調査を経験でき、卒業論文にも直接役立つと思いますし、さらに海外での現地研究も可能になるかもしれません。しかし一方で、将来全員が地理学の専門家になるわけではないことを考えると、異なった分野の現地研究に複数参加したほうが個々人の視野が広がり、頭の中にたくさんの引き出しを作ることができるとも言えます。悩ましいところではありますが、2泊3日程度の現地研究ならば、地理系の学会後によく行われている「巡見（あえて巡検とは書きません）」的なイメージでよいのではないかと考えます。

巡見とは、地理学の特定の分野で、有名な論文が書かれた場所や、学会でホットな話題になっている場所などを訪れて、論文に書かれていることを現地で検証したり、実物を見ながら議論したりして理解を深めることで、現場を重要視する地理学では非常に有効な勉強会です。学部学生が参加主体の場合は、最先端の高度な学術的話題にはついていけないかもしれませんので、教科書や参考書でよく引用される定番の場所（模式地といいます）を訪れて、講義で聞いたり見たりしたことを、現地で再確認したり、実際に物に触ったり（地形学の場合は岩石や土壌などになりますが）、高さや長さを測ったり、地層断面を観察・記録したり、地形のスケッチ（美術的な写生ではありません）をしたりすることで、卒論作成のヒントを得たり、意欲を高めたり、技術を修得したりすればよいのではないかと考えています。

現地研究といっても、ただ行って、見て、説明を聞いて、2～3枚スマホで写真を撮って、「あ～、そうなんだ～」で終わっては、せっかく高いお金を使って参加する意义がありません。事前の資料調査をどれだけまじめにやるかということと現地研究で得られる成果は完全に比例関係にあります。ゼミ旅行や卒業旅行気分に参加すると、非常にもったいないことになります。

さて、地形学・第四紀学分野の現地研究は、初夏と秋の2回行う予定です。地形学・第四紀学分野とは言ってもあまり細かく分野を絞ることなく、自然地理一般、もしくは関連する人文地理分野の話題も見学コースに入れる可能性もあります。参加者の人数や顔ぶれをみて課題は設定しますが、基本的に事前の資料調査のテーマを分担し、パンフレットを作成してもらいます。現地にはそのパンフレットを持って参加し、担当者は全員の前で説明と質疑応答をしてもらいます。また夕方宿に帰ったら、全員で当日訪れた内容についてもう一度確認し、翌日の予定についても概要説明を行います。終了後は簡単なレポートにまとめて提出してもらい、現地での説明、質問への回答、参加態度などを総合的に評価する予定です。

2) 気候・気象学編

気候学に関する現地研究＝気象観測を思い浮かべるのではないのでしょうか。気象観測を含んだ現地研究にしたいのですが、何分にもお天気相手のため、大きな困難が立ちはだかります。

そのため、気候学をメインテーマにしつつも、自然地理学全般を対象とした現地研究を実施しています。2017年度は、神津島と八丈島、2018年度は、立山黒部と伊豆大島で実施しました。詳細は、地理学科 HP もしくは地理学科事務室のカウンターに設置されている報告書をご覧ください。報告書を見ていただくとわかる通り、個人でのレポートとグループのレポートがあります。なぜならば、気象観測をはじめとした調査は、一人では実施できず、グループによる実施が求められるからです。また、気象観測は、場合によっては徹夜になることもあり、体力勝負になります。昼間の観測だけでも、ほとんどが徒歩（登山のこともあり）ですので、夕食後は、すぐに就寝というパターンです（こんなにぐっすり眠れたのは久々という意見もあるほど）。

現地研究は、帰ってきてからのまとめではなく、行く前の事前調査がどれだけできているかが成功のカギを握っているととっても過言ではありません。説明会に参加し、現地研究先に関する文献（もちろん、学会誌等に掲載されている論文等）を読み、地形図だけではなく、地質図や植生図を入手し、何をどのように調査してみたいのかといった目的意識を持ち、勉強会でグループごとに、現地研究先での調査内容について発表してもらいます。気象観測を実施する場合は、現地研究へ行くまでに気象観測機器の準備、観測の練習、気象観測機器の運搬の分担などもあります。もちろん、帰京後は報告書の作成が待っています。

気候をはじめとした自然地理以外のスポットも織り交ぜていくよう心がけますが、現地研究先で訪問（ヒアリング）したい場所がある場合には、事前に相談してください。これまでも、農家さんにヒアリングがしたい、防災について役場でヒアリングしたいなどなど、当初の予定にないことも多数実施してきました。

現地研究に参加し、現地研究先の自然の不思議に魅了され、“もっと知りたい”という知的欲求に目覚め、卒論研究に繋げている学生も多数います。

今後も、国立公園・国定公園・ジオパーク・ユネスコエコパークなどを中心に実施していく予定です。

3) 陸水・水文学編

陸水学・水文学分野の現地研究は、原則として年2回実施される。かつては、特定の地域で繰り返し開催されたが、1996年度以降は、全国の様々な地域の水環境を対象に、九州から北海道まで満遍なく対象としてきた。2006年度までは、春季現地研究を若干基礎的な内容を中心にしていただけて、2回の区別はあまり明確でなかったが、2007年度より前期は基礎、後期は応用と明確に区分した現地研究として実施している。他の現地研究と同様、説明会と報告会が義務づけられているが、この分野では、現地に行く前に自分たちで対象地域の「水文誌」を作成し、調

査計画を練った上で取り組む点に特徴がある。報告やレポートも単なる感想をまとめるようなものでなく、卒論や卒業研究の予行演習として役立つように、毎回参加者全員で報告書を作成している。

内容は、対象地域とテーマによって異なるものの、準備した「水文誌」をもとに現地の水環境を把握するため、国土交通省の河川事務所を訪問して資料を入手したり、実際に河川水・湖沼水・地下水などの水質・流量・水位などを測定し、その結果を分布図にして考察するような例が多い。場合によっては、現地の様々な機関と協力して研究会を開催したり、NPOや地域住民と交流したりすることもある。

最近では、現地に様々な測器を持参したり、測定結果を図化するためコンピュータを活用したりすることが増え、夜は宿舎で水質分析などに加えて、主題図の作成などGISのスキルについても学ぶことができる。

本分野の現地研究の効果をあげるためには、地理実習・地学実験・地誌学概論・SIS・GIS・水ゼミなどを受講し、総合的な力を付けておくことが望ましいが、現地研究をきっかけにこうした分野に対する興味を広げたい学生の参加も拒まない。

いずれにしても、系統的・総合的に学ぶことができる現地研究であり、この分野で卒論を書きたい学生だけでなく、地理学全般に興味を持ち、力量を付けたい学生の参加を期待する。また、正規の現地研究以外にも、水ゼミ単位で、年間を通じて様々な地域の現地調査を実施している。現地研究で学んだ技量をそうした中で発揮することもできるし、逆に、現地調査の経験を活かし深めるために現地研究で再確認するのもいいだろう。

(3) 人文地理分野の現地研究

法政大学地理学科における「現地研究」は、他大学や学界では「巡検」とも呼ばれています。後者の呼び方の方がその筋ではむしろ一般的かもしれません。

履修の上では2泊3日の現地研究を2回、つまり計6日間の参加が卒業の上では最低限度必要です。もっとも、それ以上参加することも可能で、かつては通算10回（参加日数29日）も現地研究に参加したつわ者もいたようです。いずれにせよ6日間以上の参加日数を満たさなければ卒業することはできません。さりとて引率者側からすれば、卒業のためだけに現地研究に参加するのも寂しい気がします。

人文地理学関係の現地研究では、これまでテーマ・実施場所等、さらにその実施の仕方は各教員に任されてきました。実施場所は北海道から九州、沖縄さらに海外におよび、研究調査に近い形式での聞き取り調査を実施したこともあれば、見学を中心とする場合もありました。そうした中で共通している点があるとすれば、現地研究を単なる「野外研究」「フィールドサーベイ」とだけは位置づけてこなかったし、そのように位置づけることは今後とも無いであろうということです。一般に流布した情報だけからでは得られない事実を、「現場」で感じ取っていただきたいという思いを強く持つ教員が多かったし、今もって多いのです。

「現実」がすべてありのままに伝えられることは少なく、我々に届く情報には何らかのフィルタリングが施されていると考えるべきでしょう。その意味からも、ジャーナリズム（あるいは警察関係）で言われる「現場百回」という言葉は地理学においても、ある意味で核心をついた言葉だと言えるでしょう。ましてやインターネットで検索できる社会現象は数限られていますし、たとえ検索できたとしても「何が問題か」をそこから見つけ出すことは難しいでしょう。「現場百回」の教訓は未だに生きていると思われまます。

現地調査（研究やルポのための...）はこれまでの固定観念を打ち破り、これまでの「色眼鏡」をはずす可能性を秘めた「現実の学校」に出ていくことと言って良いかもしれません。従来の固定観念やら一般論（学界で唱えられてきた...）に修正（場合によっては「否定」、あるいは部分修正を迫っていくのが論文ですが、それは現場での実態を踏まえることによるのみ可能になるのです。現地研究は現地調査を自ら行うための練習であるとも言えるでしょう。

さて、人文系現地研究の一般的な内容をお話するために、実際の現地調査を例にしてみます。人文系のそれは計測器などによって「測る」ことはほとんどありません。別の手段で資料を得ますが、そこが問題です。役所で資料を準備してくれる場合もありますが、その「下」あるいは「基」にある資料類を見ることはなかなかできません。そうした部分は聞き取る、あるいは中間集計したものなどを書き取るなどしなければなりません。役所の資料は凸凹した現実を均したものにすぎず、面白いのはその凸凹にあるのです。そもそも実態調査は「凸凹を知る」ためのものとも言えます。

それら役所などの資料や情報を踏まえて、実際に「現場」で資料を得ます。それは工場であったり、農家であったりしますが、そこでは紙に書かれた資料はほぼ無く、最終的には聞き取りをすることになります。まさに凸凹だらけで、それぞれの特色は一定数を調べた後に比較して、そこではじめて違いの大きさに気づかされたりするのです。「現場の学校」は偉大です。

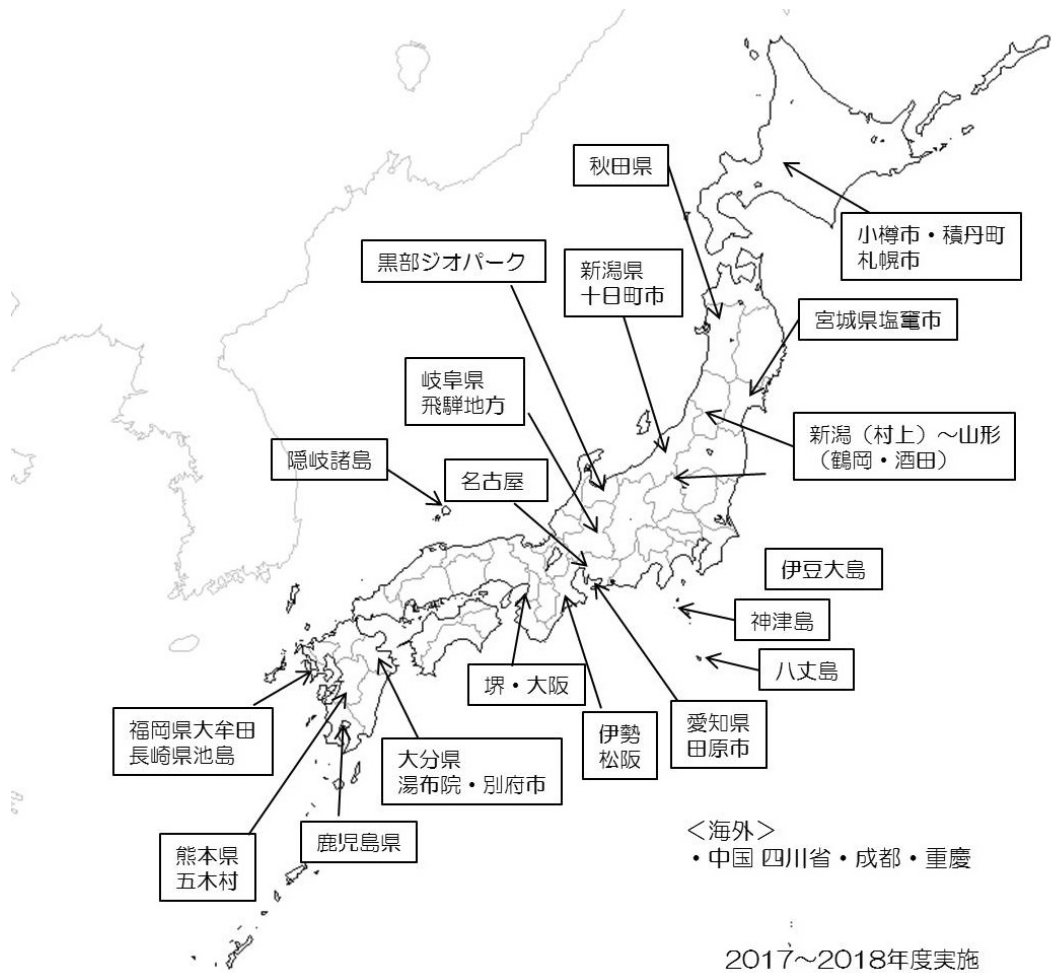
では、その前に「何を聞けばいいの」という疑問の声が聞こえてきそうですが、それを考えること、そこに現地調査の正否がかかっているのです。一定の仮説（つまり予測）を持って現場に行かないといけません、さりとてそれに縛られすぎると「現場」の声（つまり凸凹）を聞き漏らしてしまうことにもなりかねません。場合によっては、その場で臨機応変に「質問を作る」ことも必要になります。

こうして最終的にそれらをまとめますが、現地調査では論文という形式に、現地研究ではリポートという形式にまとめていきます。これらが現地調査の一連の流れですが、さてそれ以前の問題として考えておかなければならないのが「目的」です。いったい「何」を明らかにしようとしているのか、それこそが論文のポイントです。目的のない調査などあり得ないのですから...。したがって現地研究の際も、「何」が目的であるのか充分に知っておかなければならないことは言うまでもありません。

効率良くいかないのが現地調査で、現地研究もまた同様です。アポはとってあっても、相手の都合によって予定変更は茶飯事で予定通りにはいきません、現地調査も現地研究も...。「学校の

教室」では学べない「現実の学校」に出て、身近な「現場」から問題を考える、そのための「現地研究」...といったお説教じみた能書きはやめて、まずは「現場」に飛び出してみましようか

...



現地研究実施地域 (2017～2018年度)

3 卒業論文

(1) 卒業論文とは

●必修科目「卒業論文」の作成と提出

- ①3年次の後期（10月頃）に「卒業論文（＝卒論）」作成のためのガイダンスを実施するので、必ず出席のこと。
- ②上記①で各自に配布される卒論申請書用紙に記入の上、指定期日までに地理学科事務室に提出のこと。
- ③上記②で提出された卒論申請書用紙の内容をもとに卒論指導教員を決定し、その結果を掲示で公表する。
- ④上記③で卒論指導教員確定後には、各自が担当教員の指導・指示のもとに卒論作成に取り組むこと。
- ⑤上記③以降に卒論作成予定のテーマ・分野を大幅に変更する際には、担当教員にその旨を申し出て、その指示に従うこと。
- ⑥基本的に卒論の指導は各教員の演習（ゼミナール）で行われるので、4年次に卒論指導教員の演習を登録・履修することが望ましい。
- ⑦卒論の提出締め切り日、提出先は予め履修要項などで告知されるので、それを必ず遵守すること。なお、如何なる理由でも卒論の遅延提出は認められない。
- ⑧卒論提出後には、卒論発表や面接口頭試問などに備えておくことが望ましい。
- ⑨提出された卒論は、原則として「卒業決定発表」以後、地理学科事務室にて各自に返却する予定である。

(2) 自然地理分野の卒業論文

法政大学文学部では「卒業論文」を必修として課している。文学部地理学科もその例外ではない。しかもその単位数は通常の科目よりも多い8単位とし、卒業要件の最終関門と定めている。換言すれば、そこでは地理学科に入学し、在学中に養成した各自の知的総力を注いだ成果の結実が期待されている。しかしながら、実際に提出された卒業論文(=卒論)を査読すると、残念なことに必ずしもそうとは評価しえない内容の卒論に遭遇する。そこには偏に本人の卒論に対する自覚の無さと努力を傾注する姿勢の欠如が伺われる。と言うのも、入学時に等しく試験を突破して大学の門を潜った学生間に、本来それほど大きな学力の差は無いはずだからである。

申すまでもなく、卒論は作文やレポートとは異なる。つまり、卒論には自らの発想で研究の必然性・意義を踏まえた問題設定を行ない、その解明のための方法・手順を試行錯誤的ながらも確立した上で、客観的な事実に基づいた議論を展開して結論を導くという、一連の思考過程が求められる。だから間々見られる適当な参考資料を編集し、転記すれば済むという安直な姿勢の卒論は言語道断だと言わざるを得ない。

私がこれまで担当してきた学生に対して、卒論指導の最初に伝える事柄を以下に記すので、卒論はまだまだ先のこととは言わずに、今この時点から下記の事項を十分に念頭に入れて、計画的に取り組んで欲しい。

< 1. 問題設定への手順 >

各自、様々な動機や関心により定めたテーマに関わる分野におけるその時点までの研究の推移を押さえ、現状ではその分野で何が課題として残置しているのか検討したうえで、問題設定をする必要がある。それには専門領域の参考書などの基礎的内容を土台とし、具体的な研究論文を学術雑誌にて読むことが要求される。この学術論文の熟読では、各自が履修する演習(ゼミ)などでの訓練内容が問われることになる。

さてどのような論文が、いつ、どの学会誌に掲載されているかは、『地理学文献目録・1～12』(=地理学科事務室に所蔵)を捲ると一目瞭然で、1945年から2006年まで発表された国内の地理学関係の論文が網羅されている。またさらに必要に応じて欧文雑誌の論文も参照し、自分のテーマに関連のある先人の研究を以前に遡って追求しては、コピーをして主要文献の要旨を押さえ、『文献ノート』を作成することが最初の仕事となろう。このような文献の追跡作業をレビュー(review)というが、これを通して各研究分野の課題・問題点が浮き彫りにされてくるだろう。なお、文献などをコピーして手元にファイルする際には、必ず何からコピーしたのかをきちんと付記することを忘れてはならない。往々にして後で文献名を明記するに及んで、原本探しに迫られることがあるからである。

また分野やテーマの設定の際には、次の2とも関連するが、如何にしたら自分の強みや長所を、最大限に発揮できるのか意識することも忘れてはならない。肝心なのは、少なくとも諸君が、自分の関心領域の研究の今日までの進展をきちんと把握した上で、意義ある研究テーマの設

定をする点にある。と言うのも、失礼ながら恐らくそれはある日、突然、各自の脳裏に思い浮かぶことではないだろう……あのニュートンのように。

< 2. 解析方法の構築 >

研究テーマ・目的が定まったならば、どこかの地域を対象に研究するのか、それともその必要性の無いテーマなのか、じっくり考えることが大切である。前者の場合には地域選定の合理性を十分に考慮することが肝要であり、取り組む以前に地域が設定されていたのでは本末転倒とも言える。さらに次の段階では、目的に対する解明・アプローチの手順を具体的に吟味することが極めて重要になる。その際、自分でデータをつくり出す必要性のある場合以外には、他人のデータに依拠するわけであるから、データの所在とその中味を確認して、方法・解析の手順を模索せねばならないだろう。また資料収集先とのコンタクトをとることも勉強の一つと言える。なお、ここで注意を要するのは目的とする現象の『スケール（尺度）』を熟慮することである。

< 3. 投網でメダカは獲れない！ >

時々“自然地理は現場に行かねばならないから大変だ！”と耳にすることがある。それは目的とする現象のスケールやその性質を考慮していない不勉強の現れとも言える。それこそ研究の目的に応じて、対象地域に足しげく通い、データを得ることが基本的に要求される一方では、公的機関によって公表されている資料のみで事足りる場合すらある。たとえ現地へ何度となく赴いたとしても、写真撮影に終始したのではまったく無意味であることも皆さんには先刻承知であろう。要は、研究の狙いと現象のスケールを考慮した解明方法との合理性を根底に据えて慎重に思慮せねばならない。

< 4. 周りから見えない思考が勝負の分れ目 >

上記の1～3により、どのような課題（目的）を、どのような地域で、どのようなデータを用い、どのような方法で明らかにしようとするのか大筋が定まる。ここまでは、机上で思考することが可能であるゆえ、周囲の他人には分からないものの、この段階まで明確に終えれば、研究の6～7割ほど完成した（仕事量ではなくて内容的に）と言える。残りは計画的に自分の定めた解析の手順に則って着実に前進を図れば、時間の関数として卒論は完成に近づくであろう。従って、研究の方針をじっくり練るこの段階までが極めて重要である。ここまでの思考過程を「フローチャート」（解析手順や使用資料などを併記した流れ作業的な図）にして吟味することを強く勧める。この思考は同時に自分の卒論の骨格を組み立てることに連動している。逆に安易な姿勢で卒論に対処し、研究の意義や方法も考えずにデータ収集や現地調査を遂行しても砂上の楼閣に過ぎず、何ら卒論が進捗していることにもならない。この点を誤解しないように強調しておきたい。

< 5. 最低限のハードル >

卒論において、各自に求めたいのは、内容や方法論のうえでアイディアに満ちあふれた独創的な論文と申したいところだが、言うは易しく誰にでも簡単に出来ることではない。それゆえ一歩譲って、内容や方法論では先人の研究事例などにたとえ追随したとしても、図表の表現やデータ処理の面などで、何かしら大学生としての“頭”を駆使した独創性の発揮に努めてもらいたいものである。35年近く教壇に立っている間に、多少の紆余曲折を経ながらも、私はこの点を『学士号』の論文の最低限のハードルとして設定している。

< 6. 無視できない図表の効果 >

地理学の論文では、図表の果たす役割がとて大きなウェイトを持つ。だから、図表の効果を最大限に活かすとともに、有効な統計処理を施す工夫も忘れてはならない。ここに基礎的な統計学の知識が要求される。また卒論の提出段階では、図表を製図ペンでトレース仕上げをするか、パソコン処理で図化するように心がけて頂きたい。ただし、パソコンへの過信は禁物であるし、機器はいつか壊れるものであることをお忘れなく！

< 7. 文章化の順序 >

この段階に到達すると、おおよそ自分の卒論の骨子が脳裏に浮かぶだろう。論文のテーマや内容によって多少の違いはあっても、その骨組は、ほぼ起承転結や序論・本論・結論を意識した論文の構成かと思う。そこで目次案を検討した後、それに沿って早速、下書きを書き始めたいところである。だがこれまでのデータ処理や図表作成の過程で気がついた点も決して少なくないはずである。それらはその都度、「卒論用ノート」などにメモしておきたい。そのメモが文章化を試みるこの段階でとても役に立つので、是非それを心がけて欲しいものだ。後日、思い出して綴れば済むのではと思っても、人間、よほど時間的に余裕がないと、とかく忘れがちであるから……。事実、卒論の提出後にさんざん言い訳めいたことを申して後悔するのもこれを怠った学生に多い。

< 8. 誰でも最初からうまく書けない！ >

さていよいよその下書きである。下書きとは言え、書き出しに相当する序論から書くのはとても難しい。作家に言わせると、小説でもこのアタマの入り方にかなり悩むらしい。なかでも推理小説などはその最たるものかも知れない。そこで序論は後回しにし、調査方法や解析手順から書き始めると良い。これなら上記2、3でかなり思案した事柄だから、その思考過程に従って順々に説明することは容易であろう。そこから得られた結果の記述もそんなに難しくはないはずだ。結果をもとに考察をきちんと加え、最終的な結論を導くとともに、自分の解析方法では解明されずに残置した問題点を整然と記述して欲しい。

その後、得られた結論を念頭に入れて自分の研究目的、つまり先人の研究を踏まえた自分の卒論の研究意義、位置付けなどの、ある種の“哲学”を述べるならば、頭と尻の整合性は図れる。ややもすれば序論で大上段に構えて、大風呂敷を広げた割には、さほどの結果が得られずに尻すぼみの卒論が目につくのは、この順序の取り違いにあると、指導生に私は強く説いている。

誰でも最初から名文は書けない。確かに「読む」より「観る」世代の若人へと変質するにつれて、文章の表現力が低下するのもやむを得ない。ならば自分で常日頃から書く訓練を重ねるしか術はない。その一步として、自分で気に入った随筆やいたく感心した言い回し、あるいは新聞の社説などを手元にコピーして、それを何度も読み返すことを私の体験から勧めたい。あと個々人に求められるのは語彙力の養成しかないだろう。卒論とはいえ自然科学の論文に違いがないから、短文主義に徹した方がベターと言える。

さらに学生から間々質問を受けるのは、卒論の枚数、つまり分量である。これに関する明確な規定は学科内には無いけれども、上述してきた順序を踏んだ卒論の内容を誤解なく読み手に理解させるには、少なくとも所定の様式で15～20ページ程度は必要となるはずである。ゆえにどうしても卒論の分量が気になる場合には、その枚数(20ページ)をクリアしておけば心配無用と言える。ただし、文章量が多ければ卒論の内容でも優れているとは、必ずしも言えない。努力は上に積み重ねるから崩れるのであり、最初から横に並べれば崩れはしないのだ。なるほど!?

< 9. インクの乾かないうちに提出するな! >

文学部の学生にとって卒論の提出日は厳格に定められており、履修要項に記載されている。また遅延提出の理由を問わず期日に遅れての提出は認められない。だから卒論提出日の締切りから逆算して、数カ月余裕をもった清書前の段階で、指導教員が下書き原稿を読めるように対応して欲しい。もちろん下書きとは申せ、他人に読ませるのだから、自分で何度(最低でも5～6回と私は指導の学生に言明している)も素原稿を検討しては推敲を重ね、“自分ではこれ以上の文章を書けません”という段階になって、指導教員に読んで戴くことである。この事を“インクの乾かないうちに提出するな!”と私は譬えている。それを一つのチェックポイントとすることによって、少なくとも体裁上の基本的な落ち度なども回避できよう。この下書き原稿を指導教員に渡して添削を仰いでいる間に、卒論に添付する図表の最終的な清書などにその期間を充てれば、時間の有効活用となろう。

< 10. 原稿用紙の使用にも約束事がある >

卒論作成は手書きでもパソコン印字でも、読み手が正しく読める綴り方ならば差し支えない。それでも字数や行数などは卒論ガイダンスなどの折に予め指示した形式に合致している必要がある。さらに横書き原稿用紙の使用原則に則って綴られていることも当然である。この裏には、卒論作成を通じて少なくとも原稿用紙の常識的な使用法を再認識して欲しいという理由がある。しかし、誤字や脱字、あるいは日本語としてあまりに多くのミスが目立つようでは、それ以前の間

題かも知れない。

< 1 1. 論文とレポートの違い >

卒論研究で大切なのは、上述の手順をきちんと踏むことであり、そうせずに何か周囲の人にも分かるような行動を起こすことでは決してない。この手順こそが卒論作成を通じて「研究論文とは何か、どうあるべきか」を知る第一歩でもある。かくして、自分の居住地や出身地に係わる適当なテーマをと当初から決めて取り掛かることは、卒論作成で踏むべき順序として主客転倒である事に、これ以上の説明を要すまい。

< 1 2. 卒論指導を仰ぐまでの義務 >

地理学科では、卒論の指導教員を遅くとも3年次の後期に決定している。それから以降には指導教員による個別の指導がスタートするので、その指導の内容を的確に理解して着実な前進を図って欲しい。指導教員との面談には、少なくとも上記の1～4の内容を明確に説明できる準備が求められよう。登山に置換するならば、上記4までで既に六合目付近まで登ったのであるから、易々と途中で後戻りはできないだろう。だからこそ、上記4までが既述したように重要である。

< 1 3. 卒論面接試問への準備 >

めでたく指定の締切日まで卒論を提出したからと言って、卒業が保証されたわけではない。地理学科では複数教員による面接の口頭試問が待ち受けているので、それへの準備が必要となる。そこで事前に自分で想定問答を試みるのは非常に有効である。おそらく用意周到な学生は、提出した自分の卒論のコピーを手元に残して、面接試問への準備と対策を練るであろう。

これまで述べた手順をきちんと踏むことなく卒論を作成した場合には、この面接時にその怠惰で安易な姿勢と研究内容の綻びが露呈し、双六ゲームのように振り出しに戻らざるを得ない。学科教員一同が衷心より、皆さんの“学士号”に相応しい1回での「上がり」を祈念しているにも拘らず、とても悲しいことにリセットとなる。何のことはない、この卒論作成の順序をきちんと踏めば“卒業”できるのである。

なお、地理学科では独自に『卒業論文について』という冊子を作成し、3年次の秋季に行なう卒論カイダンスの出席者に配布していたが、今日では、地理学教室のHP上に載せて公開することに置換している。卒論作成に取り掛かる前に必ず一読することを強く申し渡しておき、筆を置きたい。否、パソコンのキーを叩くのを停止したい。日本語はかように難しいのである。

(3) 人文地理分野の卒業論文

◆テーマの決め方

まず、自分が取り組むべきテーマを決めることが卒業論文作成に向けての第一歩である。人文地理学が研究対象とするテーマは幅広く、極端な言い方をすれば、地球表面上での人間が関与す

るあらゆる事象が研究対象となりえよう。しかし、実際にはそのすべてがテーマに適するとは限らないことから、慎重に判断する必要がある。以下では、どのようにしてテーマを決めればよいのか、筆者なりの考え方を記していく。

筆者が考える前提として、卒業論文を執筆する本人が気になる事象や興味のある内容をテーマとするのが大切であると考え。つまり、執筆者はやりたいテーマに取り組む「権利」を有する。だからといって何をテーマにしても許されるというのではなく、卒業論文という審査を受ける（単位取得に関わる）文章を執筆するのであるから、そのテーマの妥当性を他者（とりわけ教員）に納得させる「義務」も生じることを理解しておかなければならない。教員を納得させるということは、とりまなおさず学術研究として、また、地理学の卒業論文として適切であることを意味する。この点は卒業論文指導における最初の段階で教員のチェックが入ることになる。

筆者の経験上、研究テーマの設定理由は、①気になる事象・興味のある内容、②地元や縁のある場所に関する事象、③簡単そうなテーマのパターンに分けられる。上述のように、まずは①のパターンでテーマを決めるのが望ましい。その上でテーマが妥当であれば、すぐに卒業論文に取り掛かれよう。

次に、②のパターンに関しては注意が必要である。このパターンによるテーマのすべてが不適切であるとはいわないが、対象地域を優先し、扱う事象を後付けにしてテーマを決めた場合、往々にして、対象とする事象と地域との間に合理性を有しないことがある。これでは研究の第一歩目から道を踏み外しているので、その後どんなに頑張っても、どこかで無理が生じてくるし、仮に論文を書き上げたとしても、教員が最初の数ページを読めば看破されてしまう。また、調査の利便性を考慮し、居住地に近い場所に関する事象をテーマとするケースも散見されるが、これも同様に、事象と地域の間に合理的な理由がなければ問題となる。

③のパターンは言語道断である。そのような心積もりならば、途中で挫折してしまうか、あるいは低水準の論文を書き上げるに留まるであろう。当然、卒業論文の評価としてはD評価となり、再度卒業論文に取り組んでもらうことになる（卒業論文の評価基準については『卒業論文について』を参照のこと）。

最後に、テーマの決め方というよりも、研究の意義やオリジナリティに関わる事柄であるが、これまでに誰も研究を行っていないことを理由にテーマを設定し、そのテーマの意義を提示する人がいる。たしかに、誰も取り掛かっていない事象を研究するのは、一見するとオリジナリティの高い研究のように思われるのであるが、実はここに大きな落とし穴がある。誰も研究を行っていないテーマというのは、自明であるため研究する必要がない場合や研究することに意味を有さない場合、研究したくても方法論や資料上の制約から困難である場合が多い。つまり、学術研究として、地理学の卒業論文として不適切なテーマということであるので注意が必要である。

◆人文地理学分野における主要雑誌

既往文献を読むという作業には幾つかの目的がある。第1に自身の卒業論文の位置づけを示す

ためであり、第2に関連する文献を芋づる式に調べるためである。それらに加え、第3に方法論や資料を参考にするためにも既往文献を読む必要がある。もちろん、地理学分野以外の文献を参照することも多いが、やはり人文地理学の卒業論文を執筆するのであるから、その分野の文献を読むことが多いであろう。

そこで、ここでは人文地理学分野における日本の主要な雑誌を紹介しておく。人文地理学に関連する学術雑誌は非常に多いが、その中でも主要雑誌として、『地理学評論』（日本地理学会）、『人文地理』（人文地理学会）、『経済地理学年報』（経済地理学会）、『歴史地理学』（歴史地理学会）、『地理科学』（地理科学学会）、『季刊地理学』（東北地理学会）の6つが挙げられる。『地理学評論』や『地理科学』、『季刊地理学』は人文系だけでなく自然系の論文も掲載される。『経済地理学年報』や『歴史地理学』に掲載されるのは、雑誌名の通り、経済地理学や歴史地理学の論文が中心となっている。

また、これら主要6雑誌以外にも、『都市地理学』（日本都市地理学会）や『新地理』（日本地理教育学会）、『地理空間』（地理空間学会）などの地理学分野の雑誌があり、人文地理学分野の論文も多数掲載されている。さらに、地理学分野だけでなく学際的な分野の雑誌ではあるが、しばしば人文地理学の論文が載る雑誌に『地学雑誌』（東京地学協会）や『日本都市学会年報』（日本都市学会）、『GIS—理論と応用—』（地理情報システム学会）、『地図』（日本国際地図学会）がある。

以上の学術雑誌はすべて学術学会が刊行している雑誌であるが、それら以外にも各大学が学部や学科、あるいは学内の学会を母体として刊行する雑誌（しばしば紀要と呼ばれる）も無数にある。当然それらにも人文地理学分野の論文は掲載される。詳しくは、『ジオ・パルNEO』（海青社）を参照していただきたい。そちらには地理学分野の主要な外国語雑誌の情報も記されている。

◆調査方法・資料

調査内容・方法は明らかにしたい事象によって異なる。また、その事象をどの視角から、どのような面を明らかにするかによっても調査内容・方法は変わってくる。それゆえ、卒業論文において何を明らかにしたいのかを明確にしなければ、調査方法を定めることができない。

人文地理学分野における調査方法はフィールド調査と資料調査に大別できる。前者では、対象地域での実見や参与観察、計測、アンケート、ヒアリング・インタビューなどが当てはまるが、それらの方法を通じてオリジナルのデータを得る点に特徴がある。一方、後者では、文献などの資料・データの収集や複写・筆写・撮影などが該当する。統計などインターネット上でデータがダウンロードできる資料や複写・撮影可能な資料は、比較的容易に入手することができるが、複写・撮影ができない資料などの場合は筆写の作業を要する。とりわけ、古い資料についてはこのような作業が必要な場合が多い。

また、後者の方法で得られる資料は、皆さんが考えているよりも多く、ずっと多様である。研

究テーマによっては、意外なものも資料となる場合がある。それゆえ、日頃からどのようなものが資料となりえるのかアンテナを張っておくことも必要である。主な資料を幾つか分類してみると、まず、統計データが挙げられる。国勢調査や経済センサス、観光動態調査など国や地方自治体が作成する公的な統計から、シンクタンクや民間企業などが作成する統計など多様に存在する。無償で得られるものが多いが、後者によって作成されたデータの中には高額なものもある。

次に、自治体や民間企業など特定機関の情報も資料となる。自治体についての情報は統計データとともに、報告書や市町村史に掲載されている。民間企業については IR 情報や有価証券報告書、社史の情報が有用である。

研究を進めるにあたり、どうしても一般には販売されていない地図が必要となる場合があるが、必ずしも自分が必要とする地図が都合よく作成されているとは限らない。その場合は、他の地図を援用する工夫も必要となる。そのためにも、研究対象地域について、どのような地図があるのか幅広く知っておくことが望ましい。また、写真など地図以外の画像資料も大いに活用できる。その画像を見て得られる情報もあるほか、判読や分析を通じて、さらなる情報・データを生み出すことも可能である。

それら以外にも、会議の議事録や雑誌記事、個人の日記、広告なども資料となる。このように、どのようなものでも資料となりえるが、その資料がどのような性格のものであるのか、誰がどのような目的で作成したのか、信頼できる資料であるのかなど、しっかりとした資料検討・批判を行った上で使用する点を肝に銘じてほしい。

◆論文作成のポイント

人文地理学の論文を作成する際のポイントとして、i 研究対象地域の把握、ii 地図（主題図）・グラフの作成、iii 分析における空間スケール、iv 分析における視角、v 関連する学問分野との関係性、の諸点が挙げられる。

まず、i については、調査・分析対象となる事象を理解するための基礎的作業として、その地域のコンテクスト（文脈・背景）を把握しておく必要があることを意味している。しばしば、何の意図もなく、形式的に対象地域の概略を説明する論文が見られるが、上記の目的をもって対象地域の把握・概略の提示に取り組んでほしい。

ii の指摘についてはよく聞かれるものと思う。実際に、地図化する（主題図を描く）点に地理学の特徴があると考えている人も多いであろう。ただし、地図やグラフを作成するのが目的でなく、より良い分析を行うための作業として地図・グラフを描くのであることを忘れないでほしい。目的としてではなく、あくまで手段としての地図化（視覚化）であることに意味がある。

次に、iii については、どのような空間スケールで分析するのが適切であるのか捉える必要がある。そのためには対象とする事象の意味を理解しなければならないとともに、どの空間スケールで分析するのが最も説得力のある結果を提示できるのか把握する必要もある。極端な例ではあるが、多国籍企業のグローバルな事業展開を日本という空間スケールだけで分析するのは不十分で

あるし、都市システムの研究を行うのに都道府県単位のデータで分析するのは不適切である。また、例えば店舗立地を分析する際、都道府県のスケールで見ると分散立地の結果が得られるが、もっとミクروسケールで分析すると、特定の地域に集積立地する傾向があることが判明するなど、同じ事象であっても、どの空間スケールで分析するかによって得られる分析結果が変わってくることがある。それゆえ、マルチスケールで分析・考察することも大切である。

iiiと同様のことがivについても指摘できる。1つの事象でも観点や視角が違えば異なる見え方になる場合が多い。また、立脚する立場によってその事象に対する評価も正反対になることさえある。それゆえ、さまざまな観点から事象を見ることが必要であるとともに、その見解がどの主体（アクター）によるものかを明示することも求められる。

最後にvについてであるが、人文地理学が研究対象とする事象は他の学問分野でも研究されている場合が多い。それゆえ、関連する他の学問分野への目配りも必要となってくる。他の学問分野の文献を読む場合に気を付けなければならないのが、その文献の評価の仕方である。しばしば、他の学問分野の文献を評価する際に、地理学的な観点が不足しているとして批判を加えている事例を見かけるが、その分野が目指すところは地理学とは異なっているのであるから、その差異は当然のことである。地理学では地理学なりの見方・考え方や分析方法があるように、他の学問分野でもその分野なりのルールがあるので、それを尊重した上できちんと評価しなければならない。

(1) 地形・第四紀学

①地形・第四紀学とは

地形学は、文字通り地表面の形態である地形について、地形を形成する作用、地形を構成する物質、地形形成の時間、過去の地形形成環境の変化などを明らかにすることを主目的とした自然科学です。また、現在の地形が形成された過程を過去に遡りながら明らかにすることによって、将来の地形変化まで予測することが可能になり、さまざまな分野に応用できる応用科学でもあります。第四紀学は、第四紀（現在から過去 258 万年前までの最も新しい地質時代）に起こった様々な地球史上の出来事について総合的に解明し、近未来の地球の姿を科学的に推定しようとする学際的な研究分野です。また、扱う時間のスケールが（特に日本のような変動帯では）地形学と重なっている部分が多いため、地形の形成過程を考える上で、第四紀学の研究成果は非常に重要であるし、さらに言えば、（すべてではないですが）地形学そのものが第四紀学の一部になっているとも考えられます。また、第四紀は人類紀ともよばれ、人類（ヒト属）が地球上に姿を現して以降の特別な地質時代として、人類の過去・現在・未来を長期的な視野で考察するために、非常に重要な時代と考えられています。このように、一見無機的な（血の通っていない）自然科学であると捉えられがちな地形学や第四紀学が、人類と自然の関係を考察する自然地理学と非常に関連性が高く、双方に関わっている研究者が多い理由は、人類の活動は地形形成や第四紀の環境変化に大いに影響を受けており、また影響を与えているからです。

②学習意欲を高めるために

もともと地形や第四紀の環境変動に非常に興味を持っている人は、残念ながらそれほどいないのではないかと思います。高校では自然地理的な内容はそれほど時間をかけられていないですし、むしろ、地学に興味ある人のほうが分野的には近いですが、地学そのものが最近あまり高校では開講されていないことが多いからです。もしそのような（奇抜な）人がいたら、この部分は読む必要はありません。次の項目を参考にして、どんどん自学自習して専門的な知識、研究分野の動向、研究方法など身に付けて下さい。たいていの人は、関連するテレビの番組で見てちょっと気になるとか、好きな芸能人が面白いと言っていたとか、その程度だと思います。そういう普通の学生さんは、まずは身近な地形・環境に関する情報・図書を集めてみてください。おすすめは、最近文庫本になった「東京の自然史」（貝塚爽平、講談社学術文庫）を読んでみてください。文庫といってもばかにするなかれ、もともと紀伊國屋書店からハードカバーの本として出版されていた啓蒙書で、地形（地図）好きの芸能人（タモリさん、真矢みきさんなど）がテレビで紹介したこともあって、再版された名著です。中身は結構専門的ですが、自分たちが暮らしている東京の地形・環境史がわかりやすく解説してあって、目からうろこが落ちること間違いありません。「ブラタモリ」の DVD を見るのももっと簡単で入りやすいと思います。同じ東京の地

形史について、防災・災害史の立場からみた「江戸・東京の地形学散歩」(松田磐余、之潮)も併せて読むとさらに関心が高まると思います。「地理も好きだけど歴史も好き」という人は、「地形からみた歴史」(日下雅義、講談社学術文庫)も面白いです。最近、CGの技術がすごく発達して、恐竜やマンモスも本物かどうかわからないくらいになり、たいへん驚いています。地球史や環境史に関するNHKやBBCが制作した番組は、たいへん見応えがあって印象深いものが多いです。TSUTAYAにもあるでしょうから、別のDVDを借りに行った時でもいいので、ちょっとついでに教育DVDコーナーも覗いてみてください。環境をテーマにしたジブリのアニメも実は奥が深いです。

③学習・研究の方法

学習の方法は、興味を持った分野の啓蒙書や専門書を読むこと、それと授業でも行いますが、研究論文を読むことです。おそらく、研究論文や専門書を読んで、近辺にその現場があることがわかると、その場所にとにかく行ってみたいくなります。そうなってくればしめたものです。詳しいことや専門的な難しいことは最初わからなくてもいいのです。とにかく現物を見ること、そしてなんとなくそれに「面白さ」を感じるのが重要です。いわば「自主現地研究」をやるということです。個人でもグループでもかまいません。その段階でわからないことが当然たくさん出てきます。教員を大いに利用してください。現地に行くには地図は必携です。地形を空から立体的に見ることができる空中写真という優れたものがあります。グーグルの画像も役立ちますが、やはり地形研究には空中写真の実体視がよいと思います。興味を持った現地の写真はネットで簡単に手に入ります。最近ではレーザー測量などにより、CGで地形を細かく表示することができるようになりました。このような方法はまだまだ専門家のツールですが、簡単なものなら学生さんにも利用できるものはあります。興味を持つ→勉強する→物を見る→考える→(教員に聞く)→勉強する(技術を修得する)→物を見る→考える→・・・、このサイクルの繰り返し、学習・研究方法とはこれ以外にありません。

④専門性を活かした職業

地理学科で地形学・第四紀学を専攻して、研究者以外に専門性を生かせる職業にはどんなものがあるでしょうか。まずは中学校・高等学校の教員でしょう。本学科では中学校社会、高等学校地理歴史の教員免許に加えて、中学校理科、高等学校理科の教員免許も課程認定を受けています。学校教員はたいへんな職業だけれども、やりがいのある魅力的な職業の一つだと思います。民間企業だと、建設コンサルタント系の仕事に就けば、専門性は大いに活かせると思います。活断層や地すべりなど、地学系の自然災害を予見したり、被害を軽減したりすることは社会で最も注目されている業種の一つだと思います。測量関係や地域調査関係の資格もこの学科では取れるようになっています。その他、旅行会社もいいのではないのでしょうか。最近の傾向として単なる観光地巡りではなく、ちょっと知識欲が高い人たちのためのエコツアーだとか、学習ツアーが売

り上げを伸ばしていると聞きます。そのようなツアーの企画や案内に、自然地理学の知識が十分に活かせる業界だと思います。公務員となって役所で働く場合も、土木系の部署や市民生活系（防災・安全）の部署で専門知識は役に立つし、最近では役所でも大いに活用されている GIS などコンピューターで地図を扱う技術を身につけておけば鬼に金棒です。国土地理院や産業技術総合研究所などの専門性の高い政府機関や独立行政法人もありますので、興味があるひとは早めに就職試験などの情報収集を始めるとよいでしょう。

（2）気候学・生気象学

①気候学・生気象学とは何か

「広辞苑第七版」(2018)によれば、以下のように説明されています。

きこう【気候】各地における長期にわたる気象（気温・降雨など）の平均状態。ふつう 30 年間の平均値を気候値とする。

きこうがく【気候学】気候の要因、気候と人間生活との関係などを研究する学問。

きしょう【気象】大気の状態および雨・風・雷など、大気中の諸現象。

きしょうがく【気象学】大気の状態およびその中に起こる諸現象を研究する学問。狭義には気候学を除く。

せいきしょうがく【生気象学】生体に及ぼす気象の影響を研究する学問。

つまり、気候学・生気象学は、気候や気象と人間生活との関係などを研究する学問といえます。

②どのように学ぶのか

地理学科の学生のなかには、小さい頃から気象予報士（≠お天気キャスターですので、ご注意ください！）を目指している人もいますが、大多数の気候ゼミの学生は、なんとなく空を見ているのが好き、環境問題に関心がある、自然の中にいるのが好きといった動機で気候学を専攻しています。気候や気象と人間生活との関係などを研究するためには、自然地理学の科目を履修するとともに、人文地理学の科目も積極的に履修してください。

「気候・気象学及び実験Ⅰ・Ⅱ」で参考文献にあげているテキストをはじめ、地理学科事務室・大学図書館にある気候学関連の書籍・文献を読み、興味がある分野を開拓してください。気候学の研究を進めるためには、データ解析がつきものですから、簡単な統計学（Excel できれば R）や GIS（MANDARA できれば GMT）についても学ぶ必要があります。観測を行う場合には、体力と気力が求められます。古気候（といってもそんなに古くはない、せいぜい千年程度）の復元に興味がある人は、古文書の解析やデータ入力などの地道な作業が必要となります。生物季節を研究するためには、対象とする植物や動物に関する生物学的な知識も必要となります。このように、気候学といっても、研究テーマによりアプローチ方法が全く異なりますので、気候ゼミの先輩や教員に気軽に声をかけ、相談してみてください。

気候ゼミの学生が卒論研究のテーマを研究室へ相談に来ると必ず聞く質問があります。

「あなたは、何に興味があるの？何が好きなの？」

“何”の部分、気候学や地理学と全く関係ないもので構いません。話していくうちに、必ず気候学関連のテーマが見つかります。美容⇒UV インデックス、ポテトチップ⇒北海道豪雨など、一見、気候学と全く関係がないように思われますが、きちんと卒論としてまとまっています。なぜ、このような質問をするのかというと、せつかく1年かけて研究するのですから（卒業するために卒論を書くのではなく、大学での学びの集大成として取り組むもの）、興味のあるテーマを徹底的に追及し、その研究については日本中の誰よりも、世界中の誰よりも専門家になるぐらいの意気込みで取り組んでもらいたいからです。

気候学は、研究テーマによっては、季節に左右される（例えば、サクラの開花は春、熱中症の研究は夏、紅葉の研究は秋、雪の研究は冬）ことがありますので、卒論研究の開始時期が早いです。3年生の秋までには、研究テーマを決めなければいけません（観測が間に合わなくなるため）。そのためにも、2年生までに、幅広く地理学を学び、色々な分野に興味を持っていただければと思います。

③気候学を生かした仕事とは

気候学を生かした仕事の最たるものは気象会社へ就職することでしょうか。気象会社で働くためには、気象予報士の資格は必要です。学生時代に取得する学生もいます。気象会社以外にも、環境コンサルをはじめとしたコンサルタント会社では、気候・気象の知識は生かされます。

また、気象庁、環境省、国土交通省などの国家公務員、都道府県市区町村の地方公務員は、気候だけではなく地理学科での学び全てを生かすことができます。中高の教員（地理や地学）も大学での学びを生かせます。

最近では、気象災害が頻発していることから、損害保険会社で気候・気象学の知識を持った人材が求められています。

どのような業界であっても、地球上で活動する以上、気候・気象に左右されますから、それらの知識を身につけていることは、役に立つのではないのでしょうか。卒論研究を真摯に取り組んでいる学生は皆、就活の面接やエントリーシートで、学生時代に取り組んだこととして卒論を取り上げ、希望の会社・業界に就職しています。就活を終えてから卒論に取り組むのではなく、就活も卒論も同時並行で進めていただければと思います。

（3）陸水学・水文学

陸水学および水文学は、自然地理学の重要な分野であるが、その対象は多岐にわたり、自然科学的な現象のみならず、人文・社会科学的な要素も含むため、系統的に学習することに困難を感じる人が多いかも知れない。身近な水辺環境の問題から地球規模の水循環まで、興味深いテーマが多いものの、つかみ所がなく学習の進め方がわからない人も多いだろう。

基本は、「水循環」、「物質循環」、「水文誌」である。どのようなスケールにし、まずは水循環のプロセスと水収支を明らかにし、その過程での物質循環を探っていくことで、現象が読み解けるようになってくる。そして様々な要素が絡み合ってくる水文現象を理解するためには、「水に関する地誌」である「水文誌」を自分で書いてみることである。

つまり、小流域から大河川、湖沼や海に至るまでの水の動きを理解し、その過程で運搬されたり影響を受ける様々な物質の変化などについて学ぶ「水文学的視点」を身につけることがまず先決である。具体的には、降雨・浸透・貯留・流出・蒸発散などの各プロセスについての基礎的な知識を身につけながら、実際のフィールドで起きている現象についての理解を徐々に深めていく必要がある。

また、河川・地下水・湖沼・雪氷・海洋などの対象毎に系統的な知識を吸収することも重要で、流域形態・地下水盆・湖盆形態などといった「器」に関する知識から、温度・密度などの「水の物理」、様々な水質として表現される「水の化学」、水の中に存在する「生物」やその間で繰り広げられる「生物生産」、「食物連鎖」などまで、幅広く理解する「陸水学的」学習方法も有効である。

しかし、一方では、地理学において「系統地理学」と共に「地誌学」が地域を理解する上で大きな役割を果たすように、具体的な地域を対象とした「水文誌」をまとめてみることによる学習効果も大きい。つまり、「水文学」、「陸水学」の基礎知識を吸収しつつ、実際のフィールドで「水に関する情報」を整理、記載し、理解するトレーニングを続けることで、次第に力が付いてくるというわけである。

従って、教科書や参考書などの書物だけを用いた学習だけでは不十分で、レポートの課題などの具体的なテーマに対して、フィールドワークも含めた学習を進めていくことが重要となってくる。また、関連する「現地研究」はもちろん、多くの「巡検」や「野外調査」に参加して、具体的な観察や調査の方法などについても時間をかけて学ぶ必要がある。

特に、卒業研究として「陸水学・水文学」分野を考える場合には、上記のような学習の努力に加えて、「研究の学問的位置付け」を明確にするための「レビュー」に十分な時間をかけると同時に、データの収集・整理・解析方法や現地調査の高度な技法など、身につけるべきことが多い。それらはとても独学で学べるものではなく、教員、先輩、同輩との切磋琢磨の中でやっと身につけることができる類のものである。

いわゆる「水ゼミ」では、毎週木曜日のゼミでの議論に加えて、年6回の卒論中間発表、年間数回のゼミ合宿、月1～2回の現地調査、年数回の様々な学会参加、他大学との合同研究発表会など、様々な学習の機会を提供している。

通学・通信の区別なく、住んでいる場所や年齢などにも関係なく、「海洋陸水学・水文学」に興味を持つ人なら誰でも参加することが可能で、実際、毎年様々な人達が参加している。他の大学や分野では得られない貴重な体験と「水環境」についての深い理解が得られるだろう。

(4) 文化地理学

標題から、何か具体的な方法を期待される向きもあろうが、ここではむしろ「心構え」に近いことをお伝えしよう。まずは以下の拙文をお読みいただきたい。ある年の正月明けに、私が今在住する長岡市の某所に求められて寄稿し、なぜかボツになったものだが、結構苦心して書いたので、口惜しいから(笑)ここに載せることにする。



『新しい年を迎えました。暇にまかせて正月のテレビを見てみると、「才能」のかけらもない「タレント」たちが温泉に浸かってグルメ旅、といったものばかりで、半日もたたずに食傷気味です。それでも、そうした類の番組の中で面白かったのは、正月らしくあちこちの家庭の雑煮の話題が登場して、やれ丸餅だ角餅だとか、汁の仕立ては白味噌だ、いや清ましたと、結構話が盛り上がっていたことでした。

香川の餡餅雑煮や、沖縄では基本的に雑煮はないことなどが、広く知られるようになったのは喜ばしいことです。しかも、興味深かったのは、そういった話に夢中の人たちが、決して自分の地方や自分の家のやり方が「正統」でよそのものが「異端」だ「常識はずれ」だなどと口走ったりせず、「ふーん、そういうのもあるんだあ」と単純に感心していたことでした。

自分ではごく当然だと思うことが、実はそうでなく、地域によってさまざまに違うことはたくさんあります。皆さんも思い当たることが一つや二つではないでしょう。私も先日、妻に言われて初めて、長岡のあるスーパーで1斤「5枚切り」の食パンが売られているのを確認しました。これは、もともとは関西地方のやり方で、関東地方では4枚切りや6枚切り、8枚切りなど偶数枚に切って売っているのが通常ですし、長岡でも今までは見かけなかったものですが、関西出身の人が増えてきて需要が生じたのでしょうか。

さて、食パンの切り方に「正統」も「異端」もないというのは、誰にでもすぐわかります。要は、枚数などには関係なく、パン自体が食べやすくおいしく安全であればいい。でも、他の場合はどうでしょうか。食べものばかりに地域差があるわけではありません。日常の慣習などの中にも実は地域差がたくさんあって、そういうものの中には、自分の習慣と違ったりすると単純に感心してばかりもいられず、相手(のやり方)を非難の目で見ってしまうことがしばしばあるのです。その最たるものが、宗教上の対立などでしょう。

地理学というのは、簡単に言うと、こうした身の回りのことがらに潜む地域差を知り、その由来や理由を考える学問です。「正統」だ「異端」だという価値判断からなるべく自由に。それがいったい何の役に立つのかと問われれば、そうやって自分の文化を相対化した上で、自分の責任でこれはというものを選択し、それによって自分の人生を構築するため、と答えます。とはいえ、地理学は食パンの切り方ばかりを調べている学問ではありませんので、誤解のないように。』

拙文をあえて詳しく説明するまでもないと思うけれど、ここにはみなさんが学部生の段階での文化地理学の学習にあたって、心得ておくべきだと思われることがいくつか含まれている。

◆文化地理学が(文章中では単に「地理学」としているが同じこと)「身の回りのことがらに潜む地域差を知る」学問だということ。

...まず、私たちの学問の題材、つまり文化は、日常生活の中にいくらでも転がっているということを知って欲しい。グローバル化などと昨今盛んに言われるけれど、最初からあまりスケールの大きなことに取り組むより、まずは身の回りの現象を考えてみよう。しかし、これが一見やさしそうで実はなかなか難しい。「身の回り」といったって、ただ首をグルッと回してみればいいというものではない。「違いがわかる」というのは古いふるいインスタントコーヒーのコマーシャルだったが、「差」を認識するためには、鋭敏な感覚と柔軟な発想とが要求される。自分の過去・現在の人生を顧みて、同時に自分以外の人のやり方にも注意を払わなくてはならない。深い充実した人生経験が必要とされる。また、実際に私たちが経験できることは限られているから、それを補う意味での広範な読書や旅などによる見聞の拡大、他人の話をよく聴くことなどが大切になる。

◆文化地理学は、そうした「身の回りのことがらに潜む地域差」の「由来や理由を考える」学問だということ。

...地域差のある現象が、運良く発見できたとしても、その由来や理由を説明するのはもっとずっとはるかに難しい。餡餅雑煮と清まし雑煮の違い、といってももちろん料理法や材料の違いではなく、なぜそれらが違う場所で見られるのかを、本当に説明できるだろうか？ またその場合、なされる説明が果たして正しいものかどうかはどうしてわかるのだろうか？

実はこれこそが、地理学の発祥以来、それに関わるもの全員が頭を悩ませてきた大問題なのである。地域差はあっても、それがなぜかを説明できる現象は、私たちの日常生活にはむしろごく少ないと考えた方がよい。理由なくして差がある、としてしまっただけでは、この学問の存在意義が失われるけれど、しかし、そうとしか言いようのないことも実際には多い。とはいえ「神のみぞ知る」という不可知論では、中世の暗黒時代に逆戻り。だから、なんとかして説明をつけようと頭をひねるのだが、それが行き詰まると、エイッとばかりにムリヤリ理屈をでっち上げることになる。あるいは、最初から理屈の方が先にあって、それに合致する現象を見つけて説明する、などということもある。よく言われる「自然環境決定論」というのがこの代表例である。そうならないためにはどうするか。実は私にもいい答えはない。ただ、そうならないように日々考え、答えを求め続けるだけである。

◆「正統だ異端だという価値判断からなるべく自由に」

...これも、なかなか言うは易く行うは難しい。相手を認めるというのは、場合によっては、それまでの自分の生き方を否定することにだってなりかねないからだ。私たちの暮らしは、合理性だけで成り立っているわけではない。意地とか慣習とか惰性とか思慮不足とか、どう見たって非合理的だと思うことも、日々行っている。いや、合理の「理」が一通りではないといった方がいいだろう。「何にも考えない」という考えだってある。「文化相対主義」というのは、20世紀に人類が獲得した最大の知的財産だと言われるが、これだってなかなか人類「共通の」財産になってい

ると思われたい。地球上のすべての場所で、「民主主義」が普遍的に正しいかといわれると、そうとはいえないところがあまりに多いのにすぐに気付かされる。

自然現象を扱う自然地理学の場合には、まだ比較的、このこと、つまり価値判断から自由になるのは、達成しやすい(とはいえ、ロシアの気候学者が気候区分をすると、モスクワは温帯になるというのは、やはり価値判断から抜け出すのが容易ではないことの証左だろう)。ところが、人文・社会現象については、これがはなはだ難しいのである。繰り返すが、場合によるとそれは、自分の生き方を否定し、それに根本的修正を要請することにもなるからだ。でも、それを怖れず、柔軟な思考力を養おう。



以上をまとめると、文化地理学の学習に当たっては、

- ① 豊富な人生経験が(もちろん各自の年齢なりに)必要だということ
- ② 短慮をつつしみ、できるだけ自分のアタマで考え抜くこと。
- ③ 自分の身についた価値観から自分をできるだけ解放すること。

の3つが大切だということになる。「なあんだ、別にどの学問だって同じことじゃないか」とつぶやいたあなた—あなたは鋭い！私が言いたいのは実は、そのことなのだ。

最後に、現在この分野の最先端を構成する一人、P=ジャクソン(英)の言葉を引いておこう。

「私が言いたいのは、(文化)地理学は、単に文化的多様性に関わる学問だとか、その多様性の説明のみにくみするものだとかではなく、(文化)地理学自体がまさに、文化を構成する基本なのだということである。」(“Maps of Meaning”1989、preface)

(5) 農業地理学

農業地理学それ自体の問題、次に農業地理学で対象とする現象・範囲という2点について述べ、それによって「農業地理学の学習」に関わる問題をご紹介します。

まず第1に、農業地理学それ自体の問題についてです。かつての「地名物産地理」の代表格がこの農業地理学のイメージでしょう。「～地域は野菜」「～地域はタバコ」「～地域は畜産」、果ては「～地域はコーヒーに適した土壌があるからコーヒー生産が多い」等々、つまらない事柄を習っていたような記憶が私にもあります。そんなことを学ぶだけの地理学ならば、家でテレビを見ていた方がまだマシということになりかねません。小学校でも高学年になるほど「地名物産地理」が嫌われるのも、つまらない記憶を要求されていた、あるいは未だ要求されているからでしょう。そうした知識に多少は立脚してその仕組みを考えていくのが農業地理学だと、取りあえずは申し上げておきましょう(なぜなら私も自信がない...)

さて今や日本では「モノをつくる」産業がかなり衰退し、それらを目にすることも少なくなっています。農業地理学の研究事例も研究者も減っています(農業地理学研究者の高齢化も著しい)。とはいえ農業を扱う他の学問分野も同様で、農業経済学でさえ、農業生産それ自体を研究する人は減っています。要するに産業として農業のウェイトが低下し、それにしたがって農業が

意識されなくなっていることがその背景にあります。

こうした中では農業地理学は既に不要の学問かといえば、決してそうとばかりもいえません（若干自信がないのですが...）。日頃、農業で生産されているモノ、つまり食料を口にしない人など、この世に存在しないはずです。農業それ自体に何の疑問も抱く必要がない状態ならば農・畜産物のトレーサビリティが試みられることなどありえないことですし、「食べ物」に関わるニュースが新聞やテレビに毎日のように登場することもないでしょう。いずれにせよ現実の生産現場と、農業と縁が薄くなった人々（つまり「われわれ」）との距離が、その現場との「地図上の距離」の上でも、認識の上でも遠くなってしまったことに近年の農・畜産物を巡る問題は潜んでいると思われます。農業はこうして今や風前の灯火、とまではいかないまでも、難しい社会状況の中にあるといえるでしょうし、それを対象とする農業地理学もその存在意義が問われているとも言えるでしょう。

第2に農業地理学で対象とする現象・範囲についてです。以上述べたことを踏まえれば、農業地理学で対象とする現象・範囲は、「食べ物」自体を見つめていけば、それに関連するものすべてがそれに該当することになります。研究テーマなどどこにでも転がっているはずですが、農・畜産物からはじめて、問題を突き詰めていけばよいのですが、その際まず考えなければならないのが「誰が生産しているのか」ということです。生産者は多くの場合農家の人々です。大半は農村に居住し、家族労働に基づき小規模な生産に従事しています。しかも農業だけで生活を維持できる人は近年ますます減り、兼業農家が大半を占めるに至っています。それら農家は全く自由に農畜産物を生産しているかといえば、それも違います。近年増加している非農家や他の農家とともに、変化している農村社会のその構成員として集落の決まり事に従い、つき合いをしながら農業をしているのです。水の管理などでは個人の自由に制限が加えられることすらあります。つまり、農村社会の仕組みを全く無視した農業地理学研究もあり得ないことになります。

では農業生産、農村社会を視野に入れておけば良いかといえば、それだけでも充分とはいえません。日本農業は弱まりつつあるとはいえ、政策との関連を無視することはできません。農家の意向とは無関係に、米の「減反」が強いられていることを考えればわかるはずですが、さらに、多くの農家は生産規模は小さいですから、自己資金だけでは設備の近代化はできません。補助や融資が必要となってきます。それらを政策に依存することにならざるを得ません。

さらに近年は輸入農産物が増え、それ故に外国との経済関係を以上のようなことの前提として知っておかなければならなくなっています。農家が使用する農薬による環境汚染も現実の問題として指摘されています。農家それ自体、農業生産、農村社会、農業政策、それを取り巻く日本経済、さらに日本経済を規定する国際経済、環境、という問題を常に踏まえなければ、1つの問題を考えることすらできなくなっているといわなければなりません。しかもそれらは相互に関連しあっています。

つまり、農業それ自体を取り巻き、それに影響を及ぼす要因が多面的、構造的に強まっているという今日、一局面だけを論じるにも多くの側面を考慮に入れなければならなくなっているの

す。多くの知識を持たないと、農業の生産現場に行くことも困難になりつつあるといえるでしょう。他の研究分野もそうでしょうが、多面にわたる知識を持ち、さらに現場でしか得られない事実を捉えるようにしなければならないのですが、私自身それができていないのです。

以上、駆け足で農業地理学に関する一般論を述べてみましたが、反省の弁ばかりになってしまいました。それにもまして近年の個人情報保護の潮流は、「調査」それ自体を重視してきた農業地理学の資料収集方法に大きな壁となって立ちふさがりつつあります。この先、農業地理学はいったいどうなるのかと心配も尽きません…。とはいえ「現場」はいろいろなことを教えてくれます。特に「現場の知恵」には、毎度毎度敬服するばかりです。今の世は、「現場の知恵」を封殺する、あるいは無視する風潮にあるようで寂しい限りですが、そうした「知恵」に触れたくて、「生産現場」についつい足を運びたくなってしまいうのです。

(6) 社会経済地理学

◆地理学って何

地理学ってなんだろう。この問いは地理学を学ぶ学生が一度は心に抱くものでしょう。私にとっては地理学を学び始めて以来、ずっと考え続けている問いになっています。残念ながら未だに答えは見つかっていません。でも、このような学問の基本に対する疑問とも言える問いかけをし続けることのできる地理学って、間違いなくユニークな学問であり、私自身、このことを結構楽しんでるのが実際です（皆さんも就職活動の時、必ず就職試験で「地理学って何」って聞かれますよ。少し気の利いた答えを用意し、その後続けて自分の研究テーマとその内容を答えることができたなら、きっと内定にぐっと近づくことでしょう）。世の中にはあまりはっきりした答えのないものって結構多いです。以下では私なりの地理学、そしてその一分野である社会経済地理学についての説明をします。

上で地理学に対する明確な定義がないような書き方をしましたが、それでも私なりの地理学の理解はあります。それはE. J. Taaffe (1974) のまとめに基づきます。厳密な引用ではありませんが、Taaffe は地理学を、①空間的視角、②地域論、③自然と人間の関係、の3つの視点から構成される学問であると定義しました。私はこの整理が好きで、今もこの整理に従った説明をしています。

Taaffe の定義に従えば、自然地理学は地球上で展開する自然現象を、人文地理学は人文現象を、それぞれ空間的視角、地域論、自然と人間の関係から説明する学問となります。人文地理学の細分野である社会地理学や経済地理学、さらには文化地理学、歴史地理学等もそれぞれこの3つの視点から対象とする現象を明らかにする分野と言うことができます。これですっきりと理解できる人はこの後の説明を読まない方がよいかもしれません。

◆社会経済地理学の視点

社会経済地理学という分野は法政大学文学部地理学科固有のユニークな設定分野かもしれません。他ではあまり聞いたことがありませんので。一般的には社会地理学、経済地理学と分けて考

えます。でも私はこの分野設定を結構気に入っており、またこの設定が地理学を考えていく際に重要な論点を提供してくれると思っています。

ちょっと話がずれるかもしれませんが、経済学や社会学と地理学の現象把握の違いってわかりますか。経済学の対象は経済現象、社会学の対象は社会現象と簡単に言うことができます。しかし、地理学の対象は地理現象であると言うと、なんかすっきりしない、肌に馴染んできません。地理現象という言葉が日本語としてこなれていないのでしょうか。

なぜ地理現象という言葉がこなれていないかと言えば、経済現象や社会現象と違って、地理現象とは経済現象にも社会現象にも、さらには自然現象にも見られるものであり、現象というよりは視点、視角という言葉で捉えた方がしっくりくるからだと思います。地理的視点、地理的視角という言葉は日本語でもかなりこなれていると思いませんか。

つまり、地理学は経済学、社会学といった他の学問分野と並列的に存在するというよりも、それらを一貫して貫くように存在すると考えた方が分かりやすいのです。そして経済学、社会学を貫きながら、それを地理的視角、地理的視点で捉えていく分野が社会経済地理学であると言えばよいでしょうか。こうした考え方は実は古くからあるのですが、残念ながら現在、必ずしも多くの支持を得ているわけではありません。でもこのくらい開き直って地理学を捉えた方がすっきりしてよいと思うのですが、いかがでしょうか。

◆社会経済地理学は何を問いかけているのか

社会経済地理学はオーソドックスには経済地理学と社会地理学をあわせたものと考えればよいでしょう。経済地理学が主に扱う分野は産業立地や企業の空間行動です。最近では消費者行動、さらには市民の視線から捉えた研究も増えてきました。社会地理学では人々が生活していく中で場所や空間の持つ意味を問いかけていく研究等が盛んになっています。

その上で社会経済地理学が何を問いかけているかを最後に語っておきたいと思います。地理学は元々他の学問分野を一貫して貫くように存在すると述べました。この意味をもう少し掘り下げると、それは単に経済地理学が経済現象を地理的に捉え、社会地理学が社会現象を地理的に捉えたものを後から足していけば、社会経済現象を地理的に捉えたことになるのではなく、社会経済現象をそのものとして丸ごと地理的に捉えていくことが求められているという点に繋がっていきます。地理学が他の学問分野に比べて必ずしも抽象度が低い次元の分析を得意とし、現象の現れる地域に結構こだわってしまうのは、世の中の複雑な現象をなるべく地域レベルでそのまま分析できないだろうかと日々苦闘している結果とも言えます。従ってさまざまな形で日々発生している社会経済現象を一方で純化して捉える努力をしながらも（これが一般的な学問的態度です）、絶えずその純化プロセスに疑いをもち、できるかぎり現象そのものを丸ごと捉える努力をするのが社会経済地理学、さらには地理学の醍醐味であると考えます。

です。地理学を学び、研究されるみなさんは、一方で他分野の研究動向に強い関心を持ち続けながら、対象とする現象をどのようにしたらより適切に捉える事ができるかに努力を傾けてください。その際、経済地理学だからといって経済現象だけに目を向けるのではなく（一度はち

ゃんと向ける必要がありますが)、捉えようとしている現象の社会的側面、さらには文化、歴史的側面にも光をあて、現象をより適切に捉えることに努めるべきです。もちろん、人間には限界がありますのであらゆる側面に目を向けることは不可能です。しかし、そうした複眼的な視点、視角が本来、地理学の得意としているものの見方、捉え方なのであり、社会経済地理学という分野の持つ積極性はそういう点にあると思っています。具体的な研究動向や内容はここではとても書ききれません。ぜひ授業や専門書、論文から学んでください。

(7) 歴史地理学

歴史地理学とは何だろう？歴史と地理がくっついている名前なので、高校までの社会科教科である「日本史」「世界史」「地理」とは、どんな関係があるのだろうか？そんなことを思う人も多いのではないだろうか。高校で社会科の選択科目を決める時、地理学科のみなさんは何を考えて選択したのだろうか。地理学科に進学したのだから、高校時代から「地理」に興味関心があって、全員が「地理」を選択していた・・・とならないのが、現在の状況であろう。その理由としては、以下のような点が考えられる。高校にそもそも選択科目として「地理」を教えられる先生がいなかったとか、国立理系への進学希望者クラスでは「地理」は選択できたが、文系用の「地理」がなかったとか、日本史や世界史のほうが大学受験の選択の幅が広がって良かったとか、あまり「地理」には興味はなかったが、とにかく法政大学に入りたかったので文学部地理学科を選んだとか、受験生にとっては様々な理由があると思われる。

歴史地理学とは、歴史学と地理学を足して2倍になったような？学問である。地理学科にあるので、「地理学」の一分野であると言っていいだろう。歴史的な事象に関心のある地理学者が主な担い手であるが、歴史学者・経済史家・古地図研究者・考古学者など、多岐にわたる分野の研究者が興味関心を共有しているところに特徴がある。そのため、レポート執筆や卒業論文などで歴史地理学的なテーマに関心がある場合は、そのテーマに関しては、地理学に限らず、歴史学・経済学・民俗学・社会学など、隣接諸分野の論文を幅広く読みこなす必要がある。

それらを踏まえたいうで、歴史地理学的方法で、そのテーマを考察していくことが課題となる。この場合、研究対象そのものよりも、むしろ研究方法にセンスが要求される。このセンスを磨くためには、それを教員が与えれば簡単にすむものではなく、誰にでも共通する手っ取り早いマニュアルはないが、やはり、関心のある事例について、関連した文献をきちんと読みこなし、史料を読みこなし、史料類をもとに事例の説明を論理的に組み立てるセンスを磨く、とでもいえようか。

歴史地理学の学習には、他の地理学の諸分野に比べて、デスクワークの占める割合が非常に多い。とにかく、文献や史資料をマメに収集し、ひたすら読みこなししていく努力を行えなければ何も進まない。本代や史資料の複写代をけちっているようでは話にならないのである

(というか、本好き・史料好きの人に歴史地理学は向いている)。こまめに図書館や資料館に通い、多くの文献や史資料を収集し、読んで理解していくことがまずは学習の第一歩である。同時に、これらの多くの作業が、法政大学の図書館や国会図書館、インターネット検索や自宅学習などで間に合う学習でもある。

次のステップとしては、実際に関心のある研究対象地域に赴いて、学習者が行うことは大きく二つある。

ひとつめは、国会図書館・大学図書館などの中央にある大きな図書館・資料館にはない、その地元でしか手に入れることのできない史資料類の収集である。この作業は、歴史地理学の学習にとって、非常に大きな位置を占める。多くの人が簡単に手に入れることができる、読むことのできる文献や史料類だけでは、オリジナルな分析を行うことは難しい。むしろ、あまり多くの人が読むことのできない史料類を手に入れることで、オリジナルな議論を展開することができるからである。そのためにも、特殊な能力（古文書や外国語の読解など）を身につけておくと、読むことの出来る史料の幅が広がることば言うまでもない。

ふたつめは、実際に研究対象地域を、現在の地図を片手に歩いて、過去の景観に思いをはせてみることである。具体的には、「現地研究」というかたちで、この学習を行うことがある。このことは、歴史地理学の学習者にとっては、文献・史料収集の補助的な作業にすぎないが、かといって、欠かせない学習作業でもあるといえよう。なぜならば、ある地理的・歴史的現象の舞台となった「環境」を、実際に歩いてみて、それを身を持って体験することは、文献や史資料を読むだけでは気づかない、重要なことに気づくかもしれないからである。これこそ、他の学問ではなく、地理学を専門とする学生諸氏のセンスが試されることかもしれないと思う。そして、研究対象地域から帰ってきたら、自宅で文献や史資料を読み返して、さらに考察を深めていくことが必要である。

以上のことから、歴史地理学の学習には、幅広い知識と視野、そして鋭い分析視点が要求されるともいえます。ぜひ、たくさんの本を読んで、その能力を磨いてください！

(8) 都市地理学

◆都市地理学とは？

都市地理学は人文地理学の一分野であり、文字通り「都市」に関連する事象を地理学として学ぶ分野である。したがって、広い意味では都市そのものを対象とする内容、あるいは都市で起こる諸事象を地理学的に扱う内容はすべて都市地理学といえよう。

ただし、一般に、都市地理学に分類される学習・研究内容は比較的新しい時代（第二次世界大戦後～現代、古くても近代以降）を対象とする場合が多く、古い時代を対象とするものは歴史地理学に分類されることが多い。これは、都市地理学が集落地理学から派生し、近代以降（特に第二次世界大戦後）に都市の発展および都市域の拡大が活発になる中で地理学の一分野として確立

されてきたためである。

また、内容が都市に関連していても、人口や工業、商業など特定のテーマに焦点が当てられている場合は、都市地理学というよりも人口地理学や工業地理学、商業地理学に分類されることが多い。ただし、これらの分類は排他的ではなく、また、便宜上行われているにすぎないといえよう。

◆「都市を」研究するのか、「都市で」研究するのか

阿部（2007）が指摘するように、都市地理学の研究内容は、「都市を」研究する内容と「都市で」研究する内容とに大別できる。換言すれば、前者は都市そのものを研究対象・目的とするのに対し、後者は都市を研究フィールドとするものである。近年は都市の様々な側面に着目する研究が見られ、後者の研究が主流となってきた。そのような研究の傾向があるとはいえ、都市地理学の学習の面では、両方の内容についてきちんと学ぶ必要がある。

◆カリキュラムの中での都市地理学

地理学科や教養教育センター（基礎科目）が開講する科目を見てもらえれば分かるが、現時点のカリキュラムでは「都市地理」と名のつく科目は開講されていない。では、都市地理学が学べないのかというと、そうではなく、私が担当する「社会経済地理学（1）」や「人文地理学特講（3）」などでは、都市地理学的な要素を盛り込んだ授業を展開する。もちろん、他の先生の授業でも都市地理学に関わる内容が扱われるので、詳細はシラバスなどを参照していただきたい。

◆学習上の留意点

では、実際に都市地理学（人文地理学でも同様）を学習するにあたり留意しなければならない点を以下に記す。

○テキスト・既往研究 都市地理学全般を学ぶには、まずは都市地理学の概説書を用いて学習し始めるのがよい。この種のテキストは初学者向けに書かれており、都市地理学で必須の内容が体系的に論じられている。さらに、可能であるならば、都市地理学の概説書を複数用いることをお勧めする。何故ならば、概説書といえども、それぞれに特色があり、そこから執筆された時期の流行（研究動向）や執筆者の関心が読み取れるからだ。

そして、その上で自分の関心に近い内容のテキストや論文を読むことで、その内容が都市地理学全般の中でどのような位置づけにあるのかが理解できる。

○資料 実際に自分でレポートや卒業論文を書くようになると、大なり小なり誰もが1つの課題に直面する。自分のやりたいテーマを遂行するには、どのような資料を用いて明らかにしていけばよいのだろうか。

そのような事態になって慌てないように、常日頃からどのような資料があるのか気を配っておく必要がある。例えば、テキストや論文など様々な文献を読む際に、どのような資料を用いて研究が行われているのかを意識しておくとうい。

また、一口に資料といっても様々な種類のものがある。地図資料や統計データ、写真などの画像資料、新聞記事や議会議事録などの文字資料など数多におよぶ。もちろん、現地に赴き、自分の

脚や眼を使って得られるデータもある。これら資料のデータは、そのまま使用するデータ、加工した上で用いるデータ、そして新しく自分で作るデータに大別できよう。それぞれの用途に合わせて用いることが求められる。

○フィールドワーク（現地調査） 都市地理学においても、やはりフィールドワークは必要不可欠である。上記でも示したように、フィールドワークを行うことでオリジナルなデータを作成することができる。

また、テーマによっては必ずしもフィールドワークを必要としない場合もある。しかし、そのような場合でも現地に赴くことをお勧めする。現地に行くことが分析内容に直接的には関わらないとしても、その場所の雰囲気などを知っておくことが、その後の分析や考察の際に役立つことが多いからだ。

フィールドワークのやり方は必修科目である「現地研究」の受講を通じて学ぶことができる。また、先生や先輩など他の人がどのようなフィールドワークを行ってきたのか話を聞くのもよい。その上で試行錯誤しながら、自分のテーマに合ったフィールドワークの方法を習得してもらいたい。

○分析・考察 都市地理学においても様々な分析方法があるが、重要な点は事実・現実に則して空間的に考えるということである。その際、基礎的であるが非常に効力を発揮するのが地図を用いて（地図化して）の分析である。ここで勘違いしてはならない。しばしば地図を描いて満足してしまう人がいるが、地図化作業は目的でなく、あくまで分析のための手段である。そして、安易に地図から読み取れることを指摘するだけに留まるのではなく、事象の背景や要因、影響、評価、予測なども含めて考察することを心掛けてほしい。

また、様々な空間スケールに則して考えることに気を配る必要がある。対象とする事象に応じて適切な空間スケールで分析しなければならないことは言うまでもないが、それとともに、同じ事象でも分析する際の空間スケールが異なれば、読み取れる内容や解釈が違ってくることに留意しなければならない。

さらに、1つの事象を評価する場合、立場・観点が変われば、その評価も全く異なることにも気を付けなければならない。それゆえ、複数の立場・観点到して物事を考えるように心掛けてほしい。

以上のような空間スケールおよび立場・観点に関わるマルチな分析・考察は日頃の心掛けで訓練できるものである。また、このような思考方法は実社会でも大いに役立つものとなるろう。

◆隣接学問分野との関係性

最後に、都市地理学に限らず人文地理学全般に当てはまることだが、隣接学問分野との関係性について記しておく。

都市地理学の隣接学問分野としては、都市計画学や都市工学、土木学、社会学、経済学、経営学、政治学、行政学、歴史学など非常に多くの学問分野が該当する。それゆえ、それら分野の基礎的な内容を学習することや、自分のテーマに関連する研究内容に目を配ることも必要となつて

くる。ただし、類似するテーマ・事象が扱われているとしても、立脚する学問分野が異なれば分析・考察も異なってくるため、都市地理学で指摘する内容と差異が見られることもある。その場合は、盲目的に他分野の内容を評価、あるいは批判することのないよう気を付けてもらいたい。

参考文献

阿部和俊（2007）：人文地理学のアイデンティティを考える―都市地理学を中心に―，人文地理 59-7、pp.52-66.

現地研究の風景～自然編～



2011年 福島（猪苗代湖）



2015年 長崎（軍艦島）



2016年 新潟（信濃川）



2018年 伊豆大島



2018年 伊豆大島

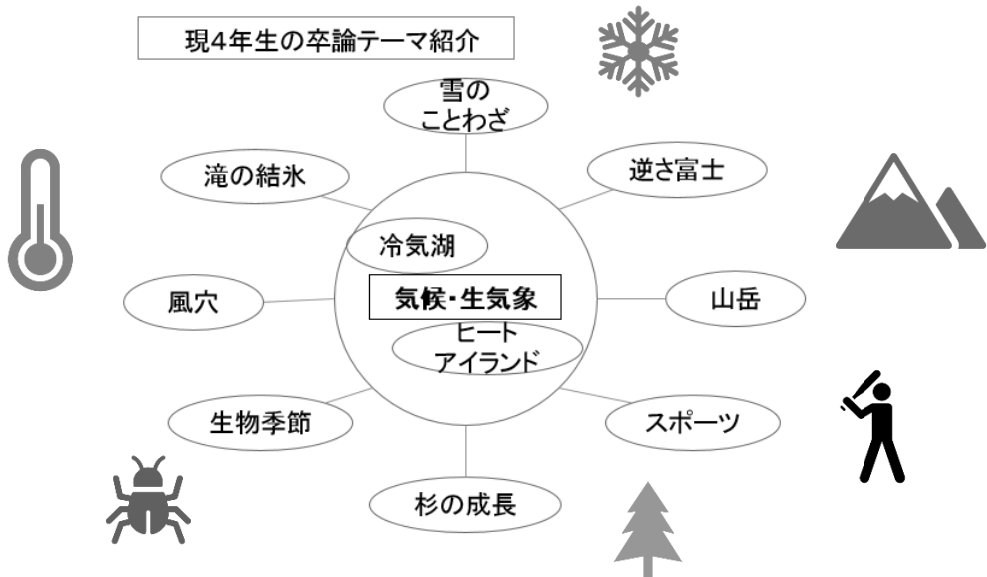


2018年 島根（隠岐諸島）

IV ゼミナールの紹介

「気候ゼミ」では

気候学と生気象学という2つの学問を中心に研究、議論しています。



現4年生の卒論テーマ紹介

雪のことわざ

滝の結氷

逆さ富士

冷氣湖

山岳

風穴

気候・生気象
ヒート
アイランド

スポーツ

生物季節

杉の成長

1. 年間スケジュール

	日頃のゼミ	イベント
4月	4年生卒論構想発表	3年生歓迎会
5月	3年生論文紹介	
6月	↓	
7月	4年生卒論中間発表①	
8月	夏合宿に向けた準備	
9月	3年生卒論構想発表	夏合宿
10月	↓	
11月	4年生卒論中間発表②	
12月	↓	
1月	3年生グループ研究発表	冬合宿
2月		卒論・ポスター発表会
3月		

*近年の活動をもとに作成しているため、来年度は内容が異なる可能性があります。

2. 合宿について

夏季と冬季、年2回の合宿を予定しています。2018年度の夏合宿では、奥日光で現地観測（気象観測、植生調査）を行い、2月のポスター発表に向け、準備を進めました。



日光特別地域観測所にて（2018年9月16日撮影）

3. 日々の活動

3年生は、ポスター発表（グループ）や卒論（個人）に向けた研究テーマを決め、1年かけて研究していきます。毎回のゼミでは2,3人ずつその研究過程を発表し、ゼミ全体で議論していきます。

4年生は卒論がメインです。通年観測を行う人は、3年次から開始しなければならないため、早めにテーマを決める必要があります。

気候ゼミは3年生、4年生、大学院生が合同で行っており、お互いに議論しあえる環境です。時には、厳しい意見にさらされますが、切磋琢磨し、成長することができます。

4. 学外での活動

気候ゼミでは他大学（筑波大学、東京学芸大学など）との合同ゼミや各学会で開催される「夏の学校」などに積極的に参加しています。また、日本地理学会、日本気象学会、日本生気象学会などで発表できるようにブラッシュアップを行っています。参加者は希望者のみです。日本生気象学会大会若手・学生コンテストでは、2年連続でゼミ生が優秀発表賞を受賞しています。

5. 終わりに

天気が好きな人、気象予報士になりたい人、生物、環境に興味がある人、大歓迎です。みんなで見学しながら研究していきましょう！

しばしば「水ゼミ」の愛称(?)で呼ばれる小寺ゼミ。今日は「地理空間情報解析」、「地域連携(街・地域づくりと学校教育)」、「フィールドワーク」、「ゼミの流れ」を中心にこのゼミを紹介します。インドア・アウトドア関係無く幅広い貴重な経験が出来るので、これからの大学生活を悔いなく充実させることができます。就活はもちろん、これからの人生において確実に力になる知恵も知識も身につけることが出来るのです。

「百聞は一見に如かず」、まずは気軽に木曜 4 限の BT1200 をのぞいてみて下さい♪

I はじめに

水ゼミって何してるの?」「てか、人いるの?」なんて皆様はお考えでしょうか(笑)。少人数で活動している上、BT12 階を住处としている現状は、後輩に対する PR 場面の少なさと表裏一体です。そんな神秘のベールに包まれている小寺ゼミの姿を、この紹介で存分に見せることができ、皆さんに興味をもっていただくと幸いです。

II 地理空間情報解析

近年、地理だけでなく工学の分野でも活用されている GIS (地理情報システム) や SIS (空間情報システム) を用いた空間解析を行っています。MANDARA や QGIS、ArcGIS を利用し自然的要素と人文的要素を重ね合わせて表現することで、複合的な問題を理解し解析することが可能です。また解析結果を分かりやすく伝えることができるので、専門外の人にも分かりやすく、地域との連携においては重要な役割を占めると言えます。

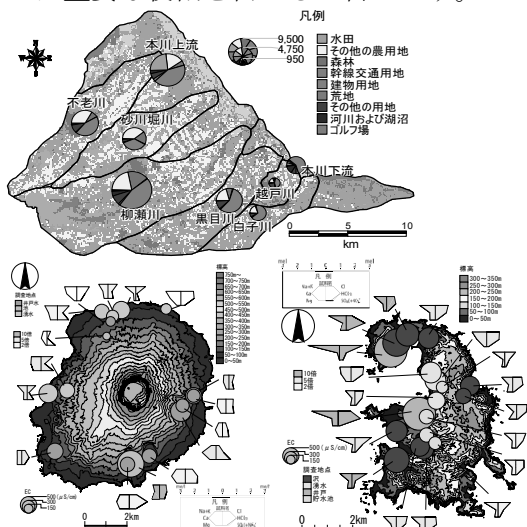


図1 GIS 解析図と調査結果分布図の例

III 地域連携(街・地域づくりと学校教育)

水環境をはじめとした自然環境を生かした地域づくりや街づくりを様々な機関と共同で行っています。地域の NPO や団体と協力し、産官学民連携の懸け橋として、街や地域に貢献しています。水質汚濁や流域環境の整備などの問題については、調査や研究を行い、整備の在り方や方向性について提言、また GIS (地理情報システム) を利用した水質マップや地域マップを作製しています。

また小学校の総合活動や中学校の部活動のお手伝いもしており、「身近な水環境問題」の題目で学校周辺の河川や地下水調査を一緒にしています。双方にとって価値ある経験ができ、特にゼミ生にとっては教育現場を経験できる貴重な機会です。

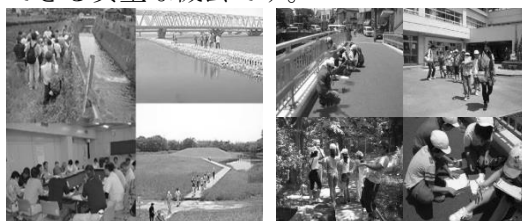


写真1 新河岸川流域川づくり連絡会(左)

写真2 小学校との連携の様(右)

IV フィールドワーク

水ゼミでは野外でのフィールドワークを盛んに行っています。地理学のような「地域」を対象とする学問においては現地におけるフィールドワークがもっとも重要です。「百聞は一見に如かず」という言葉がありますが、「地理学者、見てきたような嘘を言い」という言葉もあるように、「百聞」も同じく重要です。いうなれば、「百聞と一見を繰り返す」

ことこそ重要で地域科学・環境科学の神髄ともいえます。しかし、闇雲に現地に入るのは決して好ましくなく、予備知識を持たずしての「一見」は正しい理解を妨げることにもなりかねません。従って、座学で知識を得ながら経験者の指導の下に現地に入り、またその経験を踏まえて深く学ぶということが重要であるのです。特に水ゼミはそういった能力を養うのにはうってつけです。

水ゼミでは各ゼミ生が興味のあるフィールドで現地調査をできるのが大きな特徴です。今のゼミ生は身近な水環境から、壱岐・対馬といった島、御嶽・浅間・箱根といった火山地域での水環境等、様々な地域で現地調査を行っています。現地調査の成果は、ゼミや学会で先生や先輩方と意見を交換することでさらに学びを深めることができます。

最近では、現地での水環境調査以外にも福島県や熊本県での震災ボランティアにも取り組んでいます。実際に現地に行って活動に参加し、地域の生の情報を得るというフィールドワークの醍醐味を大いに感じるすることができます。また、フィールドワークの経験が少ない人でも経験豊富な先輩方がしっかりサポートするので安心して取り組むことができます。もちろん、折角遠出をするのですから地のモノを食べたり、見たり、温泉に浸かったりといった観光も出来ます。分野を問わず調査地域のあらゆることに触れることが大切なのです。



写真3 学校を飛び出した活動

V ゼミの流れ

- ① 3分間スピーチ
- ② 文献紹介
- ③ 研究紹介
- ④ 話題提供

毎週木曜日の4限に行われるゼミでは、水や自然地理学に関連する話題を簡単に紹介する「3分間スピーチ」や、学术论文の要旨を紹介する「文献紹介」をはじめ、「話題提供」や「調査報告(研究紹介)」なども加わり、ゼミ生みんながアットホームな雰囲気の中で自由に意見が交換できる環境のもと、活発な質疑応答を行っています。また、ゼミの時間外にも実験室で作業をするなど「大学で成長している!!」という充実感を味わえます。

VI おわりに

水ゼミは他にも様々な活動を行っています。年3回のゼミ合宿では、ゼミ以外からゼミOB、OGや通信教育生の参加もあり、幅広い年代の方々と交流することができます。また、ゼミ生が興味のあることならジャンルを問わずあらゆることにチャレンジできるバランスのよさをモットーにしているので、好きなこと・興味があることができるのも特徴の一つです。意外に思うかもしれませんが、卒論のテーマは人文・自然問わず、自分の属するサークルと連携した調査研究や歴史、文化や校歌などといった人文地理的な卒業論文もこの水ゼミにはあるのです。ゼミでの活動は大学生活を充実させ、自身の成長の場としてかけがえのないものとなり、その経験は確固たる自信につながると思います。少しでも気になったらまずは、「一見」してみましょ！木曜日の4限 BT1200 にてゼミ生一同、いつでもお待ちしております！



写真4 愉快的な水ゼミメンバーたち

1. ゼミについて

地形ゼミでは、地形分野を中心に自然地理学を学んでおり、マスマーブメント、氷河地形、海岸地形、津波、古地理などを、人文地理、自然地理分け隔てることなく様々な角度から自然現象を捉える事を目的としています。

☆卒業論文の例：

「三国山脈平標山における雪食裸地の形成プロセス」 「潮間帯生物を用いた旧汀線高度の測定」 etc

2. 活動内容

それぞれが興味を持った分野の論文を発表し、それに対して質疑応答を行い、地形について学んでいきます。

☆春学期： 3年生 自らの興味のあるテーマに関する論文（専門書）を発表・討論
例）地理学評論、第四紀研究、季刊地理、地質学雑誌、地形、火山、
地理科学、活断層研究等の論文雑誌から興味のあるものを選択

4年生 卒論構想を発表・討論

☆秋学期： 3年生 卒論構想を発表・討論

4年生 卒論進捗状況を発表・討論

☆不定期で週末に関東周辺でのフィールドワークや博物館見学等の課外授業（自由参加が行われる事もあります）

☆ゼミ合宿（夏・冬）

ゼミ合宿は、年2回行い、夏期は測量機材などを用いた実習や巡見を行い、冬期では4年生がそれぞれの卒業論文について中間発表を行います。

2015年度：千葉県御宿（右下の写真）、埼玉県秩父

2016年度：静岡県伊東（左下の写真）、山梨県南都留



3. 教授紹介

☆前杵英明教授

専門分野：地形、地殻変動、環境変動、第四紀、南極

海岸地形や地層から地殻変動や環境変動を明らかにする研究をしており、応用分野として環境文明史にも研究を展開しつつあります。

また過去に二度日本南極地域観測隊にも参加しており、自然・人文共に広い分野に対する見識をお持ちです。

4. 終わりに

主に地形分野についての研究が多いですが、植生や動物などの分野の研究など、自然地理学について、多岐多彩に扱っています。皆さんと一緒に楽しいゼミを作り上げていきましょう。



(写真は2016年度のもの)

文責：木森大我[2016年度ゼミ生]

人文地理学演習（1）

担当：片岡 義晴

人文地理学演習(1)の概要

通称：片岡ゼミ・片岡ゼミナール

教員：片岡義晴先生

キーワード：地理学,農業,経済,地域活性化

日時：火曜 5限

場所：富士見坂校舎 F402

人数：27名(4年生：13名/3年生：14名)

男女比：2：1

見学日：12月4日,11日,18日 5限(F402)



ゼミ合宿での集合写真

人文地理学演習(1)の活動内容

春学期：文献講読①(全員)・卒論構想(4年)

夏休み：ゼミ合宿(4年生の卒論構想がメイン)

秋学期：卒業論文執筆(4年)

文献講読②・論文紹介・グループワーク(3年)

比較的課題が少ないため、自主性が重要

→合宿(夏休み中に実施)も強制参加ではありません。

→積極的な態度が大事です！

☆片岡先生からも「自由です！」とのコメントをいただ

ております

文献講読：①では、「目に見えない世界を歩く(広瀬浩二郎)」、

②では「しなやかな日本列島のつくりかた(藻谷浩介)」を扱いました。

論文紹介：「荒茶工場の経営形態からみた荒茶供給構造(大石貴之)」

「長野県阿智村昼神温泉の地域活性化戦略とその課題(木村昌司)」など

ゼミ合宿：ゼミ合宿：片岡先生と学生 16名が参加しました(4年生：8名/3年生：8名)。

今年は静岡県伊豆の国市(伊豆長岡)で2泊3日に実施しました。

主に4年生の卒論中間発表でした。

3年生はグループワークのテーマ選定などを行いました。

研究や学習だけではなく、コンパなどを実施し親睦を深めました。



文献講読で扱った文献

(Amazonより引用)



しっかり学び、しっかり楽しむゼミの様子

片岡義晴先生について

専門：農業経済地理学(研究分野：茶生産・茶流通)

授業：ILC 地理学・基礎ゼミ

社会経済地理学(3)・人文地理学特講(2)など

論文：「学界展望 農林業」

人文地理 67(3) pp47-49 2015年6月

「愛知県渥美町における施設園芸の展開と農政」

法政大学文学部紀要(69) 2014年10月 等

☆大変温厚で、学生の意思を尊重しつつ、困っていたら助けてくださるので学生からの信頼がとても厚い先生です☆



こんな人に人文地理学演習(1)がおすすめ！

- ・農業に興味がある人
- ・地域活性化に興味がある人
- ・やりたい分野が決まってない人→実は農業や地域活性化は様々な分野と繋がっています
- ・自由にやりたい人→演習の中でも自由度が高いです

片岡ゼミは先生に温かく見守って頂きながら、学生主導でより良いゼミになるようにやっています。ゼミの雰囲気は非常に穏やかで、和気あいあいと活発に議論しつつ、日々学んでいます。農業経済地理学・地域活性化を主に扱っていますが、様々な社会的事象を扱っています。

そのため、学生の興味に基づいた様々な文献を扱うので多岐にわたる分野の理解が深められ、文章に対して背景まで読み込んでいく力や文章を批評的に読む力など、卒業論文を書き上げるための基礎的な力を養うことができます。

また、ゼミ生も様々なことに意欲的で、教職・資格課程履修者が多数在籍しております。専門知識がなくても大丈夫です。私たちと一緒に学んでいきましょう！

[文責：2018年度ゼミ生 3年小菅環]

I 基本データ

- 指導教員：中俣 均
- 所属人数：26人(3年生：17人 4年生：9人)(男女比 23：3)
- 開講日時：木曜5限
- 活動場所：BT0504
- テーマ：中俣先生のご専門である文化地理学を中心に、人文地理学全般を扱います。

II 年間スケジュール

春学期・秋学期をそれぞれ3年生タームと4年生タームに分けて活動しています。

	活動内容
4・5月	3年生ターム：論文の要約発表・論文に基づく議論
6・7月	4年生ターム：卒論構想中間発表
8・9月	ゼミ合宿：4年生の卒論構想発表(今年はつくばで実施)
10・11月	3年生ターム：課題図書の要約・発表
11・12月	4年生ターム：卒論構想最終中間発表
2月	学術大会にて卒論発表

※活動時期はゼミのメンバー数によって変動

◎論文発表

中俣先生が選んだ論文を、3年生のメンバーで構成される班ごとに要約し、発表します。発表時には論文を読んで疑問に思った点や、批判点を挙げ、それについてゼミ全体で議論をして考えを深めていきます。

〈本年度の論文例〉

- ・山本晴奈(2017)：名古屋市那古野地区における街路への鉢植えのあふれ出しと住民管理，地理学評論 90-2.
- ・南宮智娜(2017)：韓国と中国の旅行ガイドブックにみる東京の観光名所の出現頻度と空間分布，地理学評論 90-4.
- ・高田岬・吉田国光(2017)：石川県七尾市一本杉通り商店街における商業活性化策の展開，地理空間 10-2.

◎課題図書要約

中侯先生が選んだ課題図書を春学期の班で読み込み、発表します。本年度は柳田國男(1993)『明治大正史世相篇 新装版』(講談社学術文庫)が課題図書として設定され、来年度もこの本が課題図書として設定されています。

◎卒論構想発表

4年生がそれぞれの卒論の進捗具合を発表します。ゼミ全体に発表することで、先生からご意見を頂いたり、ゼミ生との対話の中で考えを深めたり新たな視点を発見することができる有効な機会となります。

〈中侯ゼミ昨年度の主な卒業論文〉

- ・ 戦争遺跡の保存活動と残存状況を活かした観光空間の創造—神奈川県横須賀市と和歌山県和歌山市を事例に—
- ・ 場所イメージ創出と活用に関する考察—「小京都」山口を中心に—
- ・ 千葉県船橋市・習志野市における商業地の役割—商業地の形成・変容過程を踏まえて—
- ・ 神奈川県箱根町における観光空間形成過程と場所イメージの関係性—観光開発主体の変遷と大手資本の動向を中心として—
- ・ 都市フォークロリズムによる地域伝統創出の可能性—東京都豊島区「ふくろ祭り・東京よさこい」を事例に—
- ・ 建物への地名命名行為に着目した場所イメージ変容に関する研究

Ⅲ 中侯ゼミとは

①書物や論文を「批判的に」読みこなす ②発表の際のレジュメを「説得的に」書く ③特定のテーマを特定の場で発表(プレゼンテーション)し、それについて「生産的に」議論するといった3点を意識しながら活動するゼミです。論文発表や課題図書発表、卒論構想を通して毎時間ディスカッションを重ねていきます。また、中侯ゼミは他のゼミよりゼミ内の課題が比較的少ないため、自分の興味がある分野の論文を読み進めることができるなど、自分の時間を有効活用したい人にオススメのゼミです。

ゼミでの学習以外では、年に数回ほど実施される懇親会や例年9月の上旬に行われるゼミ合宿でのコンパを通じてゼミ生同士の親睦を深める機会も用意されています。



1. どんなゼミ？

インフラや観光、まちづくりなどを基調とした、都市地理学をメインに研究を行っています。**積極性の高い学生が多いので、発言や議論が活発なところが大きな特徴**です。また様々な方面に興味を抱いている生徒が集まっているため、自分の知識や興味の幅が広がり、**多角的な視点から物事を見る力を養うことができます**。さらに、1年を通じてグループでの作業が多いため、仲間とコミュニケーションを取り、**協力する大切さ**を感じることができるのも魅力の一つです。

2. 基本データ

活動日 … 木曜5限（3年ゼミ）・木曜6限（4年ゼミ）
 活動場所 … BT1300 教室
 生徒数 … 3年生：17人・4年生：18人
 指導教員 … 小原 文明 先生

法政大学文学部地理学科准教授

専門は都市地理学（経済・社会・政治）

具体的には、都市（再）開発、都市形成・変容、土地所有など

専門以外の分野にも精通しており、多方面から生徒が集まってきます。年齢が若いので、生徒により近い目線で接してくれます。



3. 年間スケジュール（2018年度）

	3年ゼミ	4年ゼミ	イベント
4月	グループワーク		新歓コンパ
5月	文献講読	卒論制作	
6月	論文紹介	中間報告	春合宿
7月	↓	中間報告	納涼コンパ
8月			
9月		中間報告	夏合宿
10月	統計項目の検討		人文合同合宿
11月	方法論の検討	中間報告	
12月	卒論構想発表		忘年会
1月	↓	最終発表	新年会
2月	論文作成・ポスター発表		地理学術大会
3月			追いコン

○文献講読（3年・班発表）

先生が選んだ候補の書籍から、学生が読みたいものを選び、その内容や感想、論点をレジュメにまとめ、発表・議論を行います。今年度は4冊の文献の中から以下の文献が選ばれました。

野澤千絵（2016）：『老いる家 崩れる街 一住宅過剰社会の末路』講談社現代新書

○論文紹介（3年・個人発表）

各自が興味ある論文を選び、その内容や論点をレジュメにまとめ、発表・議論を行います。今年度は、交通、再開発、高級住宅、景観、サウンドスケープ、城中村、エスニック、地名など様々な分野の発表があり、地理学の汎用性を改めて感じられるものになりました。

○統計的分析項目・方法論の検討（3年・班発表）

特化係数、数量化理論、多次元尺度法、ネットワーク分析、クラスター分析、修正ウィーバー法、相関係数、回帰分析、主成分分析、因子分析などの定量的な統計項目を分析する方法や、実地調査、ヒアリング調査、アンケート調査、参与観察などの定性的なデータを分析する方法などを学びます。論文を読むときや卒論を書く際に必要な知識を得ることができるので、自分が扱えるデータの量が増え、今後の学生生活がより豊かなものになります。

○卒論構想発表（3年・個人発表）

卒論執筆に向けて各自がテーマを選定し発表します。現段階での興味の方向性を考えることで早いタイミングから卒論に対する意識を植え付けるとともに、それに関して様々な意見を受けることでより鮮明な構想や課題を見つけることができます。

○グループワーク（3年・班発表）

グループごとにテーマを定め1年を通じて調査を行い、最終的には学会のポスター発表にて成果を発表し、論文としてまとめます。基本的には授業時間外での活動となるため、論文作成のプロセスやグループでの協力、推進力を養うことができます。今年度は、エスニック、エリア特定、再開発、高級住宅地の4つのグループに分かれて研究を行っています。

○卒論制作（4年・個人発表）

学会に向けて、各自が月1で発表・議論を繰り返し、質の高いものをまとめ上げます。

4. おわりに

ゼミ活動は普段の講義とは違い、自分たちで物事を考え運営していく楽しさや難しさがあります。自分にとって何が一番適しているのか、成長するきっかけになり得るのか、どんな雰囲気でのゼミで勉強したいのか、よく考えるためにもぜひ一度ゼミ見学にお越しください。





2018 度 ゼミ合宿@鹿島

こんにちは。伊藤ゼミ 3 年ゼミ長の番匠七海です。

伊藤ゼミには今年度、3 年生 14 人、4 年生 7 人の計 21 人が所属しています。

男女比は男：女 = 2：1 ほどです。

授業は木曜日の 4、5 限に F 3 0 4 にて開講されています。

- ・伊藤先生ってどんな人？———人文地理学のなかでも、環境地理・社会経済地理を扱っています。しかし、例年 4 年生の卒論テーマは非常に様々な分野になっており、「研究したい分野が先生の専攻と違うから、やめておこう。」と思わなくて大丈夫ですよ。

- ・伊藤ゼミってどんなことするの？— 3年生は、春学期は自分の興味のある分野の論文の要約、現地調査の準備と実施（グループワーク）などを行います。秋学期には、自分が卒論のテーマとして取り上げたい分野の論文を読み、実際に卒論構想を行います。4年生は年間を通して、各自卒論構想を発表します。両学年ともに発表時には、伊藤先生や他のゼミ生からの意見を聞いたり、質問に答えたりします。
- ・伊藤ゼミってどんな雰囲気？—— 卒論構想発表などでは意見、感想、質問、反論など様々な発言が飛び交いますが、和気あいあいとした雰囲気です。また、わいわいと盛り上げてくれる人がいたり、コツコツ取り組む人がいたり、色々なタイプの人があります。「伊藤先生の研究分野を学びたいけど、自分に合っているかな？」と迷っている人は、1度見学に来て、雰囲気を肌で感じてみてください。



2017年度ゼミ合宿@長瀬ライン下り



2018年度ゼミ合宿@鹿島神宮参拝

では、教室でお会いできることをゼミ生一同、楽しみに待っています。

文：番匠七海

ゼミ教員 米家志乃布先生

2018年度 3年ゼミ長 芳賀燦人 副ゼミ長 小川真美

- ・活動日 毎週火曜日5限
- ・活動場所 BT1300（地理学実験室）
- ・学生数 3年16人 4年18人 計34人（2018年度）
- ・男女比 4：6
- ・専門分野 歴史地理、観光地理

2年生にとっては、「歴史地理学」の授業でお馴染みの米家先生。ゼミと現地研究は学科内随一の人気です。

先生のご紹介

静岡県出身 現在はご家族と京都で暮らしており、京都と東京を行き来しています。

書籍・出版

「日本人は日本をどうみてきたかー江戸から見る自意識の変遷ー」笠間書院 2015年 「北東アイヌのなかのアイヌ世界」岩田書院 2008年

「20世紀前半のシベリア・ロシア極東における植民都市と地図作製」法政大学文学部紀要（62）57-71 2011年など



2018年度ゼミ長のご紹介 芳賀燦人

宮城県出身 日本で初めて（自称）日本百名山を大学生で登りました。毎回ジムでベンチプレス 100kg を挙げてからゼミに来ます。



ゼミの概要

2017年度から、文部科学省の私立大学ブランディング事業「江戸東京研究の拠点」に法政大学が採択され、ゼミの研究活動として、それに参画しています。2018年度は江戸東京の観光について調査研究を行い、特に新宿区を中心に年代別のガイドブックを分析し、地域の変遷につ

いて研究しています。またデザイン工学部の景観ゼミと共同研究することで学部の枠を越えた活動を行っております。

ゼミ生の雰囲気

学科内唯一の女子の割合が多いゼミです。和気あいあいとしています。

飲み会

3年生は飲めない人が多くあまり成立しません。先生とゼミ長はのんびいなのですが。。。(笑) ぜひ誘ってくださいませ。



ゼミ年間行事予定

春学期

- ・課題書籍 「江戸東京の歴史・地理」の要約、発表
- ・3年生中心 法政大学ブランディング事業 江戸東京研究のグループワーク作業
- ・4年生 卒論構想と中間報告

秋学期

- ・3年生中心 法政大学ブランディング事業 江戸東京研究のグループワーク作業
- ・ゼミ合宿 (2回)
- ・4年生 卒論中間報告・卒論最終報告
- ・2月 法政大学地理学会学術大会 (卒論発表大会)

(文責：3年 芳賀燦人)



(左側)ゼミ合宿での卒論構想発表



(右側)グループワークでの作業

現地研究の風景～人文編～



2014年 愛媛（今治市）



2016年 徳島（祖谷溪）



2016年 京都（京都市）



2016年 岩手（二戸市）



2017年 愛知（名古屋市）



2018年 熊本（五木村）

V 卒業後の進路

1 地理学科生の就職について

地理学科からは、毎年 100 名前後の学生が卒業していく。一部は大学院に進学するが、ここ数年間の傾向を見ると、全体の 10% までには達していないようだ。ただ、これまでの実績から言って、法政大学で 4 年間地理学をしっかりと学び、頑張って卒業論文を書いた学生は、ほとんどこの大学院にも合格している。東京大学、筑波大学、首都大学東京、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学などなど、博士課程を持つしっかりとした大学院には大体合格している。法政大学の教員としては、法政大学の大学院に残ってほしいのだが、学生の希望はそうでもないらしい。また、将来的に中・高の教員や公務員を希望する学生には、2 年間の修士課程でよいから、大学院に進学するように勧めている。学部の 4 年間の知識だけでは、今後の教育、行政分野を生き抜いていくのは難しいと思われるのだが、いかがであろう。

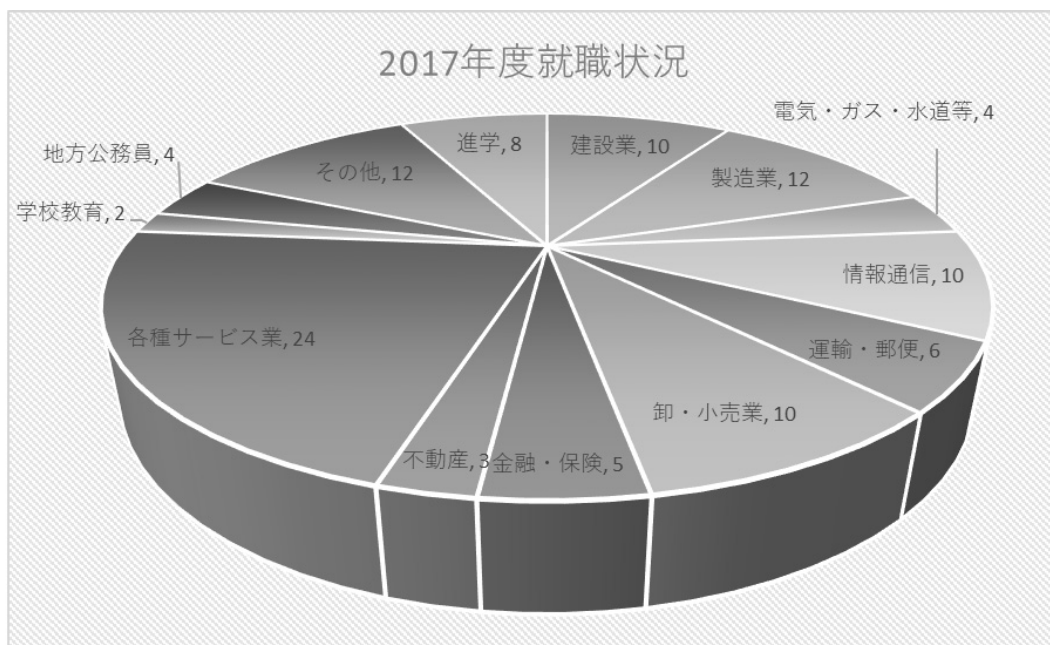
就職全般については、当分、楽観的に考えてよいと思う。もちろん、大学で何を学んだか、身につけたか、蓄積したかがよくわからない学生は別である。貴重な 4 年間、思い切り遊んでもいいと思うが、一方で、自分をしっかりと磨かないで過ごす、たちどころに企業の人事担当者に見抜かれてしまう。企業にとっての採用とは、就職した後、企業にどれくらい貢献してくれるか、どれくらい稼いでくれるかを見極める場である。企業にとって最も費用のかかる人材を採用するのであるから、いろいろな意味で、学生は自分がどれだけ企業の役に立つのか、稼ぐことができるかを見せつけなければならないのである。

現在、地理学科の学生たちの就職先の特徴は、一言で言えば多種多様である。具体的には下の図表を見てほしい。以前は、公務員（国家・地方）、中・高教員（公立・私立）と旅行代理店が部門としての「御三家」だったらしい。その後、教員希望者が減り、公務員試験の難しさが加わり、教員、公務員はそれぞれ数名程度になっている。高校での地理科目の必修化などを見ると、これからは教員になりやすい時代がやってくると思われるのだが、教員という激務、激職を希望する学生はなかなか増えそうにないのが実情だ。公務員も、地理学科卒業生の現場での評判は結構よいのだが、試験の難しさにたじろぐ学生が増えているのかもしれない。ただ、下の図表からは読み取ることができないが、大学院に進学した学生たちの就職先に、中・高教員、公務員（国家・地方）がたくさん出てくることを付け加えさせてほしい。上述したように、これらの職種には学部卒以上の専門知識が求められ、それは大学院に進学することによって適えられることが多いのである。

一方、民間企業は全業種に就職しており、かつてのような特徴が見出しにくくなっている。証券・銀行・生保などの金融関係への進出者が目立った時期もあったそうだが、やはり、少しでも地理的な職種ということで、鉄道会社やバス会社、旅行代理店を希望する者が多く、実際、大手企業にもすんなり就職している。もう一つ人気の業界としては地図製作会社がある。こちらは相思相愛とも言える状況で、毎年、地図製作会社から地理学科用の就職説明会の開催希望が出てくる。あと、測量会社なども地理学科学生の専門知識を評価してくれる業種と言えよう。

最後に、地理学科は日本において、いや世界でも大変マイナーな学科であることは間違いない。

そのため、学生は就職において不利ではないかと思勝ちである。しかし、現実には全く逆だ。「地理学科って何を勉強するの?」「地理学科でどのような卒業論文を書くの?」「先生は何を研究しているの?」これらが毎年、就職面接で交わされる言葉である。学生の皆さんはどれだけ答えられるだろうか。地理学科はマイナーだからこそ、必ず企業の人事担当の人たちの関心と呼ぶ。その時に何も答えられなければ、たぶん、縁は繋がらないであろう。他学部学生には決して聞かれることのない「地理学科って何?」。就職のためにも地理学をしっかりと学んだ方がいいのでは。



業種	人数	進路先 一例
建設業	10名	NECファシリティーズ株式会社 積水ハウス株式会社
製造業	12名	富士通株式会社 はごろもフーズ株式会社
電気・ガス・水道等	4名	北陸電力株式会社 東京ガスリビングホールディングス株式会社
情報通信	10名	株式会社NTTデータビジネスシステムズ 株式会社熊本放送
運輸・郵便	6名	ANAエアポートサービス株式会社 九州旅客鉄道株式会社 (JR九州)
卸・小売業	10名	株式会社そごう西武 イオンモール株式会社
金融・保険	5名	株式会社三菱UFJ銀行 三井住友海上火災保険株式会社
不動産	3名	住友不動産販売株式会社 株式会社東急コミュニティー
各種サービス業	24名	株式会社JTB 日本年金機構
学校教育	2名	国立大学法人山梨大学 学校法人品川女子学院 品川女子学院中等部・高等部
地方公務員	4名	石川県庁 立川市役所
その他	12名	未定者 アンケート未提出者
進学	8名	法政大学大学院 各国立大学大学院

2017年度の就職状況

地理学は記者生活に生きる

氏名：小野寺 隼矢

卒業年次：2011年3月

就職先：株式会社岩手日報社

地理学は楽しい。自然現象から世界各地の地域課題まで、興味と問題意識があれば、全て自分の研究対象にできてしまう。机上のみでなく、現場に行き、自分の目で対象を見ることで知的好奇心を満たすこともできる。

私は、高校時代に学んだ海外地誌が好きで地理学科に入学した。大学時代は長期休みのたびに海外1人旅に出掛け、20数カ国を訪れた。

旅の中で、それぞれの土地で暮らす「マイノリティー」に目がいくようになった。迫害に苦しむ少数民族がいる一方、他民族が融合した社会を築いている地域もある。その差はどこにあるかを掘り下げてみたいと思い、岩手県を対象とし、地方で暮らす外国籍住民の生活実態と地域住民に与える影響を卒業論文としてまとめた。

卒業論文は「重いイベント」だが、やりがいはあった。異なる立場の両者から話を聞き、考察を進める課程で新たな発見がある。見方を変えれば「取材」と一緒だ。

地理学科で学んだことが仕事の役に立つのか。人文地理を専攻しようと思う人なら、大小の違いはあれど、不安を感じることもあると思う。私も同様だった。だが、新聞記者として働いてきた約2年間で、記者職は地理学科で学んだことを生かすことができる格好の舞台だと思えるようになった。

岩手日報社は、岩手県民を主な対象とする地方紙だ。私は現在、世界遺産「平泉」を守備範囲とする一関支社に勤務。先輩記者と2人態勢で、国政選挙や自治体行政、事件事故火災やまちのホットな話題まで多様なジャンルをカバーする。

記者の基本は、現場に行くことだ。事件や事故、火事が発生したら昼夜を問わず現場に行く。一分でも早く現場に着けば、その分新鮮な情報を見聞きできる。その際、地図を正確に読めることができ、地名にも敏感な地理学科出身者は有利だ。

地域課題を掘り下げた記事を書く際は、立場の異なる両者の話を聞くことが何よりの基本。前述した通り、卒業論文執筆の課程と類似する部分だ。普段意識しないだけで、地理学科生はバランス感覚を備えた取材の基礎を学んでいるといえる。

最後に余談になるが、岩手県は東日本大震災で6000人以上が犠牲・行方不明になり、復旧・復興への道のりは長い。新たなまちづくりのため、本県入りしている測量関係者やコンサルタントには地理学出身者も多い。

地理学出身者の活躍の場は確実に広がっている。将来に過剰な心配をせず、毎日を存分に楽しんでほしいと願いたい。

将来を見据えて学ぶ

氏名：小宮山 貴大

卒業年次：2011 年 3 月

就職先：(株)ウェザーニューズ

私は地理学科を卒業してもうすぐ 2 年になりますが、今でも入学して間もないときに「地理学科の葉」を読んで、地理学科で何を学ぼうかと思ひ膨らませたことをはっきりと覚えています。私の記憶がそうであるように、地理学科の葉を読む人の多くは入学してすぐの方が多いと思いますので、ここでは私の地理学科での 4 年間と社会人になってからの 2 年間で振り返って私が思うことを皆さんにも共有したいと思います。

私は今、ウェザーニューズという気象会社で営業をしています。気象会社の営業という仕事はイメージが湧きにくいかもしれませんが、企業や自治体が抱える気象に関する業務課題に対して、それぞれの業務に合わせた気象情報の出し方、その情報の有効な使い方を提案して課題解決の手助けをする仕事をしています。気象はどんな仕事にも影響している要素でその影響力も大きいので、対価を払ってでも専門の気象情報を使うことでメリットがあると喜ばれることも多いです。

私が地理学科を選択したのは幼いころから気象が大好きで気象学を深く学んでみたいという理由でした。そうした理由で入学したこともあり、気象や気候に関する授業を選択したり気象予報士試験に挑戦したりと勉強に関しては気象・気候中心の生活をおくっていて、そんな甲斐あって大学 4 年生のときには気象予報士試験にも合格することができました。しかし社会人になった今では、気象予報士試験に合格することよりも、気象を「社会にいかにか活かすか」という発想をもって学習することがむしろ大切だったと感じています。そうした発想を学生時代にもっていたならば、好きな気象の知識をひたすらに深めたいという自己満足的な学習の仕方ではなく、現地研究やゼミ活動のような実習で「実習結果だけでなく実習の目的や方法のノウハウを身に付けよう」とか、「IT 技術が発展した現代で気象を使うには IT に関する勉強もしてみよう」とか、「気象情報の有効な活用を世界中に広めるために語学も身に付けよう」といった意識で勉強できたと思っています。これは幅広く

要するに私がこれから地理学科で勉強する皆さんに私が言いたいのは、知識を身に付けることを目的として学習するのではなく、地理学科で学んだことをどう活かすのかという意識を持って学習してほしいということです。将来のビジョンを描いて学習する方がずっと有効な 4 年間で過ごせるはずで

大学院に進学して

氏名：羽田 麻美	卒業年次：2008 年度博士 後期課程修了	就職先：日本大学文理学部地理学科・助教
----------	--------------------------	---------------------

私は 2009 年 3 月に法政大学で博士号を取得し、現在日本大学地理学科で助教として働いています。学生時代は漆原和子先生（2013 年 3 月まで御在職）担当の地形ゼミに学部 3 年次から所属し、博士後期課程まで法政大学には計 10 年間もの長い間お世話になりました。

私は博士課程も 4 年目を迎えようとしていた矢先、幸運にも現在の大学で職を得ることができました。現在の仕事は教育・研究活動に加え、日中は主に学生対応と教室運営の補助業務が主体となります。就職 1 年目は雰囲気も法政とは異なり、勝手がわからず戸惑うことも多かったのですが、事務仕事や実験室管理等にスムーズに取り掛かれたのは、学生時代に積んだ経験が大きかったように思います。というのは、学生時代（特に院生だった 5 年間）は、指導教授のもとで国内外の調査手伝いを数多く経験しました。特に、2003 年度から始まったルーマニア・スロベニアとの共同研究では、現地調査はもちろんのこと、研究費の執行方法を始め、国内外の研究者とのやりとり、会議の進め方やまとめ方、学術論文や報告書の書き方と、研究活動の一連の流れを全て間近で経験することができました。ここで多くの失敗を経験し、自分に足りないものを教わったことは、自分を見直し成長することにつながったように思います。

このように、指導の場は研究室だけに限らず、現場で物の見方や観察の仕方、現象の捉え方を教わること・考えることが多かったことは大学院時代に得た財産です。博士論文を仕上げる最終段階では、今まで以上に厳しい意見や課題を投げかけられ苦しい 1 年でしたが、今となっては独立した研究者になるための、最後の試験だったのだと感じます。

新入生の皆さんには、ゼミで発表することや、自分の意見を述べ他者と議論すること、わからないこと知りたいことがあれば、臆せず納得いくまでどんどん質問し自分の頭で考えること・・・これらをいくつも学生時代に経験してほしいと思います。これは例え研究職を希望しなくても、将来仕事をする上で役立つ経験になると思います。

博士号を取得してもパーマネントの研究職に就くことは厳しい世界であり、自分も任期付助教のため、5 年、10 年先の自分の姿がなかなか想像できない中で過ごしています。しかし、1 つでも多くの成果（論文）を出して次のステップへとつなげていくことが現在の自分への課題です。日々の時間はめまぐるしく、学生時代よりもあっという間に過ぎていきます。そのような中でも自分に言い訳をせず、業績を積んでいくことは大変な作業と感じますが、「この先 10 年の研究内容(成果)が次の 10 年につながる」という恩師の言葉を肝に銘じて、気を抜けない日々を送っています。法政大学地理学科卒業生で研究職に就く方が継続的に続き、後輩の皆さんと学会等で互いに切磋琢磨し合える仲間になればと願っております。

地理学と仕事

氏名：福手 暁人

卒業年次：2009年3月

就職先：日本郵便株式会社

新入生の皆さん、まずはご入学おめでとうございます。これから4年間（人によってはそれ以上？）市ヶ谷の地で過ごすわけですが、是非とも吸収できるものはすべて吸収していただきたいと思います。

私は旅行が好きで、大学生のうちに色々なところに行きたいと思っていましたし、卒業後もそういった職業に就ければと思っていました。地理学科に入学したのもそうした不純な動機でして、4年間を通じて現地研究やゼミ合宿、卒業論文作成のための実地調査と様々なところに行かせていただきました。アルバイトで新幹線の車内販売員をやってみたり、志摩スペイン村でパエリアを作ったりしたことも、学生時代にしかできない良い思い出です。

今、私は郵便局で働いています。といっても、皆さんがイメージされる『郵便配達員』や『窓口担当者』ではなく、主に裏方として、これまで監査や人事の仕事にあたってきました。郵便局は全国に約24,000局ありますが、それぞれにその地域性を背景にした個性があります。ユニバーサル・サービスの名の下、全国共通のサービスを提供していますが、提供の仕方は様々です。例えば、市ヶ谷の様な大都市であれば郵便局の窓口での手続きは早く終え、お客さまをお待たせしないことが『サービス』です。ですが、これが1日に何人もお客さまが来ないような地方の郵便局であれば、早くお客さまを帰すことよりも、お客さまの話を親身に聞き、より身近に感じていただくことが『サービス』となります。

人事として私が担当をしている局長たちと話をしても、都市部の局長がどちらかと言えばビジネス・ライクな付き合い方を望むのに対し、郊外の局長はより“濃い”関係性の方が喜ばれます。

地理学科で学んだことが直接今の仕事に活かしているとは、正直なところ思いません。むしろ、直接活かせる職業の方が世の中には少ないと思います。ですが、私は地理学科生のうちに日本各地の地域性に触れることができたお陰で、今の仕事でも机上の空論に留まることなく柔軟に地域性に応じた対応をすることができていると思っています。地理学と直接関係する職業が少ない一方で、地理学と全く関係のない職業が少ないのもまた事実です。地理学科で学んだことが無駄になることはありません。大いに大学生のうちに知識を蓄積していただき、それをご卒業後に活かしていただければと思います。4年間で学んだことがその後どう活かされたかは、それはご自身の中で結論付け、振り返ってみれば、それもまた楽しいことだと思います。

地理学科を卒業して思うこと

氏名：藤田 はるか

卒業年次：2016年3月

就職先：インクリメントP株式会社

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

地理学科では、五感で学んだという印象が強く残っています。所属していた小原文明先生のゼミでのグループワークでは、研究目的を達成するために班員でフィールドに出ることが欠かせませんでした。自分の目で見て、土地の雰囲気を感じたことは卒業して3年が経つ今も色あせない学びとなりました。必要な情報を得るためには何をすべきか班員で主体的に考え行動した経験は、自分の経験値としても大きな財産です。現地研究で愛知県の農業や宮古島の地層をこの目で見ながら、先生や現地の方のお話を聞いたこともめったにできる経験ではないですし、印象に残っています。自分の興味対象に足を運んで研究につなげるということは、地理学科の醍醐味だと考えています。

私は現在インクリメントPという会社に勤めていますが、聞きなじみのない方がほとんどかと思います。カーナビゲーションをはじめとするデジタル地図の会社でして、地図のデータベースを制作する部署に所属しています。

「地理学は就職の役に立つのだろうか？」と不安に感じている方もいらっしゃるかと思います。今私が社会に出て感じていることは、どの学部学科であろうともこれまで培ってきた人生経験がものをいいます。地図業界に勤めてはいますが、学生時代の経験で一番役に立っているなど感じることはケーキ屋でのアルバイトです。アルバイトを通して社会に触れたこと、貴重な経験でした。先述したゼミのグループワークで主体的にフィールドに出て活動したこと、これも大変貴重な経験でした。これは地理学科で学んだからこそ身に着いたものです。置かれた場所で物事をどのように受け止め、どのように行動するのが大切だと思うのです。

大学生活はビッグバンドジャズサークルの活動にのめりこみ、正直なところ日々の授業はおろそかにしていました。フィールドに出て学んだことこそ鮮明に覚えています。テスト前に叩き込んだ知識は長くは身につかず、卒業してから日々の生活の中で「あのときの授業をもっと聞いていれば…」と思うことがしばしばあります。それだけ地理学は日常の様々な事象と絡んでいるのです。

社会に出てから何かのにめりこむ時間はなかなか取れませんし、再び学ぶ機会を得ることも簡単ではありません。後悔のないよう、遊びも学びも大いに満喫してください。自分を形成する新しいパーツをいっぱい集めて、素敵な学生生活になることを心から願っています。

地理教員になって

氏名：地庵 栗加

卒業年次：2018年3月

就職先：私立の中高一貫校(教員)

4年間お世話になった法政大学を卒業して早1年が経ちます。今は、昔からの夢であった地理教員として、中高一貫校で教鞭を執っています。私は小学生の頃から地図が好きで、休憩時間に地図帳を眺めていた記憶が今でも残っています。そんな好きな地理を仕事にすることができており、幸せな日々を送っています。

ふと、地理学科で過ごした日々を思い出します。様々な良い思い出がありますが、現地研究や現地調査が真っ先に浮かんできます。私は、前杵先生の地形ゼミに属していました。島根県に位置する「石見畳ヶ浦」に卒論の調査で行きました。そこには何千もの年月をかけてつくられた海岸段丘が広がっていて、過去の地震による隆起の影響も残っていました。そして現在も波による浸食が続いています。そこで私は、この地形に限らず、地球というのは過去から今へ引き継がれていて、未来へと繋がっていくものだと五感で感じました。机の上で学ぶだけではなく、実際に現地に足を運び体感できることが、地理学科の一番の醍醐味だと思います。

今、中高の現場で働いていると、地理に関心のない生徒も沢山います。その子達には、いかに地理は身近なもので学べば学ぶほど面白いものと思ってもらえるよう、日々研鑽しています。現在の高校生にとって地理は選択科目ですが、2022年からは「地理総合」として必修科目になります。地理学科に入学される皆さんご存じの通り、日本は環太平洋造山帯に属し、台風の通り道にもなっていて自然災害の多い国です。特に2018年は自然災害の多い年でした。このような事象がいかに身近なものであるか、どう向き合っていくかを子ども達の前で話しています。このように「地球上の理」でもある「地理」の重要性は少しずつ高まっているように思えます。また、私が授業で意識していることは、一回の授業で最低一つは地図を板書することです。字面だけを追うのではなく、空間的に意識し地図を読む楽しさも伝えられたらな、とも思っています。

地理学科に入学して、その後の就職について心配された方もいると思います。確かに地理学科で学んだことを直接活かせる職業は少ないですが、4年間学んだことは無駄にはならないはずです。有意義な4年間を過ごせるかどうかは皆さん次第です。大学卒業後の夢や目標から逆算して、周りに流されず充実した日々を創ってください！

卒業して気づく地理学科の魅力

氏名：木村 圭吾

卒業年次：2018年3月

就職先：前田建設工業株式会社

地理学科がある大学というのは多くありません。馴染みがない人も多く、在学中も卒業した今でさえ、「どうのことを学ぶ学科なの？」と聞かれることも少なくありません。そして地理学というのは、その中でも人文地理学や自然地理学等々、学べることは幅広く、おそらく上記の質問への答えは、学生の数だけ存在するのではないかと思います。

「三現主義」という言葉をご存知でしょうか。これは、主に製造業等で用いられる言葉で、「現場」に赴き、「現物」に触れ、「現実」を知ることで、問題の解決を図ったり、正しい意思決定を行うという姿勢や考え方を表すものです。

インターネットの普及によって、情報の収集は非常に容易くなった一方、情報の信憑性を確かめ、正しい情報を手に入れることが難しくなっているように感じます。

地理学科では現地研究や、卒論の執筆を通して、自分自身の足で現地に赴き、現実を見て知ることが出来ます。その中で、自分が現場に行かずして掴んだ情報が間違っていたり、現地の人と話したりする中で考え方が変わるといったことがあるはずです。

私は在学中、卒論調査で農家の方とのコミュニケーションを取る中で、農業の魅力を知ると共に、就農者不足や農家の労働力不足について肌で感じる事が出来ました。

こうしたフィールドワークを重視した学習によって、意識せずとも4年間で「三現主義」の考え方を身に付けることが出来るようになることが、地理学科の魅力であると思います。

地理学科での4年間

氏名：阿部 智代

卒業年次：2011年3月

就職先：月島食品工業(株)

私は卒業後、食品原料メーカーに就職しました。わざわざ食品「原料」メーカーと書きましたのは、食に携わる様々な仕事がある中で、私が属するのはB to Bの、一般消費者の目に触れる機会の少ない業界であるとお伝えしたかったためです。例えばどこのスーパーにも並んでいる有名なあの食品、我々原料メーカーの製品を使って作られています。皆さん知らず知らずのうちに、日々私の会社の製品を口にいただいているかもしれません。

さて、そのような食品原料メーカーに就職し、海外事業室というまだまだ出来たての小さな部署に配属されました。今は輸出の手配や出張者のためのサポートなど、事務系の業務を主に担当しています。

大学で学んだことを仕事に活かしているか？

一つは語学です。バリバリと使いこなすには程遠いですが、在学時に第一、第二外国語として学んだ中国語と英語の両方が必要な機会があるため、語学の授業は受けておいて良かったと思いました。もう一つは資格の勉強です。在学中に旅行業務取扱管理者の資格を取得したのですが、この時の基礎知識を出張者の航空券手配の業務に活かすことができました。

では、肝心の地理学はどうか？

残念ながら、直接的に地理学科らしいことは日々の業務の中にはないかもしれません。では地理学科にいた4年間は何かあったのかと振り返ってみますと、私の場合は、学び方、考え方、まとめ方などを、地理学を通じて経験する時間であったと思います。

必須科目や一般教養科目から、広く浅くその分野に踏み入り、自分の興味のあることに気付き、学ぶことができます。さらに選択科目でその興味を深め、時にはレポート等の課題を通じてテーマの探し方、検索やまとめの方法を学ぶことができますでしょう。

特に私は、地理学科ならではの授業の一つである巡検に、1年次からよく参加しました。泊りがけで日本全国あらゆる地域を訪れ、時には日本を飛び出すことも。実際に目で見て、歩くことでその地域への理解を深めていくこと、その楽しさと大切さを知りました。

やがて伊藤先生のゼミに入り、4年間の総仕上げとして、卒業論文への挑戦です。博物館学芸員の資格課程を受けていたこともあり、博物館をテーマとしました。自分でテーマや分析方法を考え、何度も何度も推敲して論文を書き上げるのは苦しいものでしたが、書き上げた時の達成感は今までにないものでした。

さらに卒業後、学会誌に載せてみてはと伊藤先生から声をかけていただき、4年間の集大成と思って書き上げた卒論を早々に解体し、更なる推敲を重ねました。書き上げた論文は「法政地理」という学会誌に載せていただきました。

さて色々と書かせていただきましたが、地理学科での4年間、私は興味のあることを探すために色々な授業を受けました。それらを直接卒論に活かしたか、仕事に活かしているかと問われると、必ずしもそうではありません。しかし、興味や大切なことへアンテナを張る習慣を身につけ、最初に述べました通り、学び方、考え方、まとめ方などを、地理学を通じて経験することができました。

最後に、機会があれば毎年の卒論のテーマをご覧になってみて下さい。テーマやジャンルの幅広さ、地理学の間口の広さに驚くはずですが、たった4年間ではまだまだ地理学の入り口に立てたに過ぎないかもしれません。それでも、その間口の広さゆえ、4年間を経て卒業する際には間違いなく一人一人それぞれが、「これが自分にとっての地理学だった」と胸を張って言えるものを得られるはずです。

さあこれからの4年間、勉強以外にも楽しいことはたくさんあるかと思いますが、ぜひ地理学を通じて学ぶことを楽しんでいただければと思います。

授業の風景



VI 学会

1 法政大学地理学会

1) そもそも法政大学地理学会とは

地理学科の皆さんの身近なところに、法政大学地理学会という地理学の教育研究に深くかかわる組織があります。この法政大学地理学会は、地理学や地理教育の研究ならびに会員相互の親睦を図るという目的で、1950年1月に結成された古い歴史をもつ学術団体です。

法政大学地理学会は学会という名が付いていますが、日本地理学会のような、もっぱら学術研究を目的とする団体とはすこし違って、おもに法政大学地理学科の学生・卒業生・教員などが中心となって運営している学会です。いわば学術研究の学会と同窓会の両方の性格をあわせもった団体といえるでしょう。

2) 法政大学地理学会は、どのような活動をしているのでしょうか

法政大学地理学会は、現在どのような活動をしているのでしょうか。学会の事業としては、①機関誌『法政地理』の発行、②「地理学会ニュース」、③研究発表会、④例会（講演会・巡検）などが主なものです。これらの事業を通して、在学生・卒業生・教員など会員相互の親睦や交流を深めたりしています。

『法政地理』という雑誌は、法政大学地理学会の機関誌です。原則として年1回発刊されています。会員は誰でも自分の地理学研究の成果を投稿することができます。ベテランの教員や研究者だけでなく、大学院生が修士論文を投稿したり、卒業生などが日ごろの研究の成果を発表したりする場としても役立っています。

「地理学会ニュース」は年に4回発行・配布されています。学会の行事や活動の報告、研究発表会などのお知らせなどの情報がこれに盛り込まれています。

年1回、ふつうは5月の土曜日に総会と講演会が開かれます。地理学科の学生は入学と同時に学生会員ですから法政大学地理学会のどのような行事にも自由に参加できます。地理学科や地理学会の掲示板（BT12F廊下）にそのつど掲示が出来ます。また、学会のホームページやfacebookも充実しています。

法政大学地理学会の例会は巡検であったり、講師を招いて行われる講演会であったりしますが、多くの現地研究はその分野の専門研究者が実施地域を案内しながら説明していただける、またとない勉強の機会であり、また先輩方とも親しく交流できる貴重な機会でもあります。ぜひ有効に活用してください。

例年の2月下旬には地理学科と共催で、事実上の卒論発表会となる「法政大学地理学術大会」を開催しています。

3) 地理学科学生にとって法政大学地理学会はどんなところでしょうか

地理学科の学生は法政大学地理学会とどのような関係にあるのでしょうか。地理学科の学生になると、「教育的配慮」もありまして、自動的に学生会員として登録されることになっています。地理学科の学生は在学中「学生会員」としていろいろな活動に参加することになり、卒業後には希望者が「一般会員」ということになることが可能です。

その背景には、地理学科と地理学会は相互に協力しあって、学生の教育や研究の場をつくる、学生は教室で教員の講義・演習・実験実習などの授業で学ぶだけでなく、法政大学地理学会の活動に積極的に参加することで、卒業生や研究者と交流を深めより広い見聞や知見を得ていただきたいという考えがあるからです。それが上記の「教育的配慮」ということになるのでしょうか。

4) 法政大学地理学会へのコンタクト

法政大学地理学会の事務局は法政大学文学部地理学教室におかれています。法政大学地理学会に関する問い合わせなどは、まず地理学科事務室（BT1213）にご連絡ください。また、法政大学地理学会担当の教員にご照会くださっても結構です。ホームページから問い合わせフォームで問い合わせることもできます。ただし、本会への問い合わせなどは伝達過程での齟齬やトラブルを回避する意味から、かならず文書（葉書、手紙、FAX、メール等）でお願いしています。

〒102-8160

東京都千代田区富士見 2-17-1

法政大学文学部地理学教室内

法政大学地理学会 宛

Mail:hoseichiri@hoseichiri.com

Fax:03-3264-9459

「地理学科の葉」 (第 11 版) 非売品

2019 年 3 月 31 日発行

発行所：法政大学文学部地理学科

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL 03-3264-9457 FAX 03-3264-9459